

白田町埋蔵文化財調査報告書第5集

# 原遺跡

——古墳末～奈良時代・平安時代集落址の調査——

平成元年3月

長野県南佐久郡白田町教育委員会



1 H2号住居址



2 H5号住居址カマド・土壙内土器出土状態

## 序

白田町教育委員会  
教育長 三石 晴夫

白田町の埋蔵文化財調査は、昭和48年井上遺跡の緊急発掘以来、昭和63年まで15年の節目にあたります。この間に調査した5遺跡は、いづれも学術上からも重要な意味を持つものといえます。

○井上遺跡は、昭和48年内に土地改良区の工事にかかわる緊急発掘調査として行われ、古墳時代後期の竪穴住居址及び縄文前期初めの遺物が発見されています。

○蛇塚古墳は、昭和60年町文化財調査委員会により、清掃調査を行ったおり、たまたま埋れ土の中から蕨手刀が発見されたもので、県下7例の内の一つとなった珍品です。

○五霊西12号古墳は、昭和61年農道整備関連事業の緊急発掘調査として行われ、奈良、平安時代の佐久平南限終末期群集墳として、銚子の金具などの出土品と共に貴重なものといえます。

○町内遺跡分布調査は、昭和61年から63年まで3ケ年にわたり、国庫補助事業として全町にわたって現地調査を行ったもので、総数194遺跡が確認されています。

○原遺跡は、農村総合整備モデル事業による農道拡幅工事にあたり、昭和63年6月20日から8月24日まで、記録保存と学術調査のため緊急発掘調査を行ったものです。第一地点は御幸神社付近で、弥生時代後期の住居址2棟や土壙、土器などが発見されています。第2地点からは、古墳時代末期～奈良時代、平安時代の集落があったことが判明し、石組の粘土カマドは、カメが二つかかったまま発掘され、中に食物と思われる穀類が発見されているなど、今後のふるさとの歴史を知る上で大きな役割とが期待されています。

本調査は、現地での発掘が農繁期にかかり、周辺の地権者並びに耕作者の皆様には大変ご不便ご迷惑をおかけしましたが、人類共有の文化遺産の保存調査について深いご理解とご協力をいただき、このような学術的にも価値ある調査が出来ましたこと厚く感謝申し上げます。

なお上記した発掘調査作業、報告書作成作業等に昼夜にわたりご協力いただいた多くの関係各位に対し紙上をかりて深くお礼申し上げます。

平成元年（1989）1月25日

## 例 言

- 1、本書は、長野県南佐久郡白田町大字田口字切合4853-1番地外に所在する原遺跡の調査報告書である。
- 2、本調査は、農村総合整備モデル事業による切合I区の道路整備に先だって、白田町教育委員会が実施した。
- 3、本調査は、三石延雄を団長とし、地元の長野県考古学会員有志を調査員に、白田町文化財調査委員、地元原、上中込、大奈良地区の方々の協力を得て実施した。
- 4、報告書作成の整理作業分担は、以下の通りである。  
現場遺構実測図作成——三石延雄・佐藤敏・島田恵子・北村大平・柳沢春子・岩松昭二  
報告書遺構実測図の整理・トレース——島田恵子・柳沢由美子  
遺物の洗浄・註記——篠原まさよ・有賀久江・志摩せい・篠原たけ子・柳沢春子  
三石延雄・佐藤敏・島田恵子  
土器の接合・復原——三石延雄・島田恵子  
土器の実測・トレース——島田恵子  
石器の実測・トレース——吉沢 靖  
図版作成——島田恵子・柳沢由美子
- 5、本書に掲載した遺構の写真は、島田恵子が撮影したものを使用した。出土遺物の撮影は、由井正氏（龍岡城保存会相談役）に御協力いただいた。
- 6、本書の執筆は、文責を文末に明記した。
- 7、本書の編集は島田が行ない、三石延雄団長が校閲・監修した。
- 8、本遺跡の資料は、白田町教育委員会の責任下に保管されて、白田町文化センターに展示されている。町民の皆さんに広く活用していただきたい。  
また、調査にあたり県文化課指導主事笹沢浩、太田喜幸先生のご指導をいただいた。調査中は、原区長の柳沢源次郎氏、御幸神社氏子総代表塩谷鼎氏、水道を提供して下さった柳沢保・小林善晴氏、志摩ふじ子氏等ご近所の方々に物心両面にわたるご援助をいただきました。また、地主の井出泰輔・井出幸治・須江登次郎・小林祥一郎・森泉保男・秦江佐実氏の皆さんには深いご理解をいただき感謝申し上げます。さらに、町議会議員の小林昭治・志摩光一・小林吉江・草間周平議員さんにはご理解と励ましをいただきました。柳沢建設・竹内設備様にも種々お世話になり、各位の皆様方のご芳名を記して厚く感謝申し上げます。  
報告書作成については、文化センター館長北原佐久生先生、児童館の篠原千鶴子さんに長期間お世話いただきました。お礼申し上げます。



# 本文目次

題 字 .....	白田町教育長 三石晴夫
序 .....	〃 〃
例 言	
凡 例	
本文目次	付表目次
挿図目次	図版目次
第1章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る動機.....	1
第2節 調査の概要.....	1
第3節 発掘調査日誌.....	2
第2章 遺跡の環境.....	6
第1節 原遺跡の自然環境（地形地質を中心として）.....	6
第2節 考古学的環境.....	8
第3節 歴史的環境.....	13
第3章 層 序.....	18
第4章 遺構と遺物.....	20
1 弥生時代住居址.....	20
1) Y1号住居址.....	20
2) Y2号住居址.....	23
2 T1号特殊遺構.....	26
3 土 壙.....	27
1) D1号土壙.....	27
2) D2号土壙.....	28
4 古墳時代末期・奈良・平安時代の住居址.....	28
1) H1号住居址.....	28
2) H2号住居址.....	30
3) H3号住居址.....	40
4) H4号住居址.....	42
5) H5号住居址.....	46
6) H6号住居址.....	54

7) H 7号住居址	58
8) H 8号住居址	59
9) 耕作土出土遺物	65
第5章 考 察	70
1 遺 構	71
2 弥生時代以降の所謂ベッド状遺構について	72
3 お蕉げ・煤の付着について	77
4 薦編み重し石	79
5 土 器	81
6 原遺跡の歴史的考察	85
引用参考文献	91
あとがき	92

## 挿 図 目 次

第1図 原遺跡地形図及び発掘区設定図	5
第2図 周辺遺跡分布図	9
第3図 原遺跡検出遺構全体図	16
第4図 原遺跡層序断面図	18
第5図 Y 1号住居址実測図	21
第6図 Y 1号住居址出土土器実測図・拓影図	22
第7図 Y 1号住居址出土石器実測図	22
第8図 Y 2号住居址実測図	24
第9図 Y 2号住居址出土土器拓影図	25
第10図 T 1号特殊遺構実測図	25
第11図 D 1号土壙実測図	27
第12図 D 2号土壙実測図	27
第13図 H 1号住居址実測図	29
第14図 H 1号住居址出土土器実測図	30
第15図 H 2号住居址実測図	31
第16図 H 2号住居址カマド実測図No. 1	32
第17図 H 2号住居址カマド実測図No. 2	32
第18図 H 2号住居址出土土器実測図No. 1	33

第19図	H 2号住居址出土土器実測図No. 2	34
第20図	H 2号住居址出土土器実測図No. 3	35
第21図	H 2号住居址出土土器状態図	37
第22図	H 3号住居址実測図	39
第23図	H 3号住居址カマド実測図	40
第24図	H 3号住居址出土土器実測図	41
第25図	H 4号住居址実測図	43
第26図	H 4号住居址カマド実測図	44
第27図	H 4号住居址出土土器実測図	45
第28図	H 4号住居址出土鉄鍬実測図	46
第29図	H 5号住居址実測図	47
第30図	H 5号住居址カマド実測図No. 1	48
第31図	H 5号住居址カマド実測図No. 2	48
第32図	H 5号住居址カマドNo. 2実測図	48
第33図	H 5号住居址薦編み重し石出土状態図	49
第34図	H 5号住居址出土土器実測図	50
第35図	H 5号住居址出土薦編み重し石実測図No. 1	51
第36図	H 5号住居址出土薦編み重し石実測図No. 2	52
第37図	H 5号住居址出土凹石実測図	52
第38図	H 6号住居址実測図	54
第39図	H 6号住居址カマド実測図No. 1	55
第40図	H 6号住居址カマド実測図No. 2	55
第41図	H 6号住居址出土土器実測図	56
第42図	H 7号住居址実測図	57
第43図	H 7号住居址カマド実測図	58
第44図	H 7号住居址出土土器実測図	58
第45図	H 8号住居址実測図	60
第46図	H 8号住居址カマド実測図	61
第47図	H 8号住居址出土土器実測図	62
第48図	H 8号住居址出土石器実測図	64
第49図	耕作土出土土器実測図	66
第50図	H 8号住居址・耕作土出土大形打製石斧実測図	67
第51図	耕作土出土石器実測図	69



## 付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	10
第2表	H1号住居址出土土器一覧表	29
第3表	H2号住居址出土土器一覧表	36
第4表	H3号住居址出土土器一覧表	42
第5表	H4号住居址出土土器一覧表	46
第6表	H5号住居址出土土器一覧表	53
第7表	H6号住居址出土土器一覧表	56
第8表	H7号住居址出土土器一覧表	59
第9表	H8号住居址出土土器一覧表	63
第10表	耕作土出土土器一覧表	68

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

	1	H2号住居址
	2	H5号住居址カマド・土壇内土器出土状態
図版1	1	調査区第1地点近景
	2	調査区第2地点近景
図版2	1	Y1号住居址（東方より）
	2	Y1号住居址完掘状態（北方より）
図版3	1	Y1号住居址遺物出土状態・土壇
図版4	1	T1号特殊遺構（東方より）
	2	Y2号住居址（北方より）
図版5	1	D1号土壇
	2	D2号土壇
	3	調査区第1地点の2全景（南方より）
図版6	1	H1号住居址（南方より）
	2	H2号住居址（北方より）
図版7	1	H2号住居址カマド（南方より）
	2	H2号住居址カマド（北方より）

- 図版 8 1 H 2号住居址遺物出土状態
- 図版 9 1 H 2号住居址完掘状態 (南方より)  
2 H 2号住居址カマド
- 図版10 1 H 3号住居址 (北方より)  
2 H 3号住居址カマド・灰溜施設
- 図版11 1 H 4号住居址 (南方より)  
2 H 4号住居址カマド  
3 H 4号住居址遺物出土状態
- 図版12 1 H 5号住居址完掘状態 (東方より)  
2 H 5号住居址カマドNo.2  
3 H 5号住居址カマドNo.2
- 図版13 1 H 5号住居址 (西方より)  
2 蓆の重し石出土状態  
3 H 5号住居址カマドNo.1
- 図版14 1 H 6号住居址 (手前) 西方より  
2 H 6号住居址カマド完掘状態
- 図版15 1 H 7号住居址 (南方より)  
2 H 7号住居址遺物出土状態  
3 H 7号住居址カマド
- 図版16 1 H 8号住居址 (南方より)  
2 H 8号住居址完掘状態 (南方より)
- 図版17 1 Y 1号住居址出土土器  
2 Y 2号住居址出土土器  
3 H 1号住居址出土土器  
4 H 2号住居址出土土器
- 図版18 1 H 2号住居址出土土器
- 図版19 1 H 2号住居址出土土器
- 図版20 1 H 2号住居址出土土器一括セット  
2 H 3号住居址出土土器  
3 H 4号住居址出土土器・鉄鏝
- 図版21 1 H 4号住居址出土土器  
2 H 5号住居址出土土器  
3 H 6号住居址出土土器

- 図版22
  - 1 H 6号住居址出土土器
  - 2 H 7号住居址出土土器
  - 3 H 8号住居址出土土器
- 図版23
  - 1 耕作土出土土器
  - 2 H 6号住居址出土凹石
  - 3 大形打製石斧
- 図版24
  - 1 H 5号住居址出土の蓆編の重し石
- 図版25
  - 1 耕作土出土の縄文後期の土器
  - 2 耕作土・H 8号住居址出土石器類
- 図版26
  - 1 地鎮祭
  - 2 発掘調査団
- 図版27
  - 1 雨の中での現地説明会
  - 2 現地説明会の後、公民館にて懇談会

# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査に至る動機

原遺跡は、雨川の下流に発達した谷口扇状地に立地する遺跡で、白田町では最大の面積を有し、また、12基の古墳群が所在している大遺跡群である。畑、果樹園、人参畑地であったが、最近、工場や宅地化が進んでいる。

今回の調査は、農村総合整備モデル事業農道整備切合工区の農道拡幅工事のため、遺跡が破壊される事態となったため、昭和62年度より、県教育委員会文化課指導主事笹沢浩、太田喜幸先生の御指導を受け、町農林課、調査団と現地協議を重ね、町教育委員会では記録保存のための緊急発掘調査を実施することに決定し、昭和63年6月20日より調査に入った。

(事務局)

## 第2節 発掘調査の概要

- 遺跡名 原遺跡
- 所在地 長野県南佐久郡白田町大字原字切合4853-1番地他
- 発掘期間 昭和63年6月20日～8月24日
- 調査委託者 白田町農林課
- 調査受託者 白田町教育委員会
- 調査に関する事務局

事務局	三石 晴夫	白田町教育委員会教育長
	土屋 学	白田町教育委員会総務教育課長
	市川 昭治	白田町教育委員会社会教育係長

### ○発掘調査団組織

団長	三石 延雄	(長野県考古学会員・白田町文化財調査委員会副委員長)
副団長	佐藤 保	(白田町史談会監事)
〃	井出 正義	(長野県考古学会員・小海町文化財調査委員会副委員長)
担当者	島田 恵子	(長野県考古学会員・南佐久郡誌刊行会常任編集委員)
調査員	白倉 盛男	(佐久考古学会副会長・佐久史談会長)
	佐藤 敏	(長野県考古学会員)
	吉沢 靖	(長野県考古学会員・川上村文化財調査委員)
	篠原 浩江	(長野県考古学会員)

協力者 大工原 徹（臼田町文化財調査委員会委員長）  
北村 太平（臼田町文化財調査委員・臼田町史談会監事）  
有賀 久江・岩松 昭二・小林 やい子・篠原 たけ子・  
篠原 まさよ・志摩 志敏・志摩 せい・日向 くに子・  
柳沢 春子・柳沢 幸恵・柳沢 由美子・井出 竜三

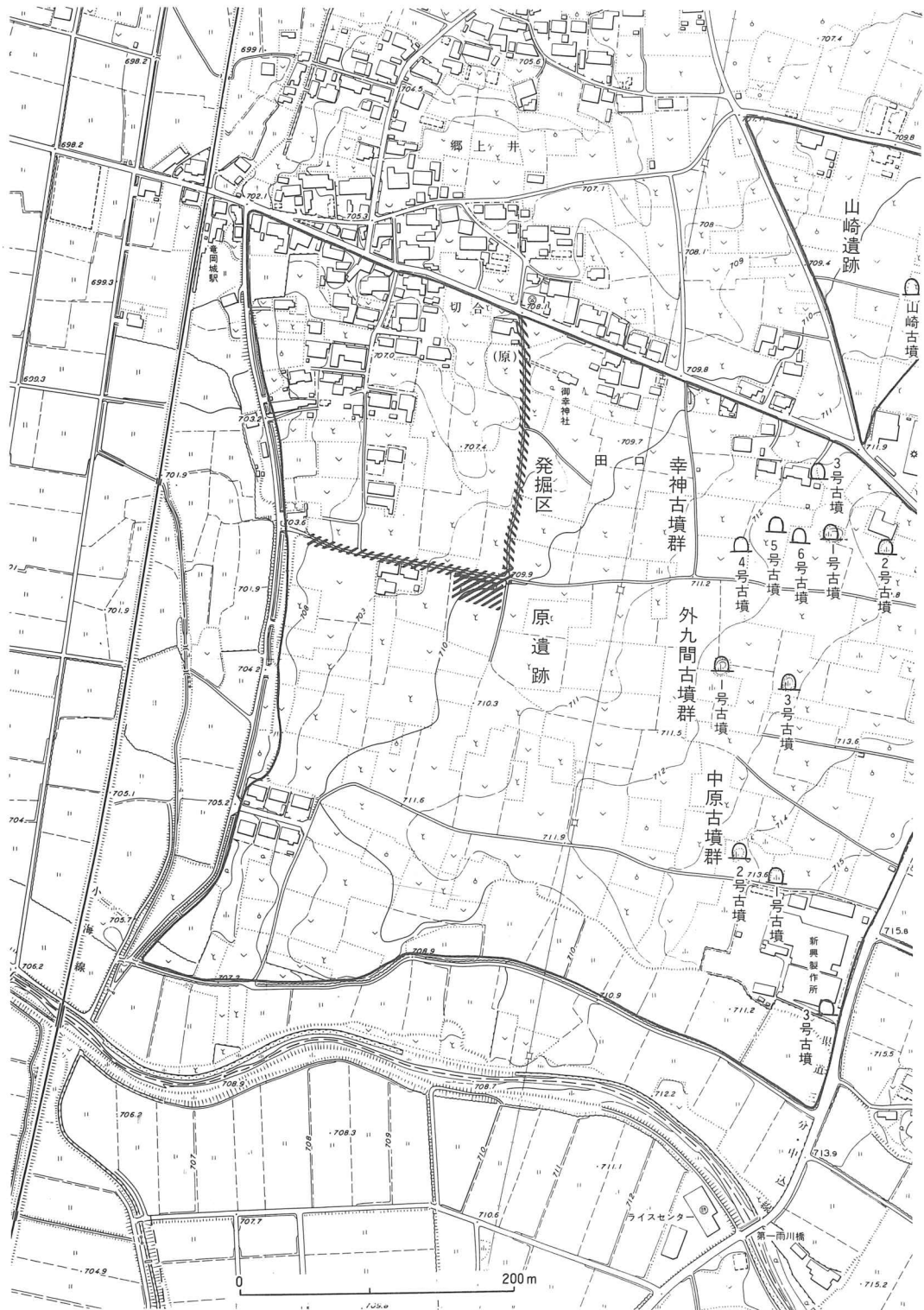
### 第3節 発掘調査日誌

- 6月17日 晴れ 午後よりテント張り。御幸神社の一角を借地し、草刈り、溝掘りを行なう。
- 6月20日 くもり 器材搬入。バックホーにより表土削平を開始。プラン確認に入る。
- 6月21日 くもり 本日より作業協力者現場に入る。表土削平。プラン確認。Y1号住居址の掘り下げ開始。文化財調査委員会の先生方が教育長と共に見学に見える。
- 6月22日 くもり Y1号住居址掘り下げ。土層観察のため深掘りを行う。道路試掘11地点行なう。
- 6月23日 晴後くもり 表土削平第1地区終了。Y1住掘り下げ。
- 6月24日 雨のため作業中止。テント内の清掃、整備を行なう。
- 6月25日 〃
- 6月27日 Y2号住居址付近の拡張。午前のみで雨のため解散。
- 6月28日 くもり Y2号住居址付近の拡張。
- 6月29日 くもりのち雨 Y2号住居址、T1号特殊遺構の掘り下げに入る。Y1号住居址掘り下げ続行。
- 6月30日 雨のため作業中止
- 7月1日 くもり Y1号、Y2号住、T1号特殊遺構の掘り下げ。
- 7月2日 晴れ Y1号住セクション。T1号セクションと遺物出土地点掘り下げ。Y2号住掘り下げ続行。
- 7月4日 晴れ Y1号住遺物出土地点の実測。Y2号住掘り下げ続行。T1号精査、清掃、実測、写真撮影。
- 7月5日 晴れ 10時より地鎮祭を行なう。
- 7月6日 晴れ Y1号住精査。Y2号住掘り下げ続行。固い粘土質の土と廃土のすて場がせまく、山に積み上げるので、一輪車を2人がかりで運搬する。
- 7月7日 くもり後雨 Y2号住の掘り下げ。
- 7月8日 くもり時々雨 Y1号住ピット掘り下げ。Y2住セクション。ベルトはずす。

- 7月9日 くもり Y2号住精査。遺物出土地点実測、ピット掘り下げ。
- 7月11日 くもりのち雨 Y2号住床面精査。
- 7月12日 晴れ Y1号住清掃、写真撮影、実測。Y2号住床面精査、清掃。D1号土壌の掘り下げ。
- 7月13日 晴れ Y2号住付近一帯の清掃、写真撮影。第2地点水道管付近の手掘りに入る。
- 7月14日 くもり 第2地点のプラン確認。第1地点の全体測量。協力者は午前のみ。
- 7月15日 雨 第1地点が終了したので遺跡の見学会を行なう。昨日より有線放送でお知らせしてあったので雨ではあったが行なう。約70人の方々が見学に訪れる。見学後公民館で懇談会を行ない熱心に遺跡についての説明を聞いたり、質問をしていた。
- 7月16日 くもり T1号特殊遺構のベッドの部分セクションおよび精査。Y2号住居址床面下の土壌の掘り下げに入る。写真撮影、実測を行い終了。
- 7月18日 くもり 第1地点の埋めもどし。第2地点表土削平。
- 7月19日 晴れ 第2地点表土削平、プラン確認。
- 7月20日 くもり時々雨 プラン確認。
- 7月21日 晴れ プラン再確認。黒色土層なので黒色土の落ち込みである住居址プランを確認するのは非常に困難である。
- 7月22日 晴れ H1号・H2号住の掘り下げに入る。プランのはっきりしない地点にトレンチを入れる。
- 7月25日 晴れ H1号・H2号住掘り下げ続行。H3号住プラン確認後掘り下げに入る。
- 7月26日 晴れ H1号・H3号住掘り下げ続行。H2号はH3号住に切られているのでI区・II区のみ掘り下げる。トレンチ掘りで住居の存在を南西側に発見。
- 8月2日 晴れ 担当者の急用で一週間現場を休み、本日より再開する。H1・2・3号住の掘り下げ。H3号住セクション、ベルトはずす。周溝の掘り下げ、壁を出す。H4号のプラン確認する。
- 8月3日 くもり トレンチ掘りで発見した南西側の住居址2棟のプランを確認。H5号・H6号住居址と命名。H3号住ピット、壁の掘り下げ。
- 8月4日 晴れ 暑くなり作業がきつくなる。H1・H2号住掘り下げ続行。H3号住カマドセクション、土壌掘り下げ、清掃。H4号住セクション、ベルトはずす。H5号住掘り下げに入る。H6号住セクション、ベルトはずす。
- 8月5日 晴れ H4号住カマド切解、ピット、床面、壁を掘り終了。H6号住カマド切解壁の精査。新たにH7号住居址を検出、掘り下げに入る。
- 8月6日 晴れ さらにH8号住居址を検出、午後より掘り下げに入る。H4号住清掃。H6号住カマド、周溝掘り下げ終了。H1号、H2号住掘り下げ続行。

- 8月7日 晴れ 日曜日であるが3人で出勤し、重複住居のH3号・H6号住の実測を行う。
- 8月8日 晴れ H7号住掘り下げ終了。H3号・H6号住清掃、写真撮影。H2号・H8号住掘り下げ続行。
- 8月9日 晴れ一時夕立 H1・H2・H8号住掘り下げ続行。H5号住カマド切解、壁、床面精査。H3号・H4号・H6号・H7号住午前清掃、午後写真撮影。
- 8月10日 雨のちくもり H1号住精査。H2号住セクション、カマド切解入る。カマドにかかったままのカメが出土する。H5号住カマド仕上る。H8号住セクション、ベルトはずす。深くて大きな住居址なのでベルトの土の量もたくさんあり時間を要す。夜、見学会用のプリント作る。
- 8月11日 雨のちくもり H2号・H5号住精査、仕上る。H8号住カマド切解、壁、床ピット、土壌を掘り下げて仕上る。全住居址と周辺の清掃。
- 8月12日 くもり時々小雨 町民見学会 午前80人、午後40人が見学会に訪れた。ちょうど夏休みやお盆休みで帰省していた郷土出身の方々の見学が特に目立った。
- 8月17日 晴れ H1号、H8号住を午前実測、午後は、H4号、H7号住とカマドを実測。本日より出土遺物の洗浄に入る。
- 8月18日 晴れ 朝から全員で清掃にかかり午後残りの写真撮影を行なう。H4号・H5号・H6号住カマド実測。
- 8月19日 晴れ H2号、H8号住カマド実測。H5号、H6号、H8号住カマド写真撮影。
- 8月20日 晴れ H2号住カマド、エレベーション図実測。H5号、H6号住カマド再度精査する。地層断面実測、全体測量を行なう。
- 8月22日 現場の最終的な精査。道具の手入れをする。
- 8月23日 道具、遺物のかたづけ、道路の整備。
- 8月24日 第2地点の埋めもどし。テントを撤去して現場作業を終了する。
- 8月25日 遺物の洗浄本日で終了。
- 9月1日～6日 遺物の注記
- 9月7日～27日 接合復元。
- 11月7日～18日 遺構図面整理、トレース。
- 11月28日～12月11日 遺物実測、トレース、割り付け、一覧表づくり。
- 12月12日～12月27日 原稿執筆、図版作成、編集 印刷入れる。
- 1月6日～1月20日 総括原稿、編集、残り印刷入れる。
- 1月20日～3月20日 校正、報告書刊行。

(島田 恵子)



第1図 原遺跡地形図及び発掘区設定図



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 原遺跡の自然環境（地形地質を中心として）

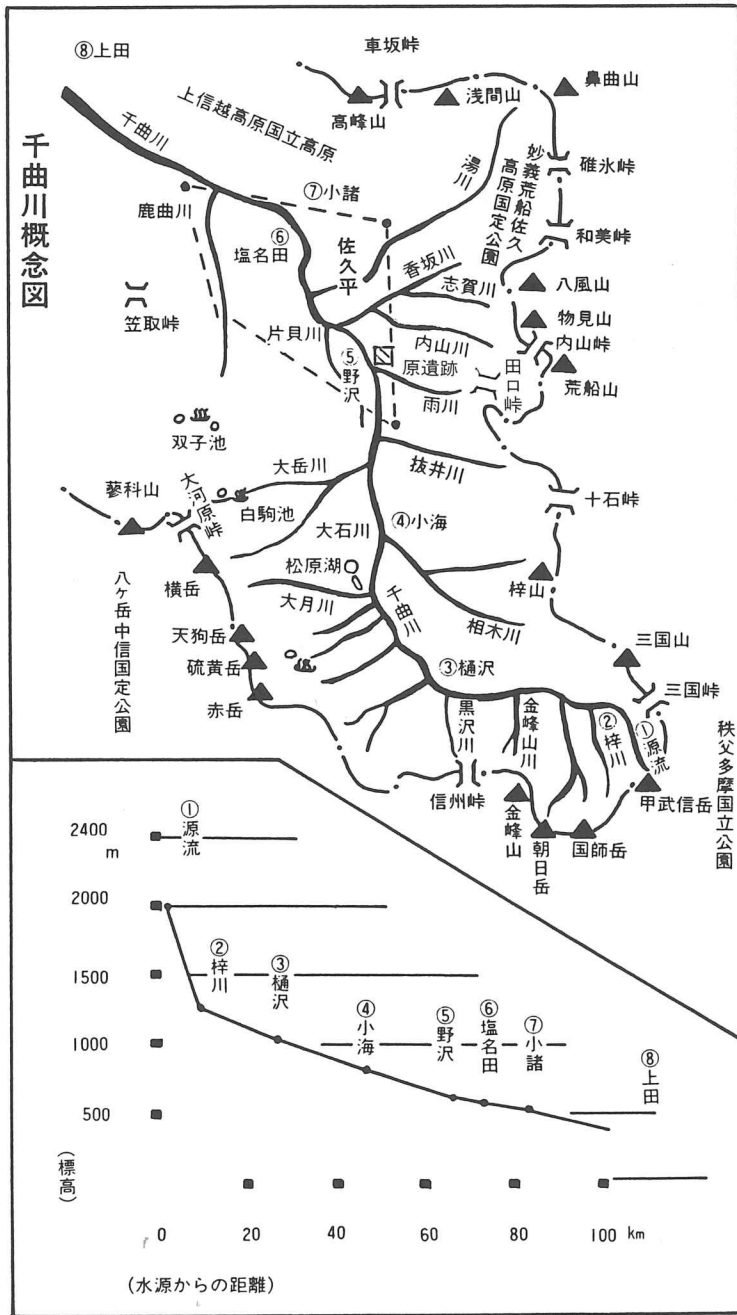
原遺跡は、臼田町田口原にあり、小海線竜岡城停留所東南方200m地点に立地し、この附近の標高は710m、佐久平東南隅にあたる千曲川支流の、雨川最下流に発達した谷口扇状地上の丘陵平坦地で、古くから拓けた畑作地帯が続いている。

雨川は、妙義荒船佐久高原国定公園の南縁部にある田口峠（1,104m）の、八合目から発源して、狭い谷間を蛇行をくりかえしながら西流し、南北両側からの小溪流を合せて、上中込部落南で千曲川に注ぐ支流である。南北両岸の尾根上には、水落観音・田口城山等の絶壁もそびえ、谷底は、はげしい蛇行をくりかえし、所々水をたたえた淵も作り、山の神地点では、大規模な治水ダムも造成され、風致も勝れて臼田町営保養施設“湖月荘”もある。

田口峠のある長野・群馬県境山地を、佐久山地と通称しているが、この北部は、妙義山・荒船山等旧期の火山活動によって構成された、奇岩絶壁のはげしい山地である。佐久山地の南部への連続は、茂来山・御座山・三国山・甲武信ヶ岳・金峯山へと続く、南東山脈の西北端の延長で、中生層・古生層の古期岩層地帯で、日本列島の背梁山脈は、2,000m級の高山が続いている。南部北部ともに、県界分水嶺を中心として高峰が続き、西方佐久方面へは、長い尾根を張り出し、千曲川沿岸までせまっている。ことに南部では、千曲川すじまで岩峯の張り出している部分もあり、佐久平は、臼田町を南縁として、それより上流は千曲川沿いにも、平地はほとんど見られない。

佐久平は、小諸市布引から臼田町入沢を長軸とした、千曲川の流路を対角線とし、佐久市中心部を短い対角線とした、長菱形の高原盆地であり、その南縁部に原遺跡が立地している。これがまた、弥生時代住居址分布・古墳分布の南限ともなっている。

雨川の最上流部の田口峠附近は、荒船火山の基盤である新生代第三紀中新世に属する内山層の、砂石・頁岩・礫岩が巨層をなして堆積しており、浅海性の貝化石産地も数ヶ所ある。田口峠トンネル・内山黒田附近が、それにあたっている。この内山層分布地域の上部へは、旧期火山である荒船火山が、長期にわたるはげしい火山活動による高熱火山灰の厚い堆積と、その再溶融による溶結凝灰岩（佐久石）を広範囲に、しかも厚く被って分布させている。佐久市安原・内山・平賀・臼田町三反田・入沢等の、佐久石採石場がJR小海線の車窓から見える範囲が、この溶結凝灰岩（佐久石）の分布地帯となっている。古くから建築土木工用・石造物原材として採掘され、佐久地方のみならず、他地方まで移出されて“佐久石”として知られている。昭和20年代までに、佐久地方で作られた石造建造物、石垣・石橋・石佛・石碑等は、全て“佐



久石”であると言っても過言ではないほどである。

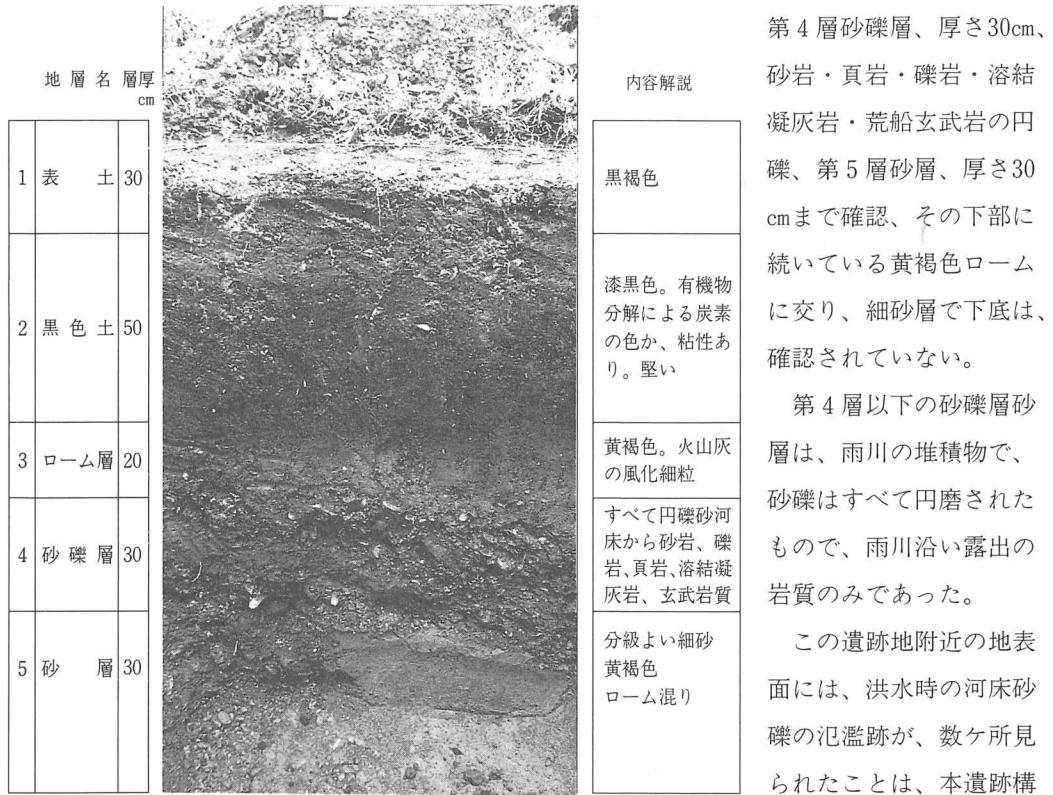
荒船火山は、火山活動の最末期に多量な塩基性溶岩を噴出して、溶結凝灰岩層の上部を被った。これは、高温で粘性に乏しかったために、流出と共に原地形面上を急速に流れて、冷却固結したために板状節理が発達し、噴出のたびに成層累積した。これを荒船玄武岩と呼んでいる。佐久地方では、俗称“うづまき石”と称し、平にはげ易い性質を利用して露地庭園などの、跳び石・敷石に活用している。これは分布が狭く限られており、水落観音・田口城山山頂部・雨川・内山川の両側尾根部など、荒船火山の火口に近い尾根上表面にのみ分布している。

従って雨川の河床礫の岩質をしらべると、砂岩・頁岩・礫岩・溶結凝灰岩・荒船玄武岩のみである。このことは、原遺

跡深掘トレンチ断面でも確認され、両川扇状地上面に築かれた遺跡であることが、実証された。

原遺跡現場での、深掘トレンチ断面観察の地層第1層は、表土厚さ30cmごとにも見られる黒褐色粘土まじり、第2層黒色土、厚さ50cm、有機質からの炭素の黒色強、固結度大、第3層ロ

原遺跡深掘トレンチ地層断面



一ム層、厚さ20cm、黄褐色微粒子火山灰の風化物、第4層砂礫層、厚さ30cm、砂岩・頁岩・礫岩・溶結凝灰岩・荒船玄武岩の円礫、第5層砂層、厚さ30cmまで確認、その下部に続いている黄褐色ロームに交り、細砂層で下底は、確認されていない。

第4層以下の砂礫層砂層は、雨川の堆積物で、砂礫はすべて円磨されたもので、雨川沿い露出の岩質のみであった。

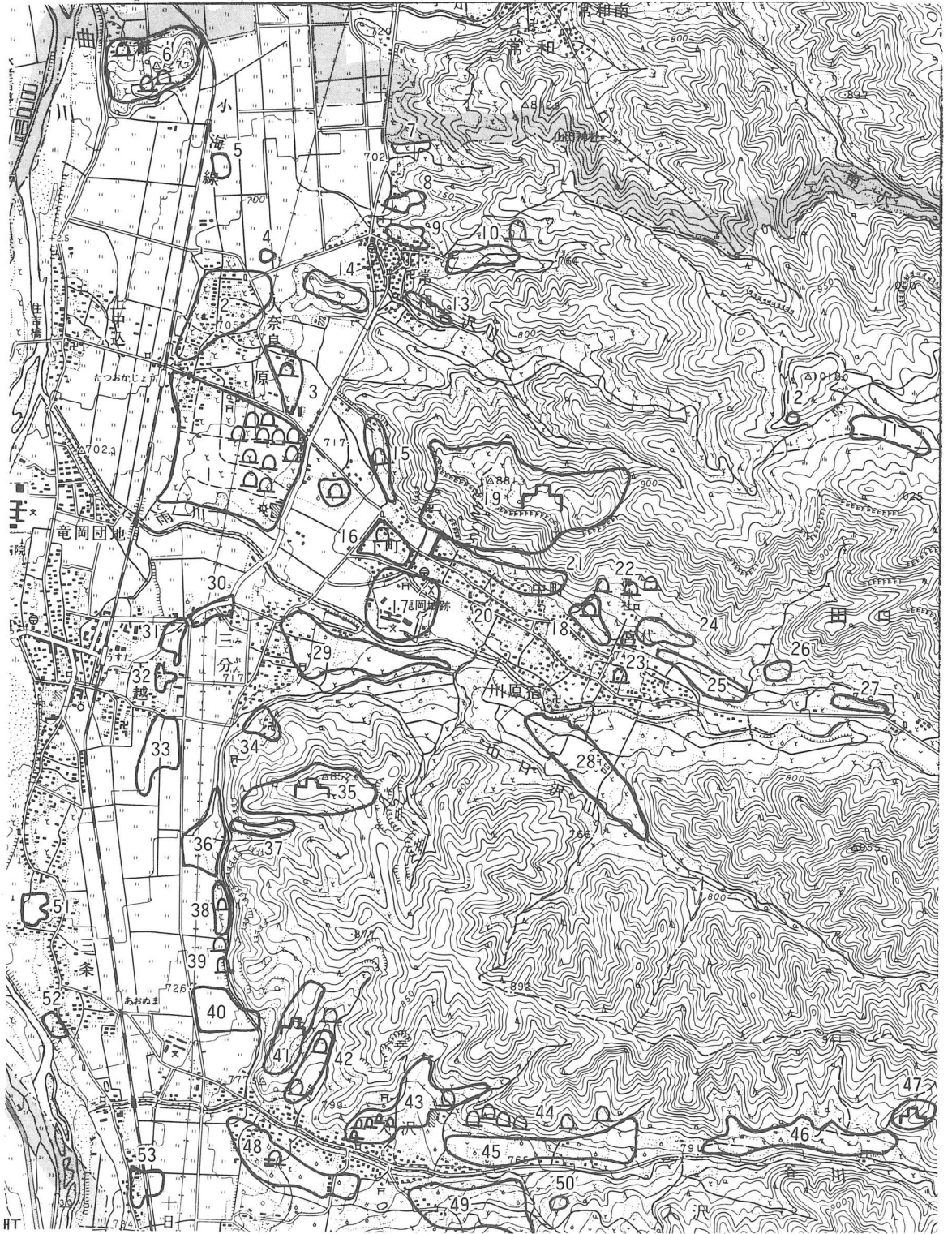
この遺跡地附近の地表面には、洪水時の河床砂礫の氾濫跡が、数ヶ所見られたことは、本遺跡構築時期には、雨川の運搬

力が強大であった事を物語り、これによっても谷口扇状地堆積が確認された。

(白倉 盛男)

## 第2節 考古学的環境

原遺跡は雨川右岸の台地上にあり、一帯の平坦な畑地で、その北方に原、大奈良部落がある。西方500mで雨川が千曲川に合流するが、千曲川にそう西方一帯の沖積平野は豊かな水田地帯となっていて、本遺跡との比高差は約10mである。原遺跡の東方は雨川沿岸の田口の谷平地につづいているが、次第にその巾を狭めて溪谷となり、約10kmで上信国境の田口峠に達する。大奈良部落の東方には関東山系の山地が迫ってきているが、その山麓に清川部落がある。原遺跡が所在する雨川右岸の原、大奈良部落を含む台地上を中心として、その東方の田口の谷平野、及び北方の清川を中心とする山麓線に古墳や遺跡が集中しているが、千曲川沿岸平野の北方、佐久市との境を画す離山の独立丘にも古墳群や遺跡がある。南方は雨川左岸台地上の三分から入沢につづく底位段丘面から山麓線にも古墳、遺跡の分布が高い密度を示している。



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				先土器	縄	弥	古	平安	中世	
1	原	田口原・外九間・切合他	河岸段丘			○	○	○		古墳群(幸神・外九間・中原)を含む
2	大奈良	大奈良・金石他	河岸段丘		○	○	○	○		
3	山崎	〃 山崎	河岸段丘			○	○	○		山崎古墳を含む
4	芝添	清川・芝添	河岸段丘		○					
5	中反田	大奈良・中反田	河岸段丘				○	○		
6	離山	上中込・離山	丘陵		○	○	○	○		離山1.2.3号古墳を含む
7	金原	清川・金原入	山麓			○		○		
8	はかせ久保	〃 はかせ久保	山麓					○		
9	清川	〃 部落内	山麓		○			○		
10	清川入	〃 清川入	山麓			○		○		清川入古墳を含む
11	芦内	〃 芦内	山腹		○					
12	芦内岩陰	〃 高戸や	山腹		○	○				39年発掘調査
13	吉沢堤下	〃 吉沢・堤下	山麓				○	○		
14	脇白山	大奈良 脇	丘陵		○	○	○	○		
15	明法寺	田口下町・明法寺	山麓		○	○	○	○		明法寺古墳を含む
16	割塚	〃 割塚	段丘			○	○	○		割塚古墳を含む
17	五庵	〃 五庵	段丘		○		○	○		五庵古墳を含む
18	神原道場	〃 中町・下神原・道場	山麓		○	○	○	○		
19	田口城跡	田口・城山	山頂						○	
20	竜岡城跡	田口下町・竜岡	段丘						○	
21	英田地畑	田口宮代・英田地畑	山麓				○	○	○	英田地畑古墳を含む
22	新海神社御陵古墳	〃 宮東	山麓				○			1.2.3号古墳を含む
23	宮代古墳	〃 上宮代	山麓				○			1.2.3号古墳を含む
24	宮東	〃 宮東	台地		○		○	○		
25	大工原	〃 上の平	台地				○	○		
26	明躰	〃 明躰	山麓				○	○		
27	日向大工原	〃 日向大工原	山麓				○	○		
28	山口	田口川原宿 岩瀬・山口	山麓		○		○	○		
29	三分	三分 塚田・谷地・芝宮・北手塚	台地		○		○	○		
30	西塚田	〃 西塚田	平地				○	○		
31	田中	〃 中川原	平地			○	○	○		
32	戸井口	〃 上川原・下川原	平地		○		○	○		
33	井上	〃 上の田	平地		○	○	○	○		48年発掘調査

番号	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				先土器	縄	弥	古	平安	中世	
34	遍照寺	三分 寺久保	山麓		○	○			○	
35	岩崎砦	"	丘陵						○	
36	荒巻	" 荒巻・薬缶田	平地			○	○	○	○	
37	小山沢	" 小山沢	山麓		○					
38	山際	入沢 山際	山麓			○	○	○		山際1号古墳を含む
39	山際古墳群	" "	山麓				○			山際2・3号古墳を含む
40	和田前	" 池の端・和田前	山麓				○	○		
41	磯部城跡	" 磯部	山頂						○	
42	権現通	" 権現通	山麓				○			権現通古墳群を含む
43	五霊西・湯殿入	" 五霊西・湯殿入	山麓				○			五霊西古墳群を含む
44	天神平古墳群	" 天神平・宮林	山麓				○			一万窟18号・西の窟19号古墳を含む
45	下海戸・山の前	" 下海戸・上海戸	山麓		○	○	○	○		
46	月通沢・水石	" 月通沢・水石	山麓	○	○	○		○	○	
47	水石城跡	" 水石	丘陵						○	
48	月夜平	" 月夜平・原	丘陵		○	○	○	○	○	月夜平4号古墳を含む
49	馬寄・六角堂	" 馬寄・牧平・六角堂	山麓		○				○	
50	藤原	" 上藤原出口	山麓			○		○		
51	観正田	三条 観正田	平地					○	○	
52	南裏	" 浜茄子	平地					○		
53	東荒谷	十日町 東荒谷	平地		○			○		

このように原遺跡は南方は雨川、西方は比高差10mの千曲川畔の水田地帯と段丘で画されているが、北方は原、大奈良の部落内遺跡、東は田口の遺跡群につづき、南は雨川を隔てて三分、入沢の遺跡群があって、白田町川東地区の遺跡群、古墳群の中心的な位置を占めている。原遺跡内には幸神・外九間、中原の3古墳群があって12基の古墳が含まれている。その古墳の規模は白田町の古墳の中で最大級の大きさを誇るものである。既に石室を露出しているものが多いから盗掘をうけているものと思われるが、まだ未発掘であるからその解明と保存が急務となっている。原遺跡一帯は古墳時代から平安時代に及ぶ遺跡とされてきたが、今回の調査で弥生時代の住居址が新たに検出されたほか、古墳、奈良、平安時代の住居址が確認されたことは古墳群の性格を究明する上にも貴重な発見である。原遺跡の北につづく大奈良遺跡は部落内を中心に金石地籍を含み、現在ほとんど屋敷地となっているが、縄文から弥生、古墳、奈良、平安とつづく大遺跡である。その東方の山崎遺跡も弥生から平安にわたる遺跡で、現在は古墳が1基わずかに痕跡を残すだけであるが、かつて金環を出土しているという。

こうした原、大奈良遺跡を中心にして周辺をみると、縄文時代遺跡は離山、清川、芦内、芦内岩陰と山麓、山間に点在し、そのうち芦内岩陰は発掘調査によって縄文前期前半の木島式、関山式、弥生などの土器が確認されている。田口では明法寺、五庵、神原等の入口から大工原、山口、さらに奥の程久保、栗平、大からさわと雨川にそって田口峠の下まで分布している。

弥生時代の遺跡は離山、大奈良、脇白山、金原、清川入と東の山麓にまで及び、田口地区では妙法寺、割塚、神原道場と比較的入口部に分布している。もっとも弥生式遺跡の集中しているのは三分地区で、田中、井上、遍照寺、荒巻、入沢の山際と広域農道にそって分布がみられ、この付近が古代稲作の適地であったことを思わせる。弥生時代の出土遺物でもっとも注目されるのは離山の南麓から出土した4個の銅釧で、南佐久郡考古学的調査（昭和3年刊行）にその図版がのせられているが、現在はその所在が明かでないのが残念である。

古墳は離山に3基、山崎は1基痕跡のみとなっているが、清川入に1基新たに分布調査で確認されたのは貴重である。田口地区では割塚、明法寺、五庵等の古墳が原遺跡の古墳群に近接した附近にある。やや東に入った新海神社附近には英田地畑古墳、新海神社東、中、西御陵古墳、宮代1、2号古墳がある。そのうち英田地畑古墳からは発掘調査によって蕨手刀が検出され、この古墳が奈良時代のものであることが確認され、田口地区の古墳を解明する上で重要な資料となっている。原遺跡の古墳群も田口地区の古墳群もそのほとんどが新海神社所有地となっていることが注目される。入沢地区には山際、月夜平、権現通り、五霊西、湯殿入、天神平、一万窪、西の久保、舟久保等に合計20基の古墳が確認されている。このうち五霊西12号古墳からは奈良時代の有位の役人が帯びていたと考えられる銚帯の金具が鉸具1、巡方1、丸鞆2の4個出土している。岩水部落東方の舟久保20号古墳は曾原（佐久町）の入沢20号古墳と共に、千曲川東岸に於ける古墳分布の南限をなしているなど、佐久の古代を考える上に重要な位置を占めている。

平安時代になると遺跡数は非常な増加を示す。原、大奈良遺跡を中心にして、北は離山、中反田、東は清川部落を中心として金原、はかせ久保、清川入、吉沢堤下、脇白山等山麓線に広く分布している。清川では「物部猪丸」の平安時代の銅印が出土していることが注目される。田口地区では明法寺遺跡から影丸山遺跡まで雨川右岸の山麓線に、ほとんど連続して11遺跡が分布している。さらに田口峠を越えた広川原にも遺跡があり、平安時代には新海神社から上州に通じる田口の谷の開発が進んでいたことが考えられる。三分、入沢の山麓線にも平安時代遺跡の分布は高い密度を示している。三条、十日町の千曲川の氾濫原にも遺跡が見られる。

中世遺跡は遍照寺、荒巻、五霊西、湯殿入、馬寄、六角堂、月夜平と三分から入沢にかけての山麓線に分布があり、さらに月通沢、水石、一つ石岩陰や滝日影など谷川上流の溪谷地帯にまで分布が確認されているのは注目されるが、これは入沢の三石延雄氏の多年にわたる調査努力に負うもので、今後の研究がすすめば、田口、清川等の周辺地区でも多くの中世遺跡が検出

されるであろう。永享12年（1440）銘文のある六地藏幢（重要文化財）が所在する十日町でも東荒谷、十日町の2遺跡がある。中世山城は田口城山の田口氏、相木氏の居城として知られる田口城跡があり、入沢地区には入沢城跡を中心にして、周辺に磯部城跡、十二山城跡、水石城跡等の砦がこれを援護するように谷川の谷の東西に配置されている。

原遺跡をめぐる歴史の考察には考古学的環境のほかに新海神社についてふれる必要がある。新海神社の祭神は諏訪大社の主神健甕御名方命の子興波岐命で、佐久郡開拓の祖神とされている。大河原峠と田口峠は、諏訪、佐久、上州を結ぶ古代交通路で、諏訪神社、新海神社・貫前神社の関係が注目されている。新海神社を中心とする田口・大奈良地区の古墳群と貫前神社を中心とする一の宮附近の古墳群との関係など今後の研究課題である。田口、原遺跡の古墳群の一つ一つが新海神社の所有となっていることは既に記した。

（井出 正義）

### 第3節 歴史的環境

原遺跡は、白田町田口原にあり、字切合、羽毛田端、幸神、外九間、中原地籍よりなり、隣接の大奈良遺跡と共に、白田町最大の面積15万㎡の広大な遺跡である。幸神、外九間、中原には、立派な古墳群が在り、古墳群を築造した人々の住居が近くに在った事が伺える。今回の発掘によってそれが現実のものとなった。

原地区は、長い間人家がなく、畑地として地味な肥沃で農作物は良く出来、大豆は、大奈良大豆と云われ、ゴウが多いと豆腐造りに珍重された。その後、経済の変動に依り、大麦・大豆の栽培から桑畑・薬用人参畑となる。特に薬用人参は、品質・形状共に郡を抜き、栽培者は、全国一と誇称した。しかし、時代の変遷は、農作物の価値感の底を抜き、肥沃な畑も荒廃たる荒畑となり、昔の面影はなくなった。

原に人家が出来はじめたのは、何時の頃か分らぬが、江戸末期であると思われる。江戸末期から明治にかけて、千曲川の度重なる氾濫により、災害を受けた上中込部落の人々が、移住したのが始めだと云われる。その後、国鉄大奈良駅が出来た時点で住宅が増加し、終戦後、佐久水道の導入、小中学校への通学の利便、とJR竜岡城駅へ近いと言う住宅条件の良さが、急速に住宅が出来、昭和初年頃40数戸を数えた住宅も、今では120戸程になり、益々増加の勢である。

遺跡内に御幸神社の社叢がある。社叢は、もと大奈良部落の氏神、春日神社を祀ったものであるが、明治43年の神社合祀令に依り、上中込部落の氏神、住吉神社を合祀し、地区の字名を取り、御幸神社と命名し、御幸神社が祀られている。春日神社の社殿は、大正8年10月1日の台風で傍の樫の大木の下敷となり破散し、その翌年、大正9年上中込の住吉神社の社殿を移したが、それも昭和36年の台風により大破し、現在のものは破損をまぬがれた一部分を利用して、



新しく造ったものである。従って彫刻等は、殆んど旧住吉神社のものである。拝殿も大正9年に改築され、旧拝殿は原公民館の一部として使用されている。境内に梵字の“アピラ”と思われる石碑があり、神仏習合時代を語っている。祭神は天児屋命。建御雷男之神、底筒男之神、中筒男之神、上筒男之神、息長帯北賣命の五神で、天児屋命は、藤原氏の先祖であると云い、建御雷男之神は、藤原氏の氏神であり、茨城県鹿島神宮の祭神であり、武甕槌大神とも云い、古事記に依ると、天孫降臨の祭、大国主命に対し国譲りの交渉され、大任を見事に果たされた大神と云われ、底筒、中筒、上筒男之神は、水中の底中上より、生れた神様で、水を治め水害、災難避の神様と云われる。息長帯比賣命は、息長足姫とも云われ、神功皇后の事である。

御神体は、御神鏡であり、藤原吉長、吉孝の銘が入っている。何時の頃造られたものか分からぬが、臼田町入沢の大宮諏訪神社の御神鏡も、吉長、吉孝とあるので、此の二社共に、同時期に建立されたものであろうか。

建御雷神については、次の様な事がある。古事記に依ると、伊邪那岐命が、迦具土神を斬った時、建御雷神が生まれ、またの名を布都神と申し、物部氏の祖経津主神である。先般、清川部落に物部氏の銅印があることが分り、何んらか関係がありそうに思われる。

奈良・平安の初期（延長5年1226年）の和名類鈔に依ると、信濃の国には、10郡67郷に分れていたと書いてあり、佐久郡は、美里、大村、大井、余戸、刑部、茂里、青沼、小沼の8郷に分れていた。平賀村史は、次の様に註をつけている。刑部は、野沢平を中心とした千曲川の西側を指し、青沼郷は、千曲川の東側平賀、田口、青沼、辺を指していたと。当時郷は、50戸単位であり、原遺跡から、奈良、平安時代の住居址が発見され、尚一戸は、10人から100人と云われていたから、原遺跡の地に相当の数の人が住んでいたと想像出来る。

青沼とは、字の如く青々とした牧野と稲作には、最適な沼が多かったと思われ、当時の人々の生活が偲ばれる。

鎌倉時代に入ると、地方に私有地（荘園）が、形成され、佐久郡にも伴野、大井荘の二大勢力が定着し、田口は、大井荘に統治されていた。

信濃地名考に依ると、川西の伴野荘は、大徳寺の寺領として受け継がれ、此に對して、川東の大井荘は、八条院の院領として受け継がれていた。従って、大奈良、原、上中込の地は、小笠原朝光が、文治2年大井荘の地頭となり、文明16年村上義清に滅ぼされるまで、357年間大井荘の治下にあった。

文治2年、大井朝光が、大井荘の地頭となった時代に、平賀に平賀氏、田口に田口氏、川西の伴野氏と共に、佐久の3氏と云われ、佐久に勢力を張っていた。応永7年大塔合戦が起るや佐久の三氏も村上満信の陣に参加し、時の信濃国の守護、小笠原長秀を川中島に破り、長秀をして大塔城に走らせる。

応永7年から、田口氏の最後の城主、田口左近将監長能が、武田信玄に滅ぼされた天文13年

まで、143年間田口の地は、田口氏の統治下に置かれていた。

文安3年、平賀氏は大井氏に、文明16年大井氏は村上氏に、天文13年田口氏は武田氏に滅ぼされ、佐久全土は、武田治下に入ることになる。

田口長能については、次の様な事がある。田口氏の勢力が、上州にまで及び、暦応元年には、上野国郡馬郡高井郷東覚寺推鐘と銘の入った梵鐘を持帰り、当時の神宮寺に寄進している。

現在、川原宿の上宮寺に保存されている県宝指定の銅鐘である。

江戸中期延享1年に、出版された吉沢好謙の歴史書、信陽雑誌には次の様に書かれている。信濃国守護五人あり、佐久郡、小県郡は、平賀成頼守護たり。亦宝暦3年に出版された、瀬下敬忠の千曲の真砂には、成頼は、平賀源心なりと書かれている。源心が海の口で、信玄に討たれた後は、田口氏が佐久衆を代表して、武田氏に対したと思う。

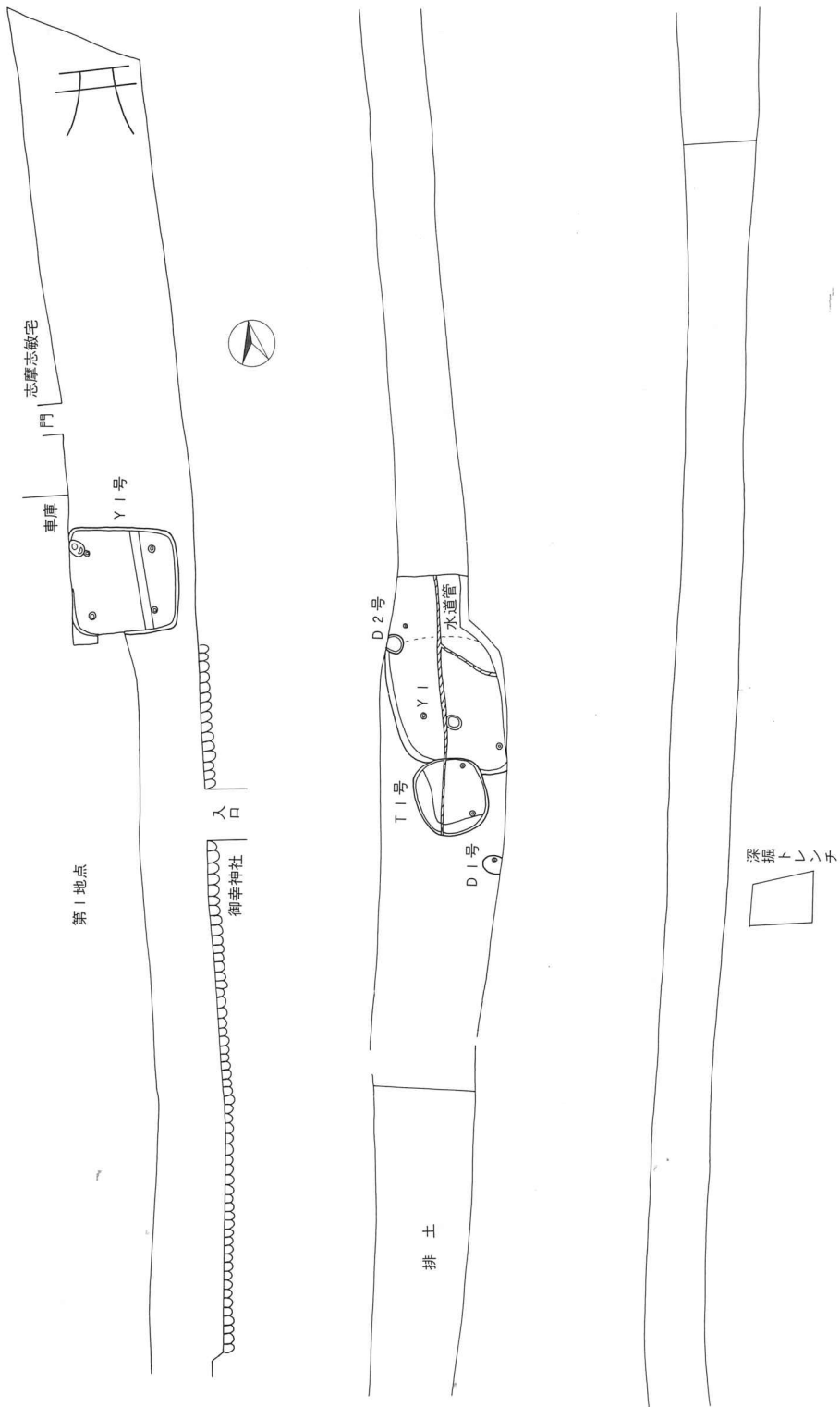
田口氏滅亡の後、武田の臣、依田宮内大輔田口の領主となり、その後、加藤与五石衛門に替り、元龜2年、上野板鼻の地へ替地を宛行られるまで領主であった。其の後、相木市兵衛田口城の城主となり、田口能登守昌朝と称す。天正10年、依田信蕃に依り上野へ追われ、依田信蕃田口の地を領し、次いで其の子康国信蕃死後、田口の地を領す。依田信蕃康国の親子は、小諸城主になっても、田口の地に館を構え、田口を統治していた時期があったと思う。町の文化財に指定された丸山家古文書には、丸山家の左衛門太郎長成に出した宛行状が残っている。

江戸幕府が出現し、元禄7年、内藤正友、岩村田藩主となり、元禄15年、牧野康重小諸藩主となり、宝永元年、松平乗直田口藩主となる。大奈良、上中込は、天領となり、田口から分離し、御影陣屋の支配を受ける。

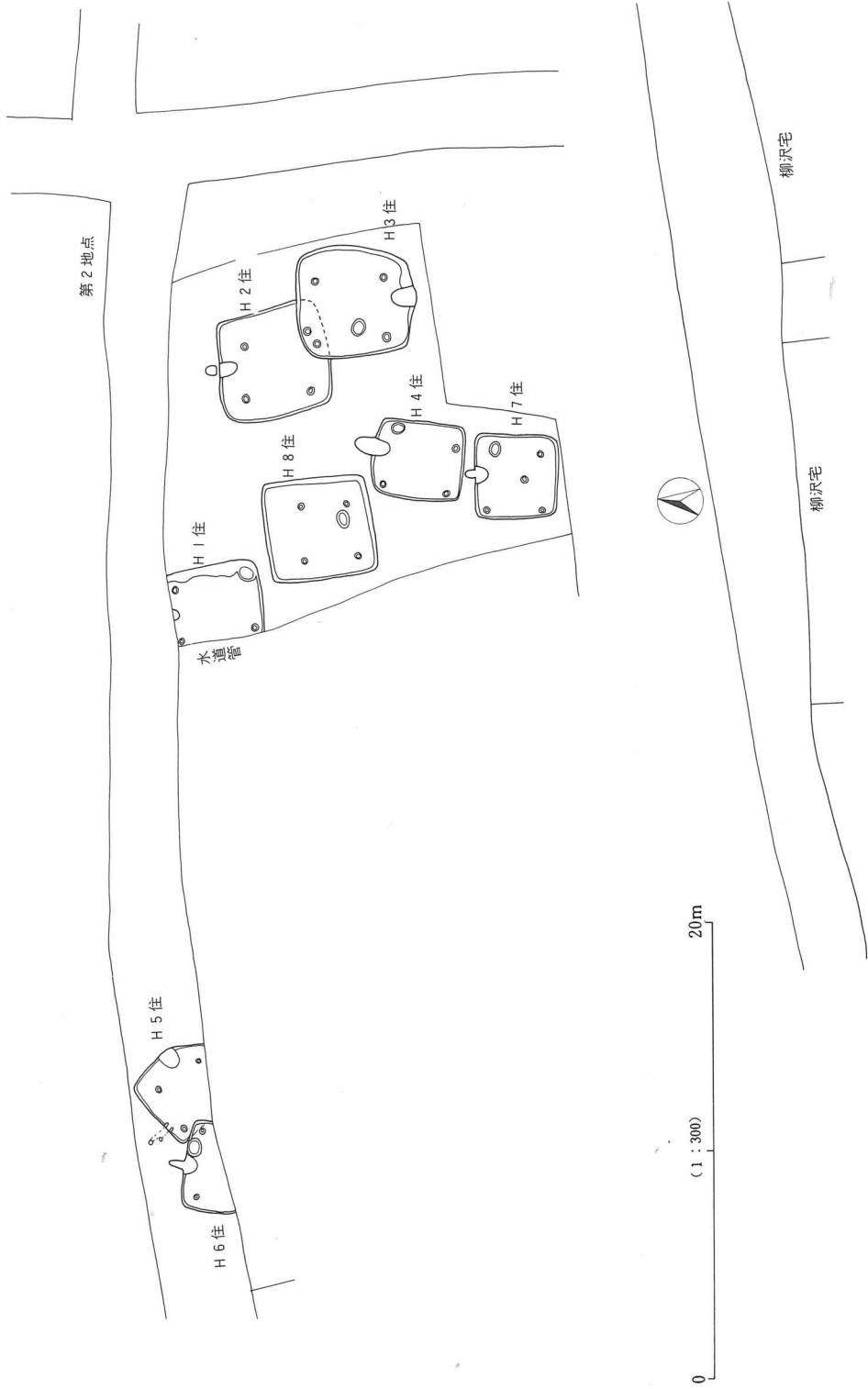
明治に入って、明治元年2月17日、名古屋藩取締の支配下、明治元年8月2日、伊那県の支配下、明治3年9月11日、中野県に入り、明治4年6月22日、長野県が出来るに及び、全佐久が、其の支配下に入り、現在に到る。

大奈良部落の大奈良と云う名称と、氏神の春日神社が、人里から大変離れた場所に、ぽつんと在ることに、大きな疑問を感じていたが、今回の発掘で、春日神社（現御幸神社）の周辺に、奈良時代の住居址が、集落をなして居た事と「物部猪丸」の銅印が、発見されていることと合せて、此の疑問の一部が解決した様な気がする。

（佐藤 保）



第3図 原遺跡検出遺構全体図（第1地点）

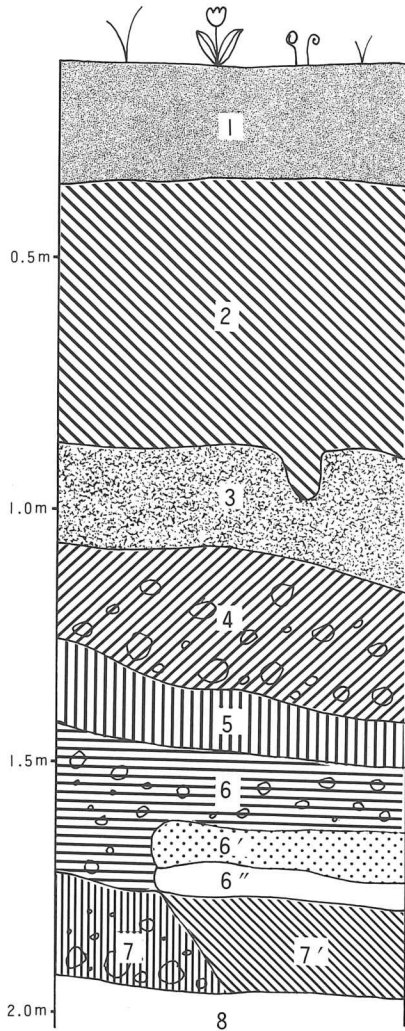


第3図 原遺跡検出遺構全体図 (第2地点)

### 第3章 層 序

原遺跡は、雨川の下流に発達した谷口出口の扇状地で平坦な丘陵地を形成している。遺跡は、約15万㎡にわたる広大な面積を有し、ここは古くから畑作地として拓けていた。

本遺跡の地層は、2mの深掘トレンチを入れて断面観察を試みることができた。このトレンチにより原遺跡は千曲川の氾濫の影響を全く受けておらず、雨川扇状地上に築かれた遺跡であることが確認された。

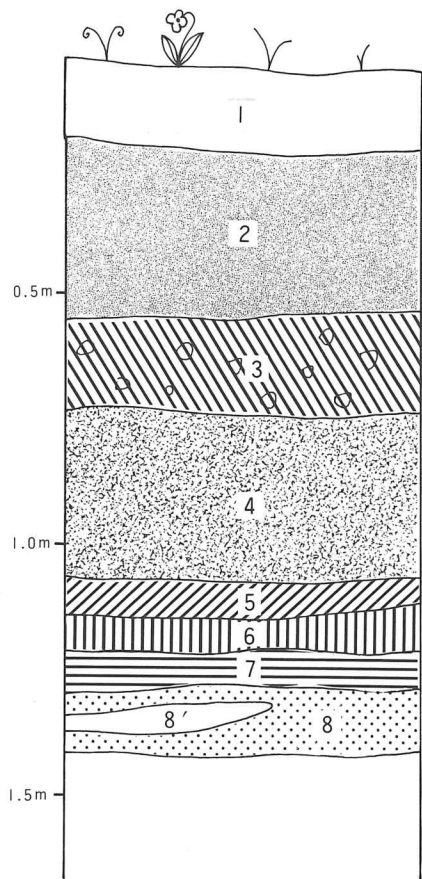


第4図 原遺跡層序断面図第1地点

- 1層 (褐色土) 耕作土 層厚25cmを測る。1cm～5cm大の小石を多量混入。
- 2層 (漆黒色土) 層厚50cmを測る。有機質を含んだ黒色土で、粒子緻密で粘性が強い。この層の中間より竪穴住居址等の遺構を構築している。
- 3層 (明褐色土) ローム層で層厚20cmを測る。
- 4層 (灰褐色土) 砂礫層で0.5～15cm大の砂岩、頁岩、礫岩、溶結凝灰岩、荒舟玄武岩等の円礫の集った層で、層厚28cmを測る。
- 5層 (褐色土) 層厚10～15cmを測る砂層である。
- 6層 (暗褐色土) 3～7cm大の礫、0.5～1.5cm大の小石及び砂を含んだ砂礫層で、層厚30～38cmを測る。
- 6'層 (茶色土) 6層の砂礫層に入りこんだ砂層で層厚10cmを測る。
- 6''層 (褐色土) 6'層と同様、6層の中に部分的に入りこんだ砂層で、6'層とは色調が明確に区分できる。層厚7cmを測る。
- 7層 (明褐色土) 6層より色調が明るくなる層で0.5～1.5cm大の小石、10～15cm大の礫と砂を混入した層で、ここで深掘りを止めたので、層厚はわからない。

7'層（黄色土） 7層に部分的に入り込んだ層で、明るい黄色を呈した砂層である。現残の層厚は18cmを測るが、下限はわからない。

## 第2地点



原遺跡層序断面図第2地点

- 1層（褐色土） 耕作土
- 2層（漆黒色土） 有機質の黒土、第1地点と同様で粒子緻密で粘性が強い。この層の下部より竪穴住居址が構築されはじめる。
- 3層（褐色土） 層厚20cmを測る。5～15cm大の礫、砂を多量混入する砂礫層。
- 4層（黄色土） 明るい色のローム層で、層厚33cmを測る。
- 5層（暗黄色土） 砂を混入したローム層で粘性が強い。層厚7cmを測る。
- 6層（黄色土） 層厚7cmを測るローム層で5層よりさらに粘性が強い。
- 7層（暗褐色土） 砂混りのローム層で、5層と比べてやや色調は暗い。層厚は7cmを測る。
- 8層（暗黄色土） 層厚13cmを測る。砂を多量に含み、ローム層が若干混入する。トレンチの深掘りはここで終了したので、下限はわからない。
- 8'層（暗褐色土） 8層と同様、砂多量、ローム層を少量混入するが、色調が8層よりやや暗くなる。

（島田 恵子）

## 第4章 遺構と遺物

### 1 弥生時代住居址

#### 1) Y1号住居址

##### 遺構 (第5図)

本住居址は、調査区最北端の道路入口近くに検出された。東側には、原・大奈良部落の鎮守の森である御幸神社があり、その参道にあたる。プラン確認では、住居址の存在を表土削平の時点ですでにつかんでいたが、住居址の中央を水道管設置のため一度掘り起してあったことから全容を検出するのに時間を要した。又、住居址の西側は調査区域外であったことから、志摩志敏、井出幸治氏の両地主さんにご理解をいただき、拡張を繰り返しながらほぼ完掘することができた。

平面プランは、東西440cm、南北480cmを測る南北にやや長い方形を呈する。主軸方位は、N-7°-Eを示す。

壁高は、確認面より15~26cmを測り、壁はやや傾斜をもって立ち上る。また、南西コーナー近くの壁際に神社の幟柱が存在し、壁の一部を完掘する事が出来なかった。

覆土は、2層によって形成され、I層は黒色を呈し、粒子緻密にして粘性強く、3cm~4cm大の小石の混入が認められた。II層は、黄褐色を呈し粒子粗く、砂、ローム粒子を多量含む。床は、南側が堅く貼り床的状态にあったが、北側に向かう住居址の約半分は軟弱であり、対象的な面をみせていた。

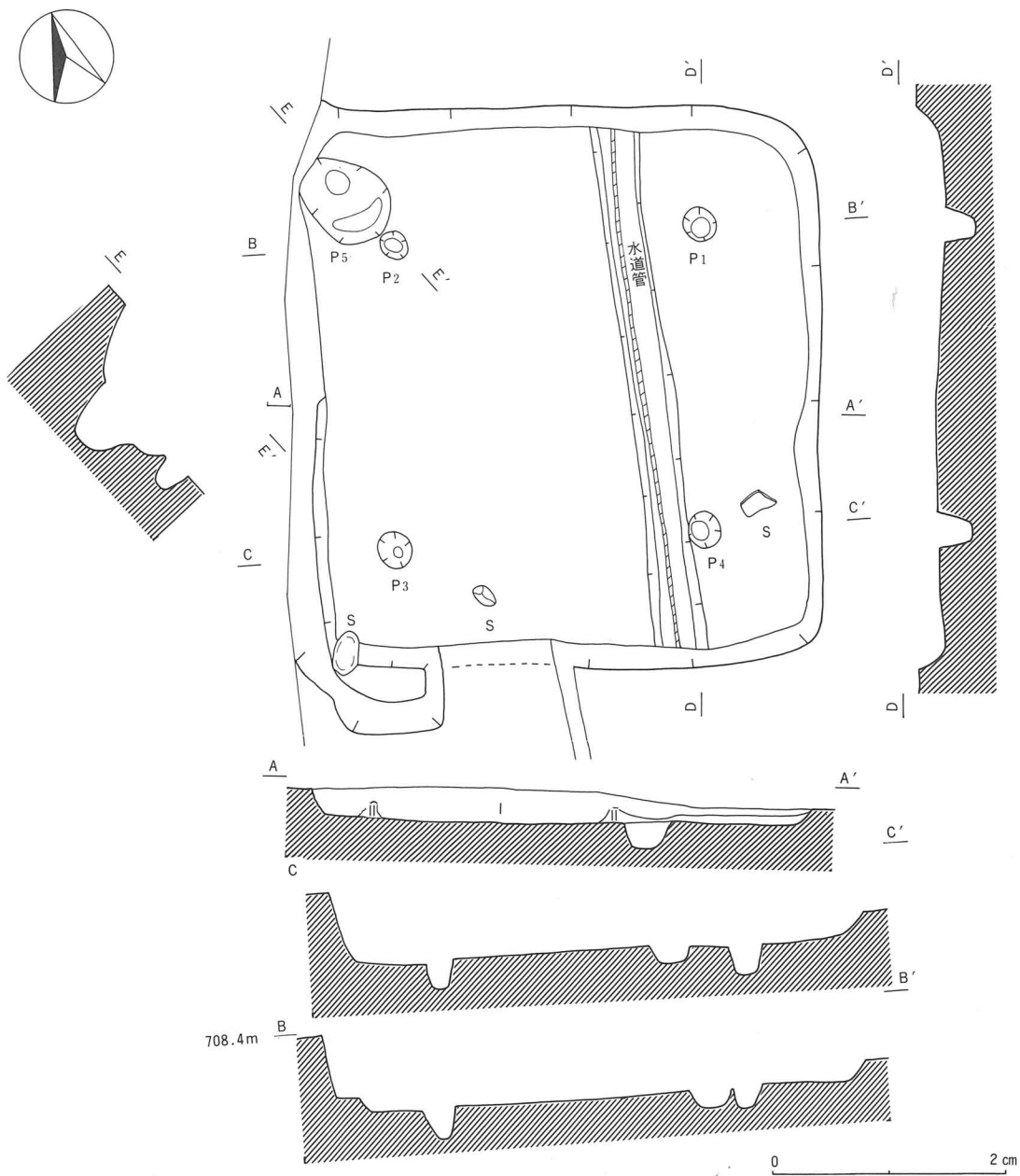
ピットは5個検出された。P<sub>1</sub>は、東北隅より約80cmほど内側に検出され、28×32cm、深さ43cmを測り、P<sub>2</sub>は、西北隅より90cm内側に検出され、28×22cm、深さ20cmを測る。P<sub>3</sub>は、西南隅より約70cm内側に検出され、30×28cm、深さ38cm、P<sub>4</sub>は東南側隅より1m内側に検出され、26×26cm、深さ29cmを計測する。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴であるとおもわれる。

P<sub>5</sub>は西北隅に検出され、70×60cm、深さ48cmを測り、東南側にテラス状の段を持ち、西壁を僅かにえぐる状態に落ち込んでいた。遺物の出土は無かったが、規模から貯蔵穴であると考えられる。

炉は検出されなかった。住居址中央からやや東寄りを(参道中央)、水道管が敷設されており、幅50cm、深さ20cmにおよぶ攪乱が住居址の南北を貫通していて、炉はこの工事の際破壊されたと考えられる。

##### 遺物 (第6・7図)

本址出土の遺物は、住居址西側の壁際より、赤色塗彩壺胴部片が出土し、南側壁近くより、



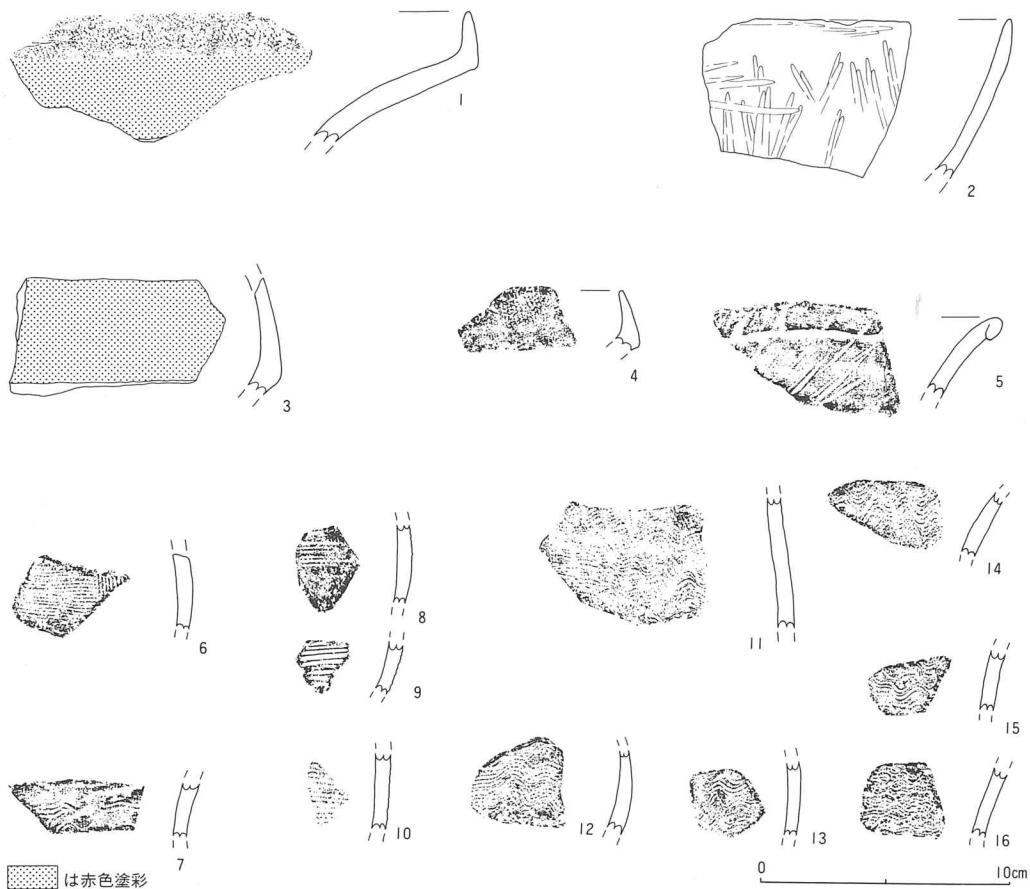
I層（黒色土）粉子緻密、粘性小、小石粒（3～5mm大）混入  
 II層（黄褐色土）粒子粗く粘性小、砂、ローム多量混入

第5図 Y1号住居址実測図（1：60）

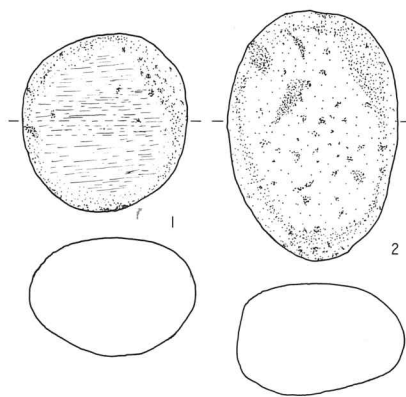
壺口縁2片が出土した。その外は細片が多い。

第6図1の口縁は、表裏に赤色塗彩があり口縁が直立する。外面に縄文が施文されている。





第6図 Y1号住居址出土土器実測図・拓影図



第7図 Y1号住居址出土土器実測図  
(1:3)

2の口縁部片は、直線的に立ち上り、端部で僅かに内湾する。器面には、横位、斜位、縦位の筧に依る調整痕が認められる。3は、赤色塗彩された壺胴部片で、下部に屈曲部が僅かに残っている。4は、1と同じ口縁部片である。5は、折り返し複合口縁を持ち、櫛描横走平行線文を施したのち、斜位の筧による沈線が施文されている。6、7、11、14~16は、共に櫛描波状文を施した甕胴上部片である。8~10は、櫛描簾状文の施文があり、壺、甕の頸部にあたる。

1、4の口縁部片は、弥生後期初頭の吉田式に位置付けられるとおもわれる。2の口縁部片は、白田町勝

間原遺跡Y2号住居址出土(第13図2)の口縁に類似している。5は、複合口縁を持つ口縁部片で、弱い櫛描横走平行線文を施したのち、篋描沈線文が施文されている。折り返し複合口縁は、勝間原遺跡において3点出土しているが、櫛描波状文、簾状文が描かれている。本址出土のものは篋による沈線が施文されている。

本住居址の北側には、縄文から弥生・平安時代に至る複合遺跡の大奈良遺跡が存在し、又、本遺跡も弥生～平安時代にかけての大遺跡であり、本住居址の付近にも弥生時代の早い時期にあたる集落も広がっていたことが想定される。従って、3、6～16が本住居址に伴う遺物と考えられ、1、4、5の口縁は、付近に存在する住居址からの流入と思われる。

石器類は東南コーナー付近の床面直上に、作業用の台石と考えられる、25×15cm、厚さ2.5cmを測る平石が置いてあった。荒舟玄武岩で表裏の面はきれいに擦られており、かなり使用されていたものとおもわれる。

また、第7図に示した2点の石器も出土している。1は、手の中に包みこめる大きさであり素材は安山岩を使用している。磨石として使ったとおもわれ、使用痕としての擦りあとも残っている。2は敲石で輝石安山岩を使用している。裏面を一部欠損しているが正面にわずかな敲打の使用痕が認められる。重量があり小形であるが敲石としての機能は充分そなわっている。本住居址は、弥生時代後期箱清水式期のやや早い時期に位置付けられよう。

(三石 延雄)

## 2) Y2号住居址

### 遺構(第8図)

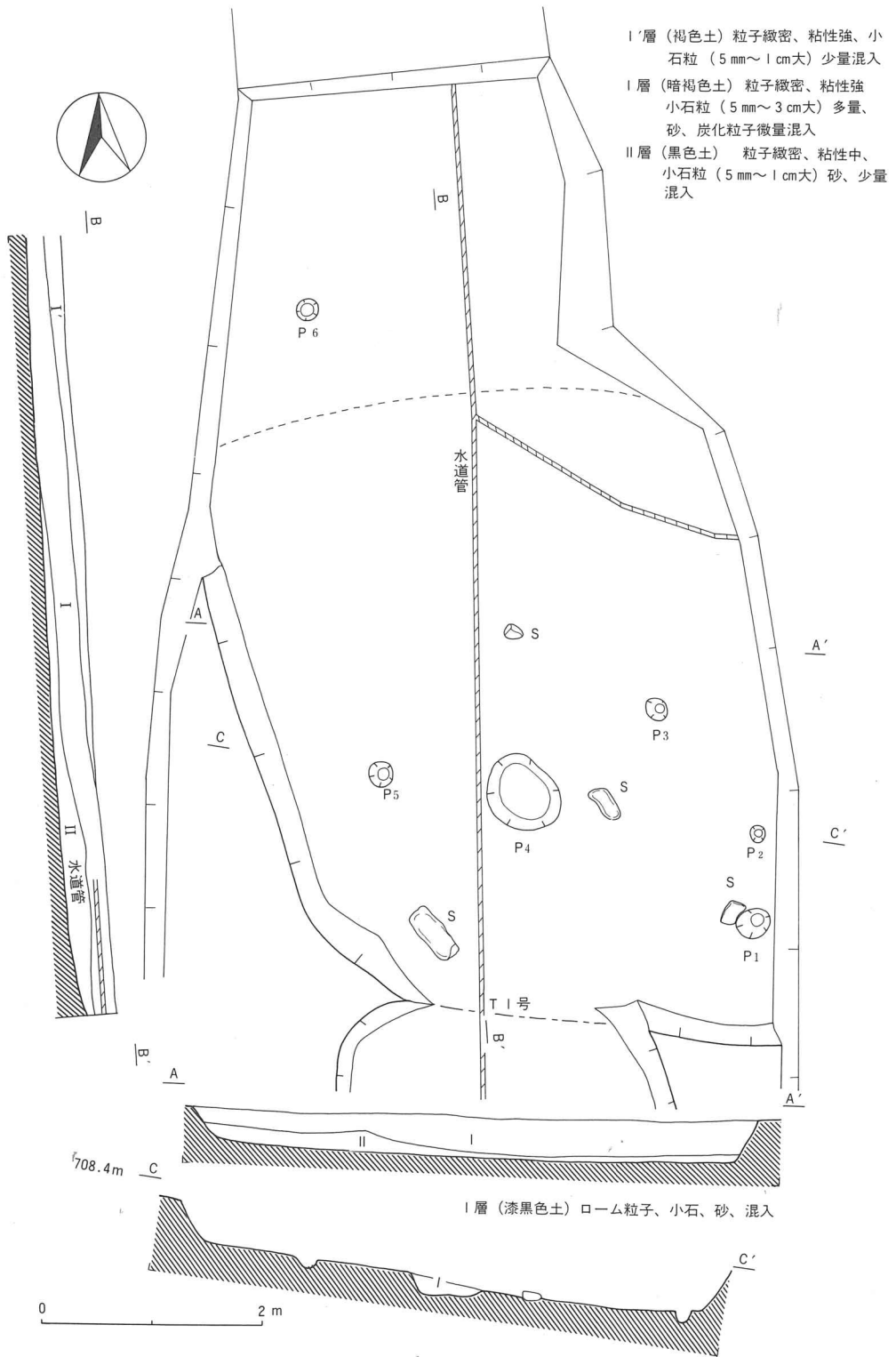
Y2号住居址は、御幸神社に隣接した南西側の道路下より検出された。地形的には平坦面から北西側に向って凹地に入る手前に位置する。この付近は砂礫層がほとんど見られない地山層で、黄色ローム層に覆われている。

本遺構は、T1号特殊遺構に南壁を切られ、道路幅という限られた区域の調査であったため西壁の一部が確認されたのみで、東壁は区域外にのびていた。また、北壁は水道管の工事により再度掘られているため壁を確認することが出来なかった。従って、住居の全容は推定値によるという、極めて不安定なプランで、調査時点においてもプランの把握に時間を要した。

平面プランは、東西5m、南北5m50cmを測り、隅丸方形を呈すると推定される。遺残していた南壁の壁高は、18～23cmを測り、西壁は28～34cmを測る。確認面における覆土の堆積状況からみて、おそらく西壁が当時の壁高であったとおもわれる。

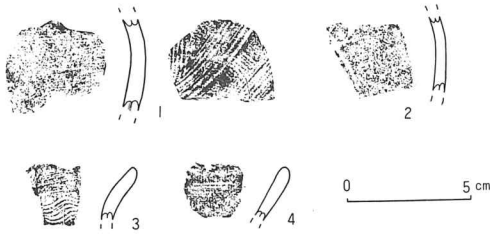
覆土は、2層に分かれる。I層は暗褐色を呈し、小石粒を多量に混入、砂、炭化粒子を微量含む。II層は黒色土で粘性やや弱く、小石粒と砂を少量混入する。砂の混入により埋土の過程で少量の水が流れ込んでいることが伺える。床面はほぼ平坦で張り床はなかった。

柱穴は、P<sub>1</sub>が30×28cm、深さ37cmを測り、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が径15～20cmを測り、深さは10～15



第8図 Y2号住居址実測図 (1:60)

cmを測る。P<sub>1</sub>は支柱穴であるとおもわれる。他は不安定で補助柱穴であろう。北西側の柱穴は発見できなかった。P<sub>4</sub>は覆土が漆黒色を呈し明確に落ち込みが認められた。60×70cm、深さ15



第9図 Y2号住居址出土土器拓影図(1:3)

cmを測る。当初、炉であることも考えられたが焼土が遺残していないことから、なんらかの施設であるとおもわれる。

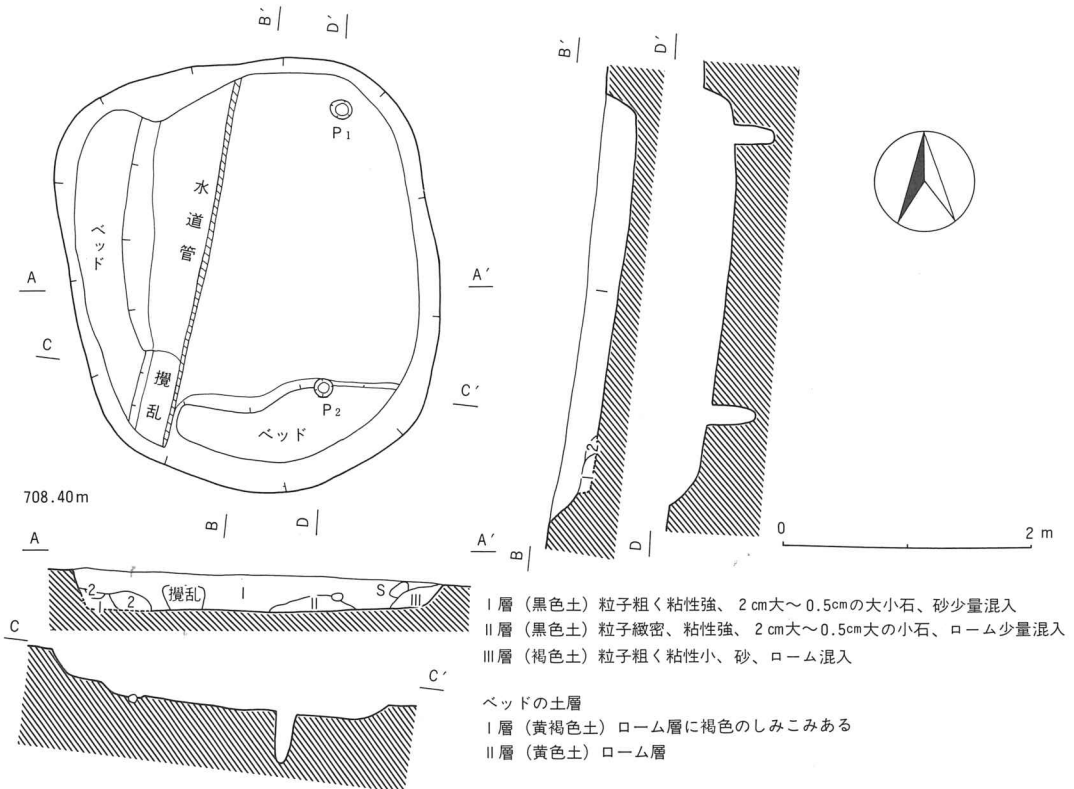
炉は、検出できなかった。水道管付設工事によって破壊されたことも考えられるが、伴然としない。

その他、床面直上に15cm~30cm大の角の丸い玄武岩が3個、南西コーナー付近には、50×20cmの大の赤く焼けた溶結凝灰岩が残存していた。

### 遺物(第9図)

遺物は約120点の出土があった。そのほとんどが細片であり、須恵器、土師器片も水道管付近より混入して出土している。拓影図に図示できたものは第9図の4点である。

1は、表裏両面に刷毛目調整が施されている胴部片である。表面は摩滅しているためはっき



第10図 T1号特殊遺構実測図(1:60)

りした刷毛目が出ていない。2は、櫛描波状文が施されているが、摩滅しており拓影にはあまり浮き出なかった。3、4は口縁部片である。共に口縁部は直線的に開いているが、3は外傾する。文様は櫛描横走平行線文と櫛描波状文が施されている。4は、櫛描横走平行線文が口縁直下に見られる。2、3、4は器厚が薄い。この他にも、摩滅の著しい櫛描文、赤色塗彩土器片が10点程みられるが拓影図は不可能であった。

本址出土の土器は、櫛描文のみで篋描文が見られない。また、3、4の甕口縁部片は弓状に大きく外反していない等の特徴から、Y1号住居址と時間的に差がないとおもわれる。

本住居址は、弥生時代後期後半の所産であろう。

(島田 恵子)

## 2 特殊遺構

### 1) T1号特殊遺構 (第10図)

本遺構は、Y2号住居址の南壁を切って構築されていた。プラン確認においては黒色土がY2号住居址の上面を覆っていたため、本遺構が新しく、Y2号住居址が古いことが伴然としていた。

平面プランは、東西292cm、南北340cmを測り、隅丸方形を呈する小形の遺構であるが南壁がやや丸味を帯びている。北を中心とした主軸方位は、N-6°-Wでほぼ北を中心にして構築されている。

本遺構は、西壁～南壁にかけて幅30～60cm、高さ10～16cmを測る規模の段を設けている。西南コーナーが水道管の付設工事により破壊されてはいるが、おそらく、西南壁をL字型に巡っていたものであろう。北東側の壁高は17～25cmを測る。

覆土は、東西側が3層によって形成されるが、南北側は、黒色土のI層のみで形成されている。東西側のII層は、床面付近に幅70cm、高さ10cmにわたって堆積している。III層は東壁下に堆積している逆三角堆土である。南西側の壁際を巡る段を形成している土層は、1層・2層に区分できるが、両層共にローム層を掘り残して段を築いている。踏み固めたように堅く、1層はやや褐色を帯びて、段を使用した際の浸み込みか、あるいは汚水の浸み込み等が感じられる。いずれにしてもローム層の掘り残しであることは明確である。

床面は、中央がやや深く、全体に北側に向って低くなる傾向にある。柱穴は、P<sub>1</sub>が18×14cm深さ32cm、P<sub>2</sub>が径14cm、深さ35cmを測り、かなりしっかりした掘り込みを有している。P<sub>2</sub>は、段の際に位置している。水道管付設のために掘り起され、北西側が破壊されているため、柱穴は2個のみの検出であった。

本遺構は小型で、南西側にL字形の段を有した施設が存在している。これは、通称ベッド状遺構と称されている遺構である。本遺構は通常生活している住居址にしては小型であり、特殊遺構として取り扱うこととした。

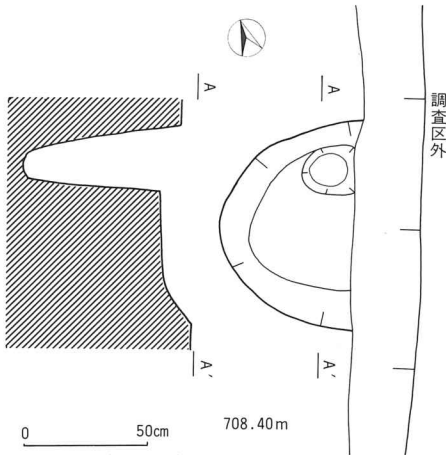
## 遺物

遺物は、1 cm～5 cm大の土器細片が32点出土した。土師器、須恵器片の混入も5点見られるが、その他は弥生土器の破片である。

赤色塗彩土器は3点出土している。その内の1点は表裏に塗彩がなされている。3点共に器厚は薄く鉢の破片ではないかとおもわれる。櫛描横走平行線文の施された口縁部片2点、波状文2点、櫛描文とわかる破片3点がある。

本址は、Y2号住居址を切って構築されており、Y2号住より新しい遺構である。櫛描文の施文された土器片により、T1号特殊遺構は、弥生時代後期後半に位置付けられ、また、Y2号住居址より時間的に新しい遺構である。

(島田 恵子)



第11図 D1号土壙実測図(1:30)

## 3 土 壙

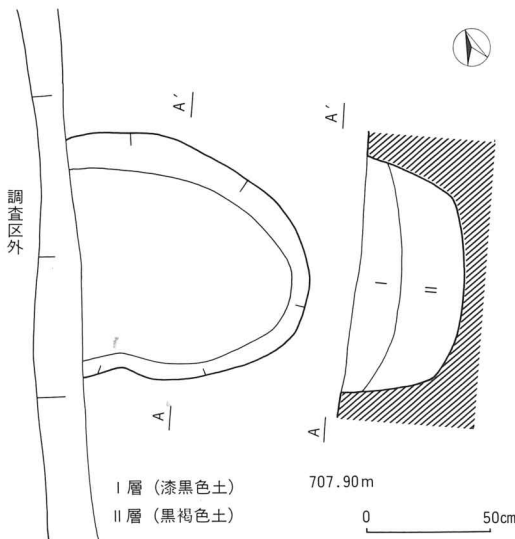
### 1) D1号土壙(第11図)

本遺構は、T1号特殊遺構の東南側に検出された。東側の道路拡張予定地内ギリギリまで検出したが、調査区外に一部かかってしまい途中で断念せざるを得なかった。

遺構は、南北80cm、東西は80～90cmを測ると推

定される。深さは10cmと浅いが、北側に50×35cm、深さ58cmのピットが存在する。ピットの覆土は黒褐色を呈したパサパサの土層であった。本遺構は、このピットが主となる遺構であると考えられるが、全体が調査できなかったので詳細は不明である。ピットは、壁際が垂直に掘られており、柱が建っていたとおもわれる。あるいはT1号特殊遺構と関わりのある柱穴であるかともおもわれる。

遺物の出土は皆無であったため、本遺構の所産期、用途を決定する所見は得られていない。



第12図 D2号土壙実測図(1:30)

## 2) D 2号土壇 (第12図)

本土壇は、Y 2号住居址の北西コーナー寄りの床面下より検出された。Y 2号住居址の床面精査時点において、漆黒色土の落ち込みが認められていたため、D 2号土壇の存在はこの時点より明らかになっていた。

平面プランは、南北側95cm、東西側は130cmを測ると推定され、東西に長い楕円形を呈する。土壇中央の最深部の深さは45cmを測り、しっかりした掘り込みをもつ。

覆土は、I層が漆黒色土でII層が黒褐色を呈し、3cm～5cm大の小石を多量混入していた。底面は中央がやや深く、壁際に至って若干上っている。壁は急傾斜をもって立ち上る。

出土遺物は、土器片10点が出土している。どれも2～4cm大の細片で摩滅が著しい。この内遺構底面直上より出土した3点の土器は、赤色塗彩されているが文様はみられない。

本土壇は、Y 2号住居址より古く、弥生時代後期後半に比定されよう。

(島田 恵子)

## 4 古墳時代末期・奈良時代・平安時代の住居址

### 1) H 1号住居址

#### 遺構 (第13図)

本住居址は第2地点に入ってから道路添いに検出された。西側と北側には上水道管、下水道管が通っており、付近の住民の方から傷つけないでほしいとの要望があり、完掘することができなかった。

平面プランは推定では、東西400cm、南北450cmを測り方形を呈する住居プランになるとおもわれる。実際に掘ったのは、東西345cm、南北400cmである。主軸方位はN-14°-Eを示す。

壁高は、20～32cmを測り、東側に幅60cm、確認面からの高さ25cm、床面からの高さ15cmを測る土段が築かれていた。この土段はローム層を残して作られており、壁中央には幅40cmのテラスが存在している。

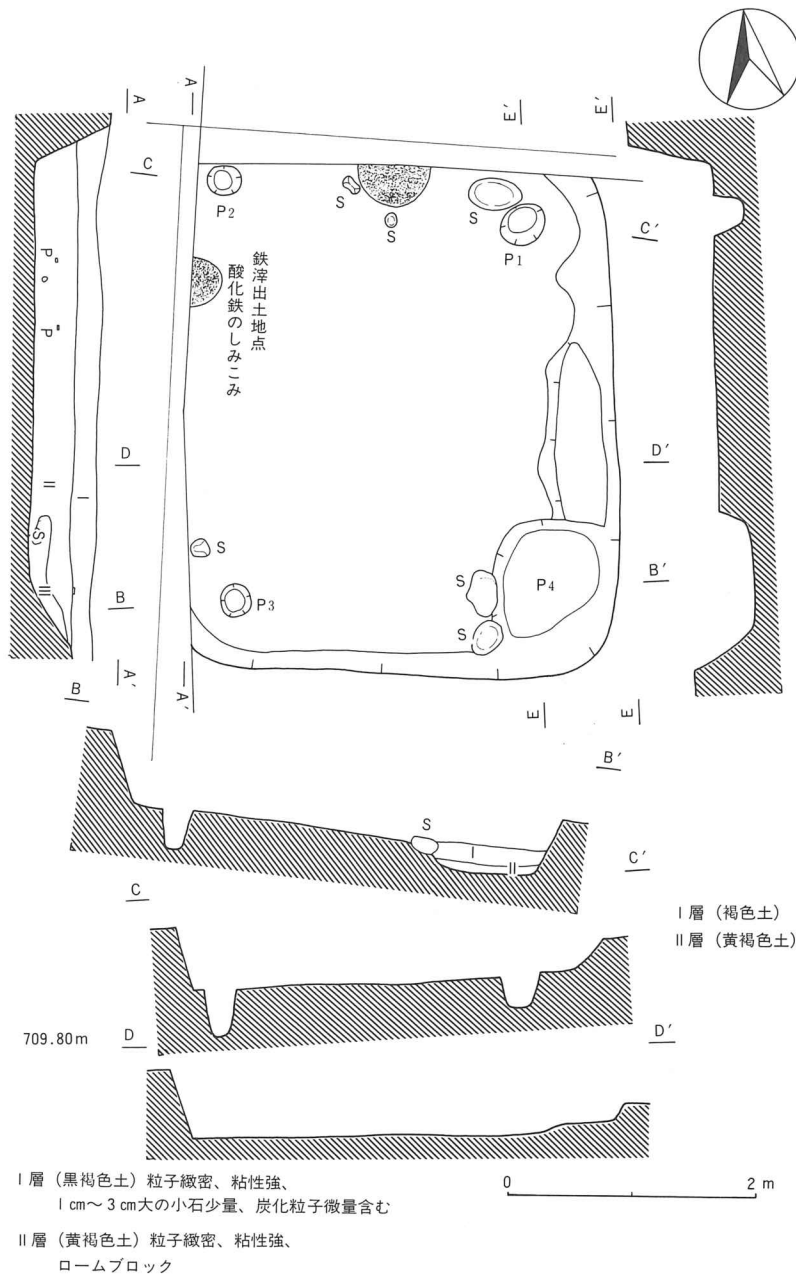
覆土は2層にわかれ、I層は黒褐色を呈し、粒子緻密にして粘性強く、1cm～3cm大の小石、炭化粒子を含んでいた。II層は逆三角堆土である。

床面は、平坦で北側に堅緻な面が認められたが、貼床ではなかった。

ピットは4個検出された。P<sub>1</sub>は北東隅に検出され、34×32cm、深さ25cmを測り、P<sub>2</sub>は北西隅に検出され、30×28cm、深さ37cm、P<sub>3</sub>は南西隅に検出され、26×24cm、深さ30cmを測る。P<sub>4</sub>は南東コーナーに検出され、100×90cm、深さ25cmを測る。西壁の立ち上り際に20×36cmと20×30cm大の平な河原石が2個並んで配置されていた。

P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は支柱穴で、P<sub>4</sub>は柱穴を兼ねた貯蔵穴かと考えられる。覆土中より土器片が15点程出土している。

カマドは、北側のやや東寄りに検出されたが、焚き口付近のほんの一部分の検出であったた



第13図 H 1号住居址実測図 (1:60)

第2表 H-1号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
14-1	灰釉短頸壺蓋	(12.8) (2.4) -	口縁部直立する。 つまみ部分より欠失。	緑がかった釉が全面に 施釉されている。	ロクロ	床面直上 灰緑色、回転 実測

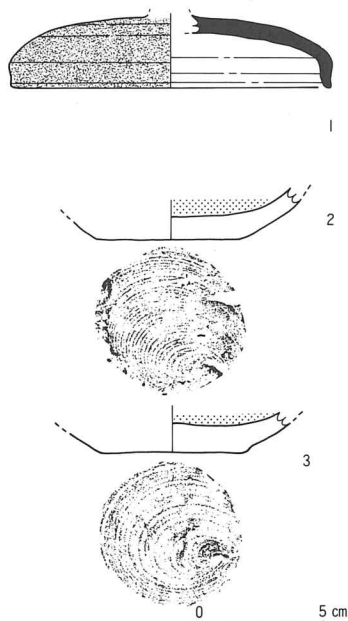
め、カマド本体の  
部分はわからない。

遺物(第14図)  
出土遺物は破片  
が多く図示でき  
たものは3点のみ  
であった。

1は、灰釉陶器  
短頸壺の蓋である。  
住居址中央からや  
や北東寄りの床面  
直上から伏せた状  
態で出土した。器  
形の約半分が残っ  
ていたが、残り半  
分は覆土中にも見  
あたらなかった。  
ちょうどつまみの  
部分から割れてい  
る。

灰釉陶器短頸壺  
の蓋の出土は、あ  
まり例が見られな  
い。骨壺等に使用  
される例が多い。  
セットとなる短頸  
壺の破片は1片も  
見あたらなかった。





第14図 H1号住居址  
出土土器実測図（1：3）

蓋は、口辺の径が12.8cmを測りやや小ぶりである。口辺の高さは1cmを測り、端部断面は三角形を呈する。天井部中央の欠失部すれすれのところがやや上っていて、つまみを有していることが伺える。淡緑色の釉は表面に丁寧に刷毛塗りされている。胎土は黒味が強く、そのため釉の緑色が濃い。長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所の調査研究員寺島俊郎氏に鑑定、御教示いただいたところ、胎土から猿投産であると判断されるとのことである。また、短頸壺に蓋をしたままで焼いた痕跡が蓋のうら側にはっきり残っていた。

2、3は内面黒色の坏である。底部糸切りで、口辺部を欠失する。

この他に、器厚のうすい甕胴部片が床面直上で出土している。覆土中からは内面黒色の坏、須恵器坏、壺胴部片、高台付坏、甕等の1cm～3cm大の細片が多量に出土している。

また、第13図に地点を示してあるが西側床面に、幅40×35cmの半円形に酸化鉄のしみ込んだ部分があり、その直上より写真図版17図に示してある鉄滓が出土した。6×8cm大のかたまりである。

本住居址は、東壁側が土段状を呈しており、また、鉄滓の出土と酸化鉄のしみ込み部分、さらに例の少ない灰釉陶器短頸壺の蓋が出土していること等特殊なものが見られる。しかし、完掘に至らなかったことからその性格ははっきりしない。本址の所産期は平安時代に比定できよう。  
(三石 延雄)

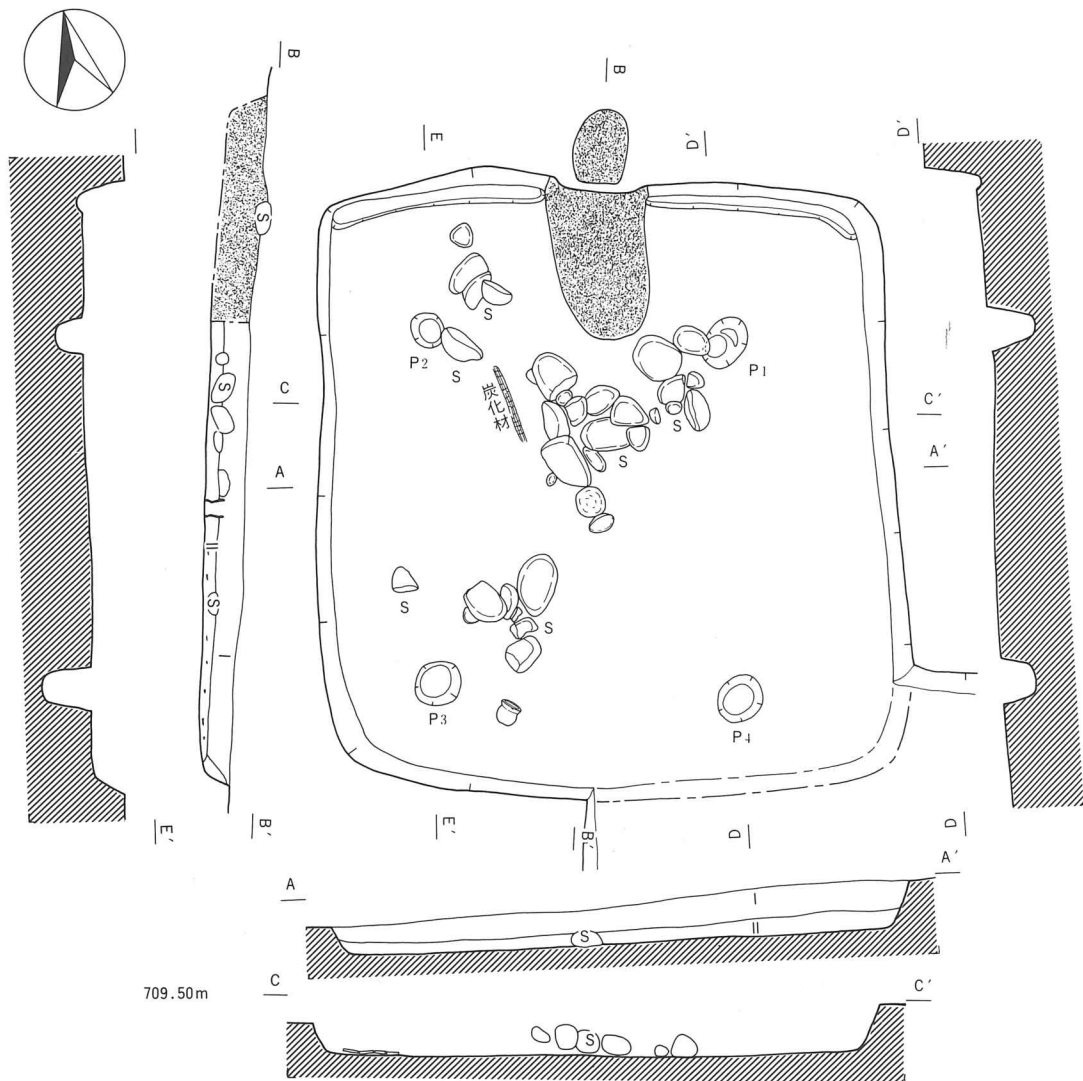
## 2) H2号住居址

### 遺構（第15～17図）

本住居址は、南東側の壁がH3号住居址と重複し、切られた状態で検出された。

平面プランは、東西460cm、南北490cmを測り、形の整った隅丸方形を呈している。主軸方位はN-12°-Eを示している。

確認面からの壁高は40cmを測り、壁は急傾斜で立ち上っている。西壁の深さは22cmであるがこれはプラン確認のため、トレンチ状に掘り込んだためであり、北東側の壁高が構築時に近い数値を示していると思われる。また、南西コーナーの壁中に礫の流れ込みがみられる。



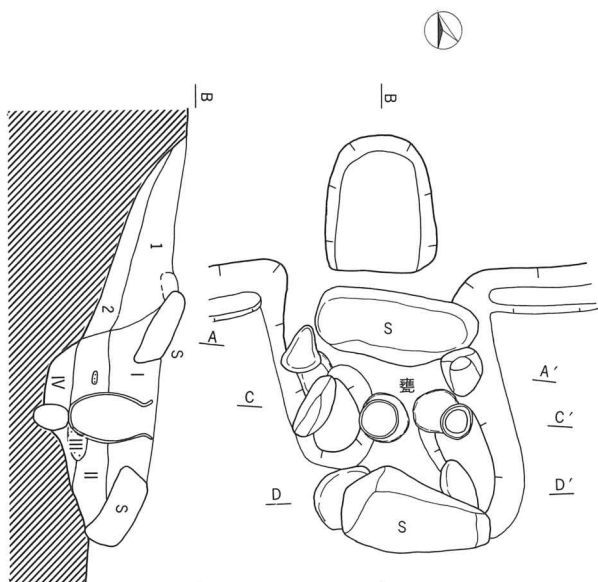
I層（黒褐色土）粒子緻密、粘性強、炭化粒子、ローム粒子微量混入  
 II層（褐色土）粒子緻密、粘性強、炭化材、焼土多量混入

0 2 m

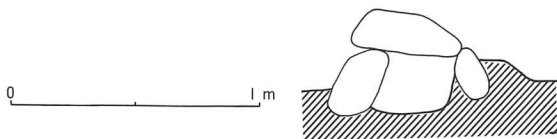
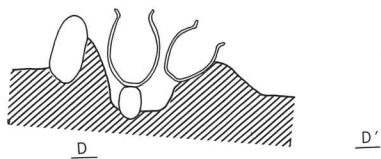
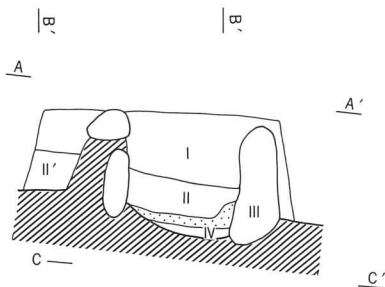
第15図 H2号住居址実測図（1：60）

覆土は、褐色土を基調とした2層によって形成されている。I層は黒褐色を呈し、炭化粒子、ローム粒子を微量混入する。II層は褐色土で住居址中央から南壁中央において、炭化材、焼土を多量混入しており火災にあった様相を呈していた。

床面は、なめらかな粘土層でほぼ平坦であった。柱穴は4本で、東壁側の2本がやや内側に配置している。規模は南側の2本が、径36cmの円形で深さは28~38cmを測る。北西コーナー寄りのP<sub>2</sub>は、径26cm、深さ22cmを測り、P<sub>1</sub>はテラス状の段を有し、柱穴部は28cmの円形で深さは



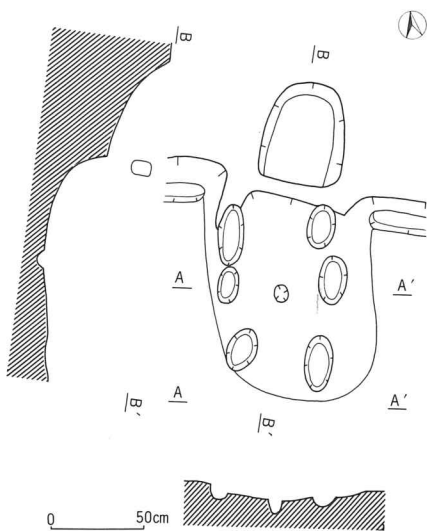
1 (暗褐色土)  
2 (黄褐色土)



I層 (黒褐色土) ローム粒、焼土、炭化粒子微量含む  
II層 (赤褐色土) 焼土、炭多量、ローム含む  
II'層 (褐色土) ローム多量含む  
III層 (赤色土) 焼土  
IV層 (暗褐色土) 焼土少量含む、焼けこみ

第16図 H 2号住居址カマド実測図No.1 (1:30)

た。保温のためにカマドの脇にのせておいたものが、粘土で固めた部分の崩落によりズリ落ちたと想定される。この2個の甕の中からは、写真図版18に示したように食物を煮たものが残っ

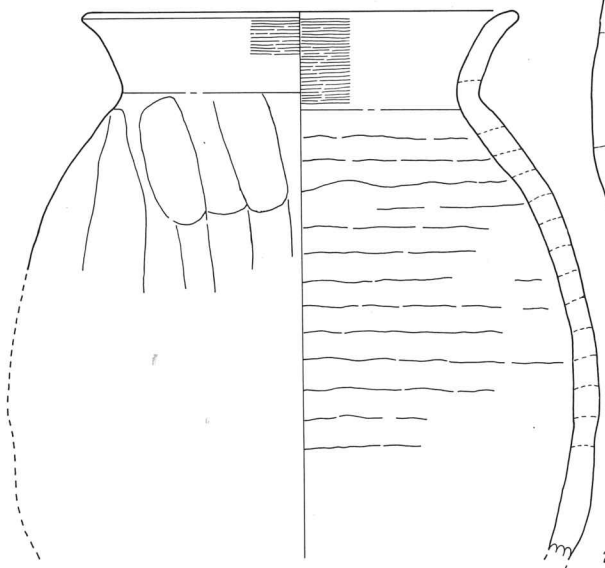
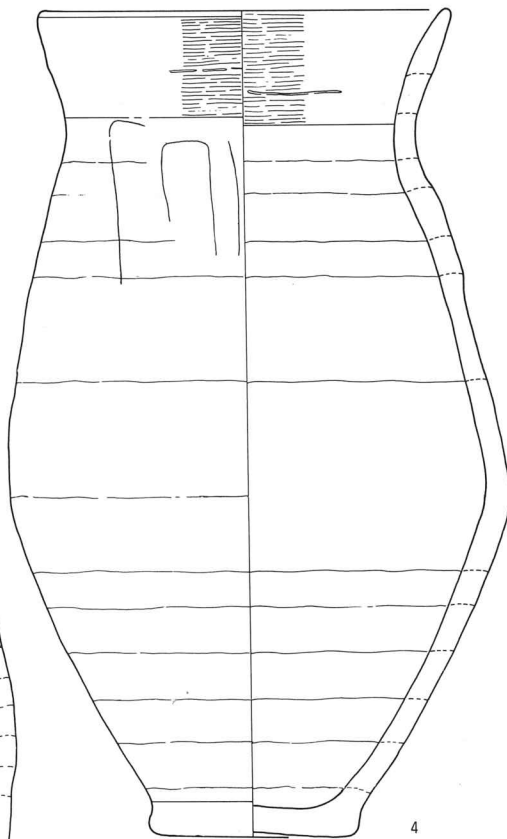
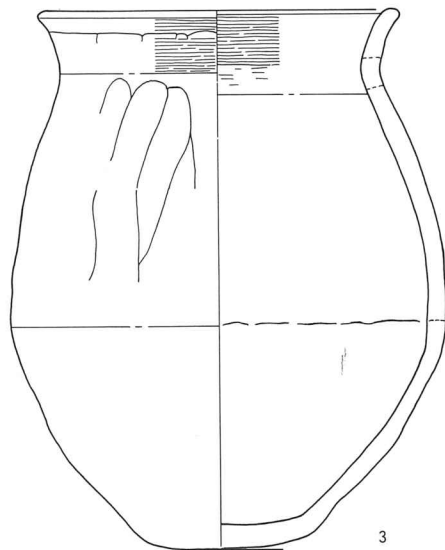
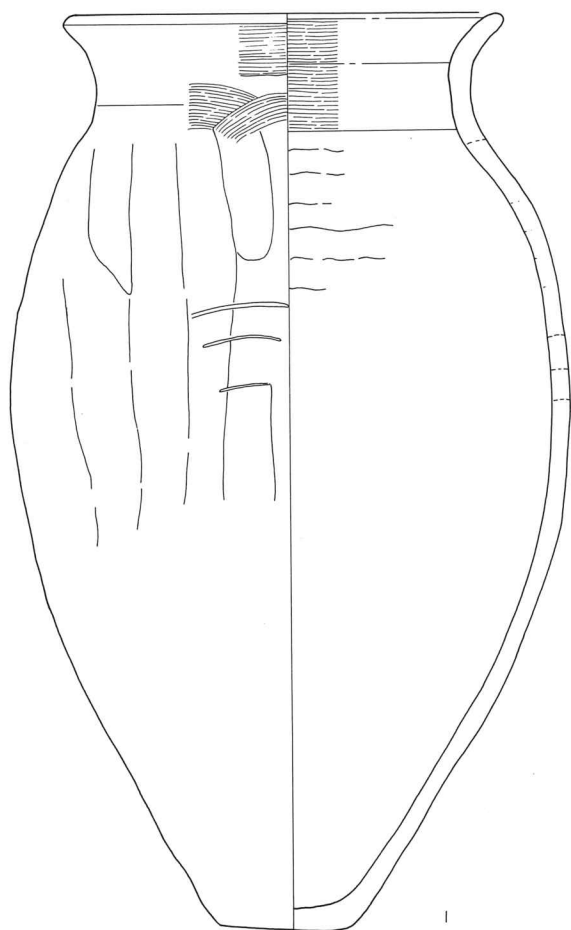


第17図

H 2号住居址カマド実測図No.2 (1:40)

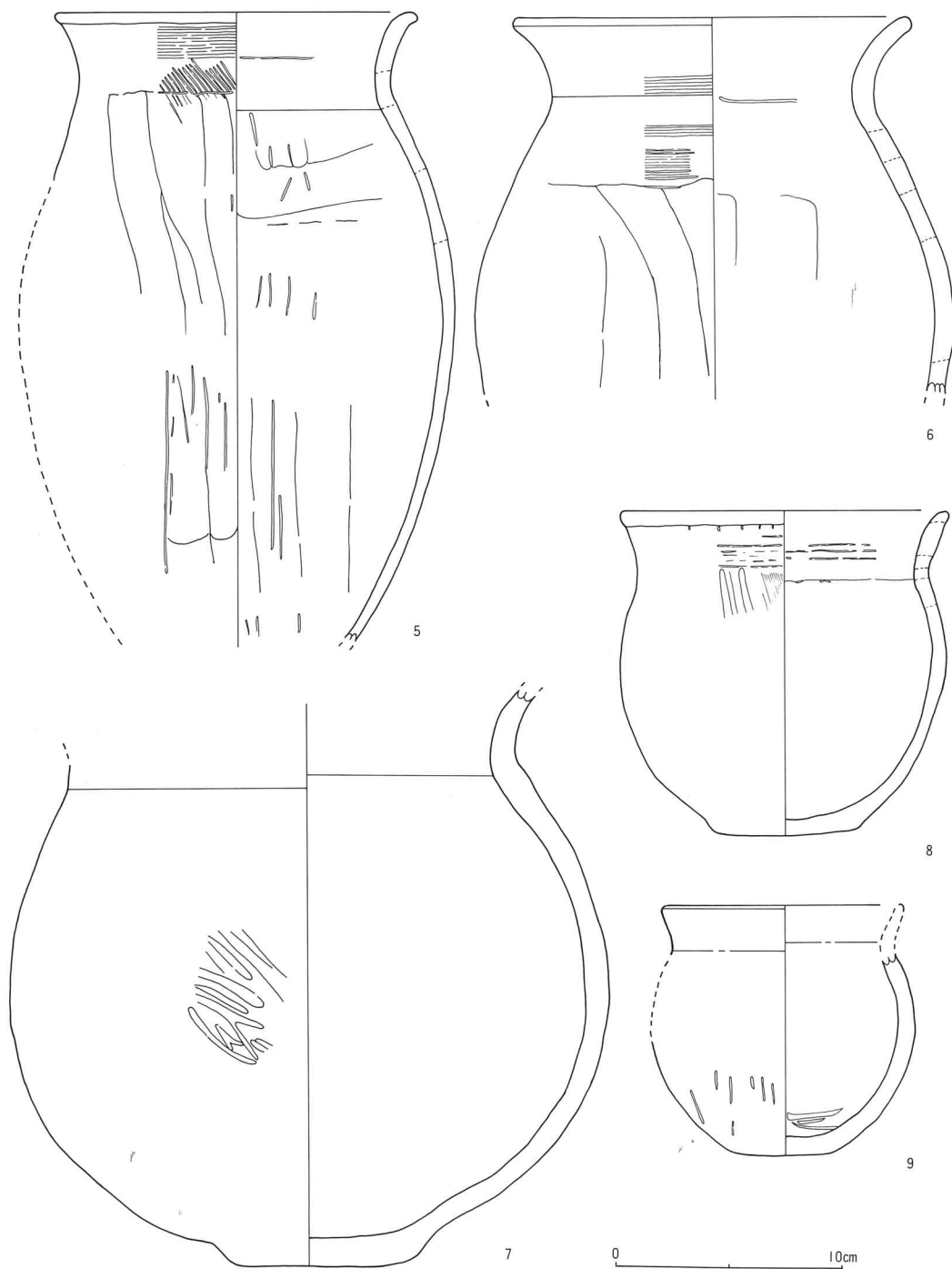
37cmを測る。

カマドは、北壁中央に位置し、煙道は長さ110cm、横幅45cmの規模で壁外にもうけられている。両袖、焚口、カマド奥にあたる煙道との境に石を組み、粘性の強い地山ローム層で塗り固めてカマドを形作っている。本住居址のカマドは、この粘土で固めた部分の一部が崩れていたのみでほぼ当時の現状を保っていた。カマド平面図におけるエレベーションに図示されているように、支脚石の上に甕がかかった状態で残っていた。その右脇にも小形の甕がズリ落ちたような状態で右側にやや傾いて残っていた。

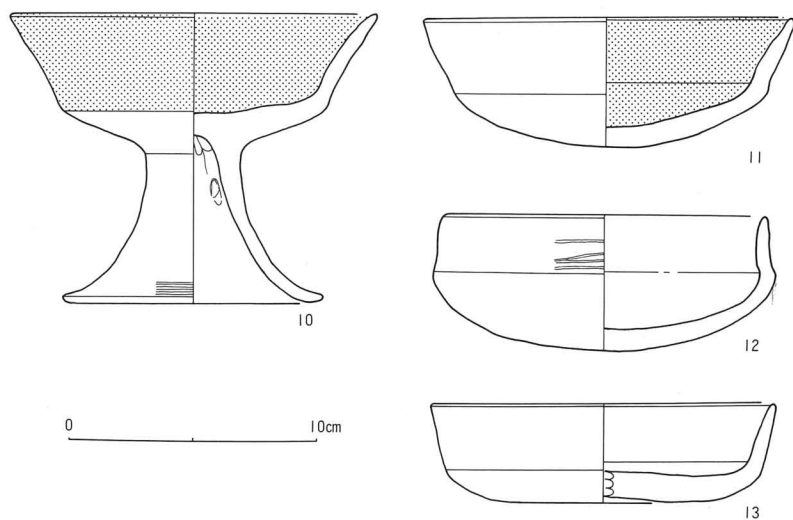


0 10cm

第18图 H 2号住居址出土土器实测图No.1 (1:3)



第19图 H 2号住居址出土土器实测图No.2 (1:3)



第20図 H2号住居址出土土器実測図No.3 (1:3)

ていた。熱を受けすぎて黒く炭化していた。

第17図はカマドを切開した後の図である。これによってカマド構築の方法が理解できる。先ず床面を10cm程掘り、左右の袖には、高さ20~48cm、幅10~18cm、厚さ15~30cmの角の丸い石を各3個配置して、粘土で石を包みこむように固めて袖部を作っている。焚口とカマド奥には天井石を渡して屋根をかけ、煮炊き用の甕をかける部分を空けて、その他、天井石、袖部を粘土で包み込むように固めたと思われる。煙道は煙、空気の流通がうまくいくように、なだらかな傾斜で立ち上っている。支脚石は断面が三角形を呈した安山岩を使用していた。火床は、あまり掘りくぼめていない。これは空気の流通を考えているからであろう。また、焼土・灰は火床にはあまり残っていなかった。カマド内はいつもきれいにしていたからと思われる。

また、住居址の床面には10~50cm大の礫が散乱していた。石の下には甕がつぶれた状態にあり、火災に遭った時、消火のために石を投げ込んだことも考えられる。あるいは火災の後の住居址廃絶の時点で石を投げ込んだことも想定される。玄武岩、溶結凝灰岩、砂岩、礫岩、安山岩等が混入し、割れた石も多かった。

#### 遺物 (第18~21図)

本住居址は、火災に遭い住居址をそのまま放棄したため、当時生活に用いていた什器類がセットとなって出土した。図示できたものは、甕が9個体あり、その内小形甕は2個体を数える。高坏は1個体あり、坏は3個体であった。完形品が多かったためか破片の出土は他の住居址に比較してかなり少ない。

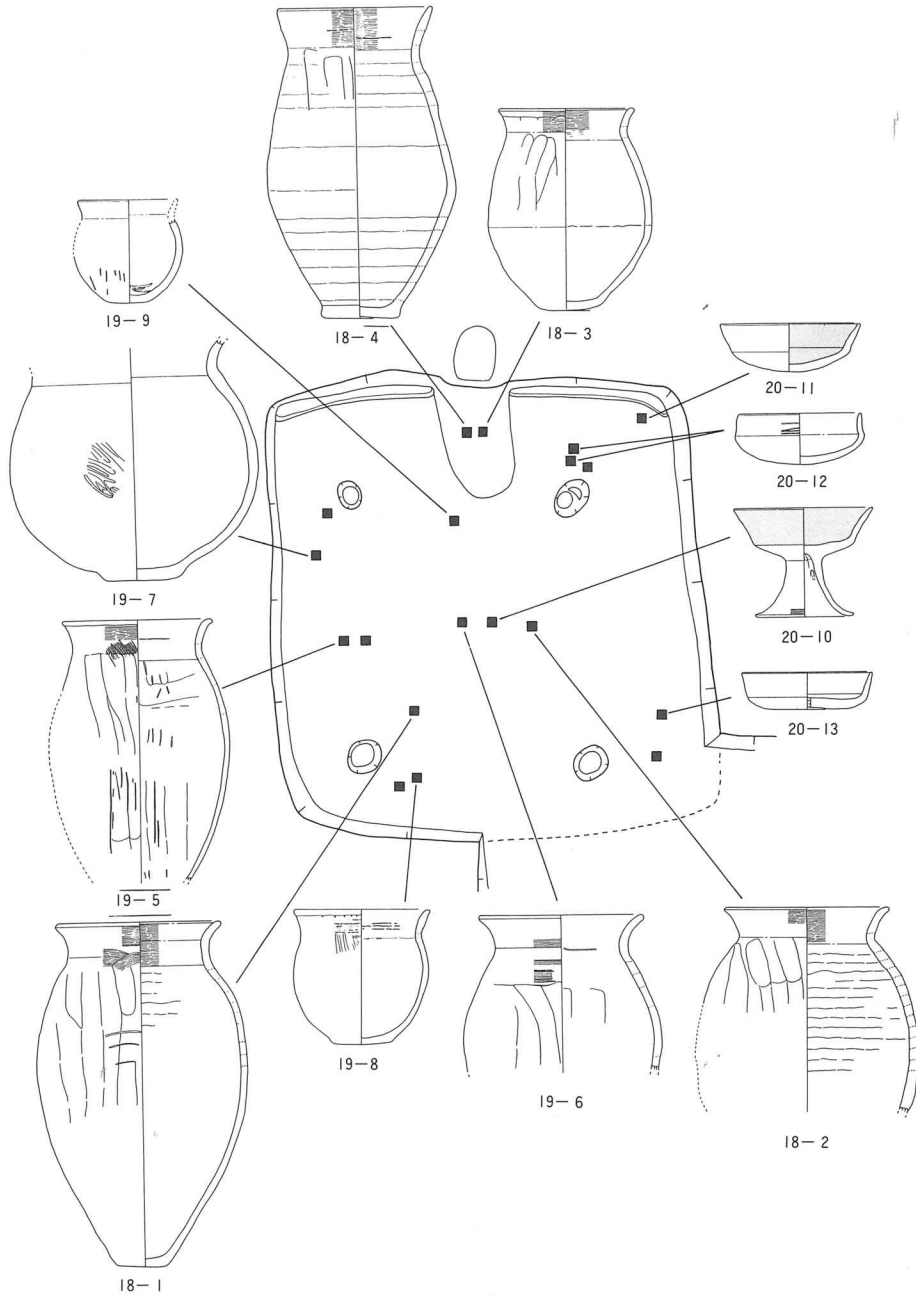
第3表 H2号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
18-1	甕	17.6 36.4 5.3	口辺部強く外反し、胴上位に最大径を有す。 底径短い。	口辺部回転によるナデ 一部刷毛状工具による ナデ。胴部ヘラケズリ	口辺部回転によるナデ 胴部ヘラケズリ	茶褐色 胴部煤付着
18-2	〃	17.4 - -	口辺部「くの字」状に外反。胴中央に最大径をもち、球状に丸味をもつ。器厚は厚い。	口辺部回転によるナデ 胴部刷毛状工具による ナデ。	口辺部回転によるナデ 胴部、輪積が残り調整 粗雑	明褐色
18-3	〃	14.5 21.4 6.5	口辺部「くの字」状に外反。胴中央に最大径をもち。底部やや丸味を呈す。	口辺部回転によるナデ 胴部刷毛状工具による 縦位のナデ。	口辺部回転によるナデ	茶褐色土 お焦げ付着
18-4	〃	16.5 32.6 8.4	口辺部「くの字」状にゆるく外反。胴中央よりやや下部に最大径をもち。	口辺部回転による弱い ナデ。輪積痕凹凸に残 る。煮こぼれ付着。	口辺部回転による弱い ナデ。輪積痕残り凹凸 を呈している。	茶褐色
19-5	〃	16.0 (30.0) (5.0)	口辺部「くの字」状に外反。胴中央に最大径をもち。器厚はうすい。	ナデ調整の後粗雑なヘ ラケズリ	ナデの後、粗雑なヘラ ケズリ	茶褐色
19-6	〃	17.5 - -	口辺部「くの字」状に外反。胴中央に最大径をもち。	口辺部回転による弱い ナデ。胴部刷毛状工具 による粗雑なナデ	口辺部回転による弱い ナデ。胴部ヨコナデ	茶褐色
19-7	〃	(25.0) (26.0) 8.0	胴中央に最大径をもち、球状にふくらむ。 器厚はあつい。	摩滅著しい。 弱いヘラミガキ、一部 黒斑ある。	口辺部摩滅 弱いミガキ	茶褐色
19-8	小形甕	14.5 14.2 6.5	口辺部ゆるく外反し、最大径をもち。	口辺部ヨコナデ 胴部ナデの後ヘラケズ リ	口辺部ヨコナデ 胴部ヨコナデ	茶褐色
19-9	〃	(10.6) (11.0) 4.5	口辺部ゆるく外反。 胴部球状にふくらむ。	摩滅著しい。 粗雑なヘラケズリ	ヨコナデ	赤褐色(外面) 灰褐色(内面)
20-10	高坏	(14.7) 11.5 10.4	坏口辺直線的に大きく開く。 底面に稜を有す。 裾大きく開き器厚はうすい。	坏部口辺のみ黒色研磨 ヨコナデ	内面黒色研磨	明褐色 回転実測
20-11	坏	14.8 5.1 8.0	口辺部直線的に開く。 底部とのさかいに稜を有す。 丸底である。	全体に弱いヘラミガキ が施されている。	内面黒色研磨	茶褐色
20-12	〃	13.0 5.3 8.0	口辺部直立して立ち上がる。広い丸底を呈し、稜はやや強い。 器厚は厚い。	全体に弱いヘラミガキ が施されている。	全体に弱いヘラミガキ が施されている。	赤褐色
20-13	〃	(13.8) 4.0 (9.0)	口辺部やや外傾し、直立気味に開く。底径広く、器厚は厚い。	全体に弱いヘラミガキ が施されている。	全体に弱いヘラミガキ が施されている。	赤褐色 回転実測

1は、南西コーナー寄りに押しつぶされた状態で出土したが復元は完全な形で完成した。口辺部は強く外反し胴上位に最大径をもち、底径は短い。調整は口辺部に回転によるヨコナデが施され、外面には一部刷毛状工具による刷毛調整がみられる。胴部はヘラケズリおよびヘラナデによる縦位の線がみられるがヘラケズリの線は弱い。2は口辺部がくの字状に外反し、胴部は球状に近い形状を呈する。口辺部は回転によるヨコナデが施され、外面胴部はヘラケズリ・ヘラナデが施されている。輪積痕が顕著である。3は口辺部くの字状に外反し、胴中央に最大

径をもち球状を呈する。底部はやや丸味を帯びている。口辺部は回転によるヨコナデが施され、外面の胴部は弱いヘラケズリが施されている。

4は、口辺部くの字状にゆるく外反する。内外面共に輪積みの跡が凹凸状に残っている。口



第21図 H 2号住居址出土土器状態図



辺部は回転による弱いナデ調整がなされるが、胴部は煮こぼれや煤の付着等により土などもこびりついていて器肌がわからない。胴上部にわずかなへラケズリが認められる。3、4はカマド内から出土した。4が支脚石にのったままの状態出土し、3はその横にズリ落ちた状態であった。中には粉末状のものを煮たとおもわれる食料が残っていた。炭化して黒色であったが、デンプン独特のつやがある。3、4共に胴下に>状のふくらみをもつ。

5、6はやはりくの字状に外反した口辺を呈す。6は球状を呈した胴部をもつ。5は、ナデ調整の後、粗雑なへラケズリが施されている。6は、口辺部回転による弱いヨコナデが施され、胴部は弱いへラケズリ、へラナデがみられる。内面胴部にわずかなへラケズリが認められる。

7は、くの字状に外反する口辺部をもち、全体が球形に丸くふくらんだ胴部を呈す。外面は弱いミガキがかけられ光沢が認められたが、ミガキのへらの跡痕はあまり残っていない。

8、9は小形甕である。口辺部くの字状に外反し、平底を呈する。8は、口辺部ヨコナデされ、輪積の跡が残っている。9は摩滅著しいが、粗雑なへラケズリが一部認められる。

10は高坏である。坏身は内面黒色研磨され、外面は口辺部のみ黒色研磨されている。口辺部との境には明瞭な稜が残っている口辺部は直線的に開く。柱状部から裾にかけて大きく開き、器厚がうすくなる。

11～13は坏である。11、12は丸底を呈し、口辺部と底部との境に稜を有す。13は底径広く、器厚が厚い。3個体共に弱いへラミガキが施されている。赤褐色を呈し胎土が精選されている。

これ等遺物の出土状態を第20図に示した。H2号住居址が廃絶した後に平安時代のH3号住居址が構築されているため、重複した南東側付近は床面直上からの礫、土器の出土がほとんどみられない。

本住居址の土器一括セットは、甕9個体、(内小形甕は2個体)、坏3個体、高坏1個体である。この他の出土遺物は2～5cm大の細片で覆土上部からの出土であり、埋土の過程において混入したものであろう。図面化でき得るものはない。

貯蔵形態の土器は、19-7が最も顕著である。口縁部を欠損するがこれは欠損したままずっと使用していたとおもわれる。内面はお蕉げ等の付着は全くなくきれいである。この他、18-2、19-5、6が貯蔵用に使用した甕であるとおもわれる。底部が欠損しているので決定はできないが残存部の内面にお焦げの付着、外面に煤の付着が全くみられない。

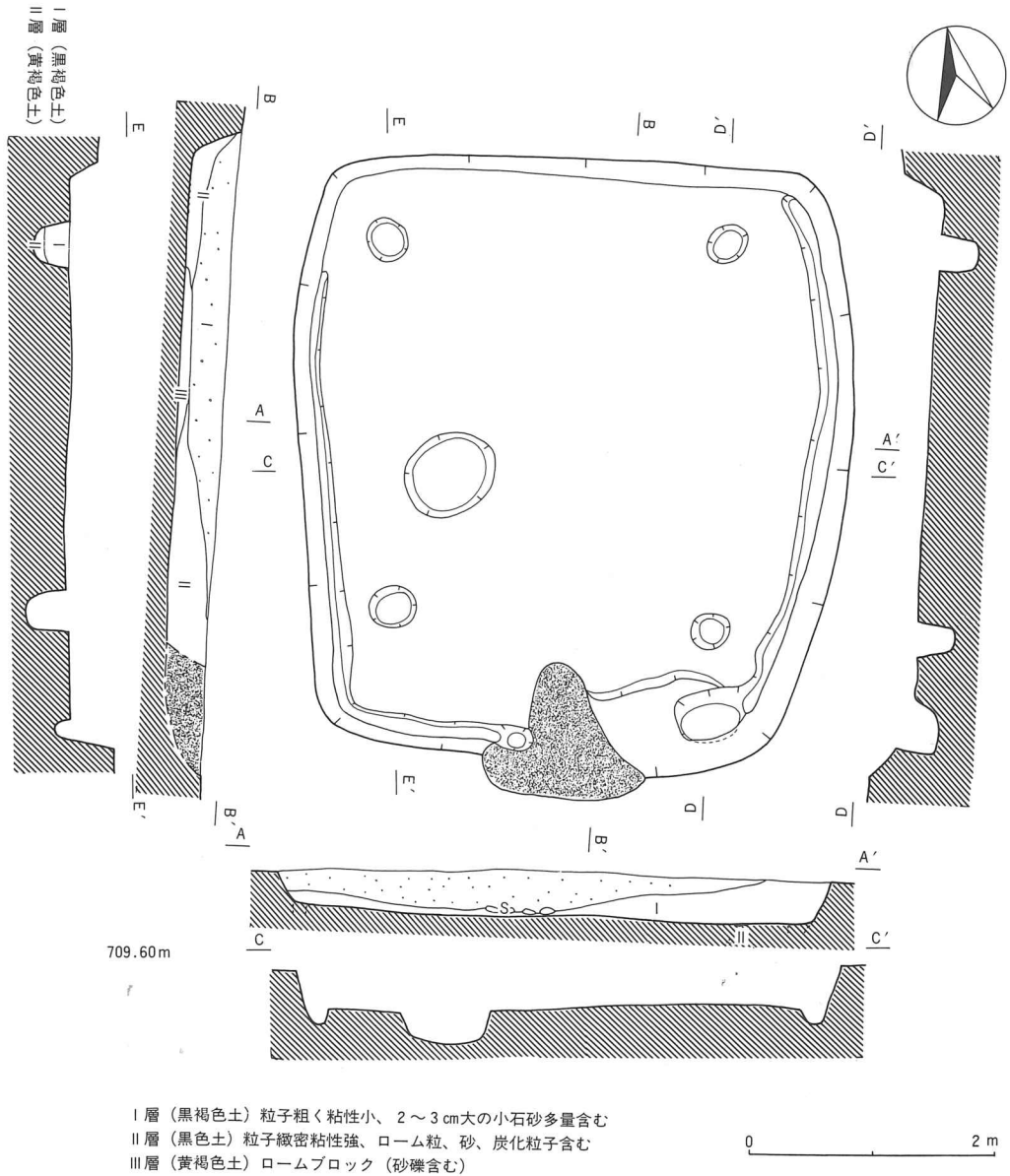
煮沸形態の甕は、カマドにかかっていた2個体が最も顕著である。この他、18-1、19-9の2個体に使用した痕跡が認められる。従来、主食である穀類は甗と甕で蒸していたことが知られていたが、本住居址では甕で煮ていたことがわかった。本調査では甗の出土が見られない。

供饗形態は高坏、坏があるが、煮沸、貯蔵形態の土器と比較するとかなり少ない。

本住居址の所産期は、古墳時代末期～奈良時代における過度期的様相を呈している。両時代の土器群が混入していることと、須恵器の出土が全くみられない。従来須恵器によって時代決

定をしている報告書が多く、そうした観点からみれば、本址の土師器は古墳時代後期に比定されそうであるが、遺跡内出土の須恵器の破片をみる限り、坏底部のへら切り、蓋のカエリが一片も見られない、甑の出土がない等から判断して、あえて過度期と比定したい。

(島田 恵子)



第22図 H 3号住居址実測図 (1:60)

### 3) H 3号住居址

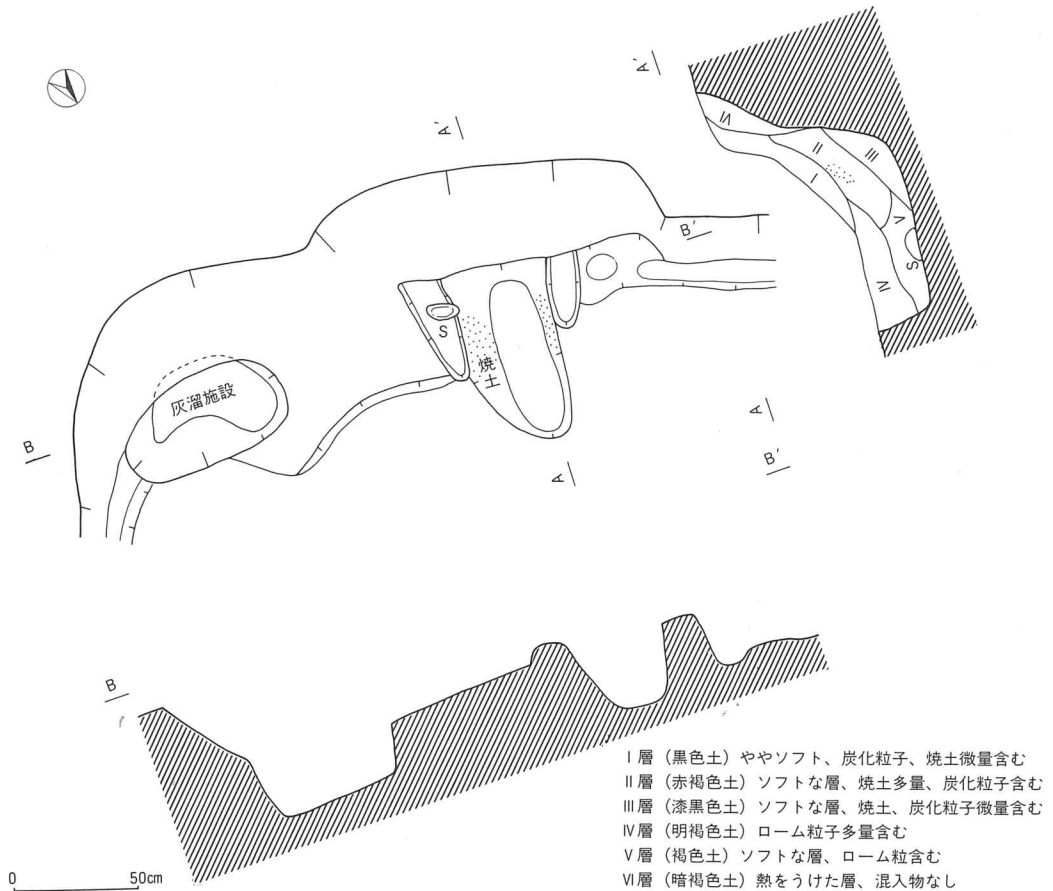
#### 遺構 (第22・23図)

本住居址は、H 2号住居址の南東側の壁を切って構築しており、H 2号住と北西側の壁が重複している。プラン確認は、黒色土中における黒色の落ち込みであったため極めて困難であった。しかし、南壁と西壁に1cm～5cm大の小石の流れ込みがあり、それが線を引くような状態であったため、そのラインを目安にしながらようやく確認できたという状況である。

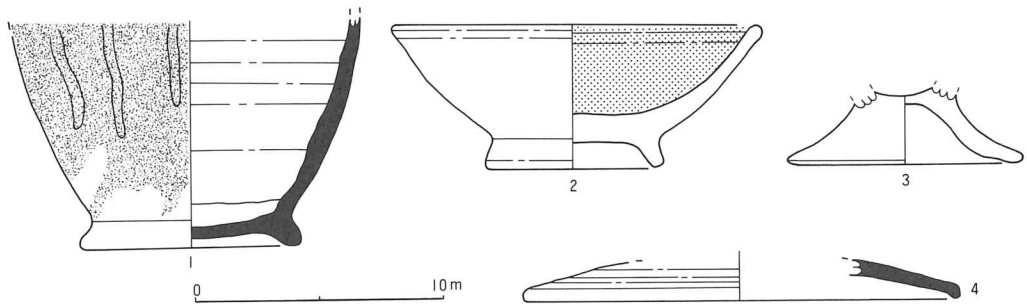
平面プランは、東西450cm、南北500cmを測り、南壁がやや幅がせまくなる形態のやや不整な方形を呈する。カマドを中心とした主軸方位は、S-10°-Wを示す。

確認面からの壁高は、37cmを測り、壁は急傾斜をもって立ち上る。かなり深い住居址である。

覆土は、3層によって形成される。I、II層は黒色土を基調とした土層で、I層は黒褐色を呈し、粒子が粗く、2～3cm大の小石や砂を多量含む。水の流れこみがあったことを示してい



第23図 H 3号住居址カマド実測図 (1 : 30)



第24図 H3号住居址出土土器実測図(1:3)

る。しかし、南東側には全く流れ込みのなかった部分もみられる。II層は黒色を呈し住居址床面上の堆積土で、炭化粒子を混入している。III層は住居址中央に部分的に堆積しているロームを多量に混入したブロック層である。

床面は、ほぼ平坦であるが小石が浮き出た状態で、砂礫層の(全体層序の3層)面まで掘り下げられている。柱穴は4本で、規格的な配置を示している。規模は、30cm×35cm、深さ30cmを測りほぼ均一した大きさである。P<sub>5</sub>は、78×65cm、深さ25cmを測り、貯蔵の用途のあった施設であると考えられる。また、東壁際と南壁カマド脇から西壁にかけて、幅10~18cm、深さ10cmを測る周溝が巡っている。

カマドは、南壁中央に設けられており、先端をやや壁上部まで掘りこんでいる。左右の袖は若干残ってはいるが、石はほとんど抜かれていた。カマド左脇は壁を掘り残してテラスを設け南東コーナーには、70×35cm、深さ25cmを測る灰溜施設が築かれていた。壁下をオーバーハンクして掘り込み、底面には灰、少量の焼土が貼り付いていた。本住居址のようにカマドが南壁中央に設置されている例は非常に少ない。

#### 遺物(第24図)

本住居址は、今回の調査の中では形態も大きく、深い住居址であったが遺物の出土は少なかった。図示した4点の他は、土師器甕の3cm~5cm大の細片70点、須恵器坏、蓋の細片5点が覆土中より出土したのみである。

1は灰釉陶器の長頸壺であるとおもわれる。緑色の釉がしずくとなって流れ落ちている。流し掛けによるかなり乱雑な施釉がなされている。覆土上部からの出土である。

2は、高台付坏で内面黒色が施されている。炭素吸着は全面均一化した黒色であるが、研磨されていないので光沢がない。1と同じ北西コーナー付近の覆土上部より出土した。

3は、台付甕の台部である。台の高さは2.7cmを測り、裾が大きく開く。覆土上部からの出土である。

4は、須恵器蓋の細片である。口縁端部は断面三角形を呈す。器厚は薄い。

以上の土器群から、本住居址は平安時代に比定されよう。

(佐藤 敏)

第4表 H3号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
24-1	灰釉壺	- - 8.8	安定した台部を有す。	緑色の釉が流れた状態で施釉されている。	ロクロ痕	灰白色覆土上
24-2	高台付坏	14.8 5.2 7.2	口縁部やや内湾気味に開いて立ち上がる。器厚、厚く台部高く安定している。	ロクロヨコナデ	内面黒色が濃く全面均一に黒色が吸着している。	褐色
24-3	台付甕	- - 9.5	台部のみ出土である。底部の裾大きく開く。	指によるナデが施されている。	指によるナデが施されている。	赤褐色
24-4	須恵器蓋	- - (17.5)	口辺端部断面三角形を呈す。器厚うすい。	ロクロ痕	ロクロ痕	灰色回転実測

#### 4) H4号住居址

##### 遺構(第25・26図)

本址はH2号住居址の南西側に、また、H8号住居址の南東側に接近した状態で検出された。プラン確認の初めよりカマド煙道部の石組みの上面が露出しており、この露出部の上部での住居址のプラン確認につとめたが、ほとんど住居址のプランは出てこなかった。このため10cm程掘り下げるとようやくプランが把握できるという状態であった。

平面プランは、東西355cm、南北400cmを測る小形の住居で、形は隅丸方形を呈する。主軸方位は、N-33°-Eを示す。

壁高は、23~30cmを測り、急傾斜で立ち上る。カマド右脇から東壁にかけては壁中に砂礫が多量混入している。床面中央にも礫が多量にみられるが、西南側はローム層のなめらかな地肌を見せており、床面はパンパンに固く叩きしめている。砂礫は本住居址構築以前の雨川の氾濫が部分的に生じていることを示している。またこのような部分的な面のみの氾濫の跡は、この土地が凸凹であったことを証明しているとおもわれる。

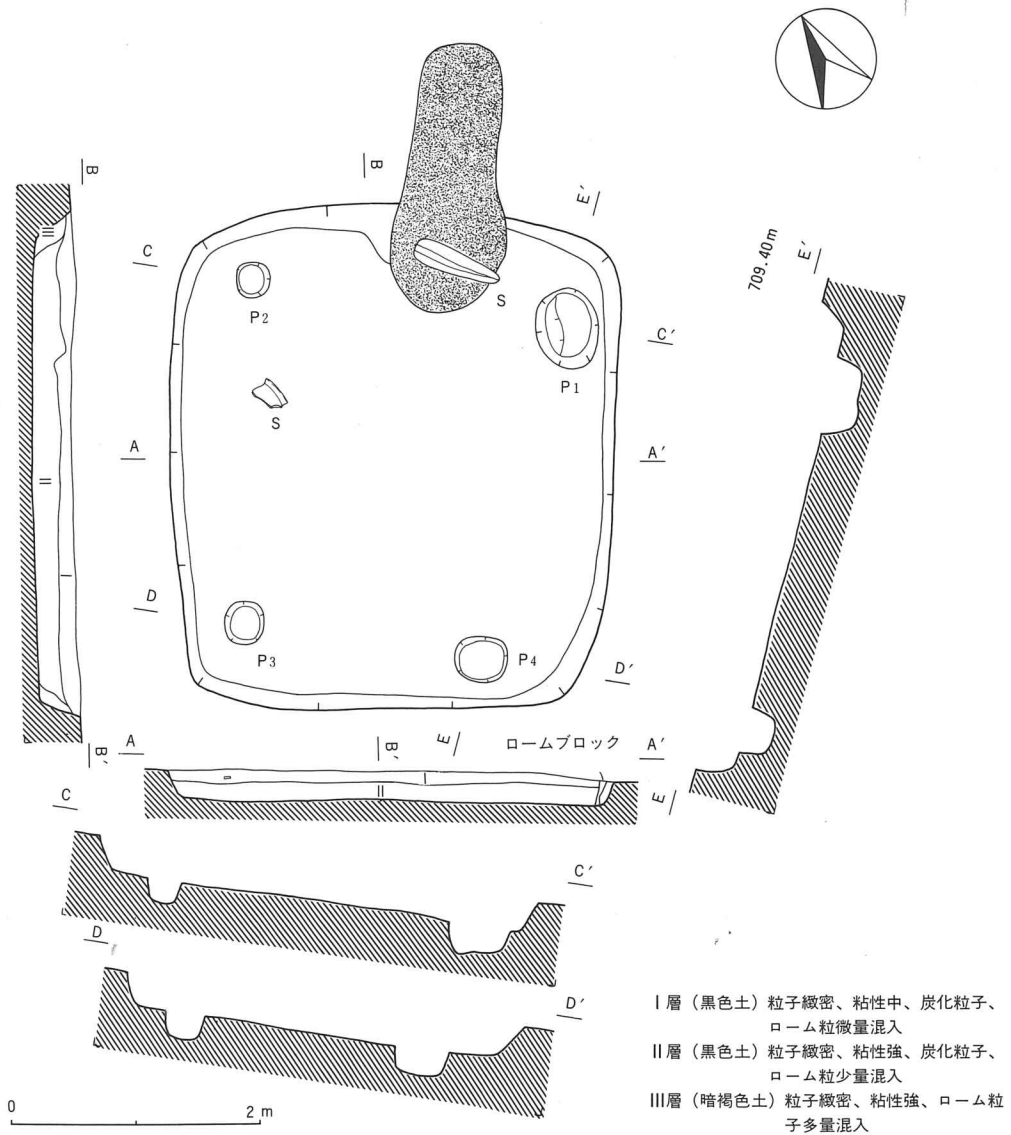
覆土は、3層に分かれていることが観察された。I・II層共に黒色を呈し、炭化粒子、ローム粒子を混入する。II層の方が粘性が強い。III層は三角堆土である。

ピットは4個検出された。P<sub>1</sub>は、50×60cm、深さは24cmを測る、P<sub>2</sub>は径26cmの円形で深さ17cm、P<sub>3</sub>は、32×34cm、深さ21cm、P<sub>4</sub>は42×36cm、深さ24cmを測る。P<sub>1</sub>は規模が大きく西側にテラスを有している。柱穴をかねた貯蔵用の施設であったと考えられる。

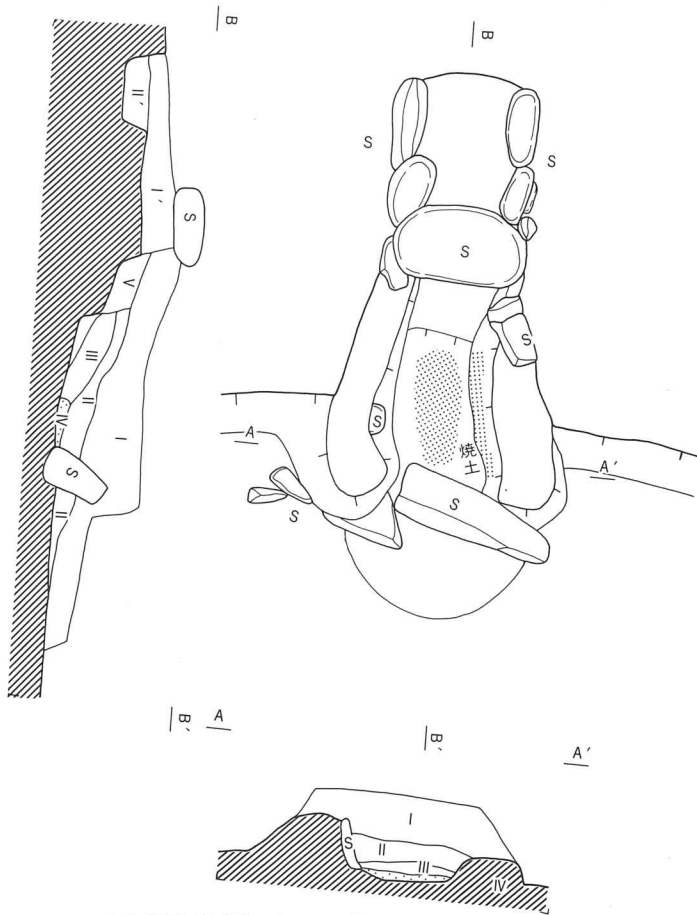
カマドは、北壁中央よりやや東寄りに位置している。壁外に煙道を掘りこんで、先端が石組

みされている変わったつくりである。甕をカマドにかける部分は壁際ギリギリにあたり、カマドの構造も住居址が小形であるためにいくらか異った状態にあるといえる。溶結凝灰岩の焚口天井石がくずれており、左袖中には石が組まれて粘土で包みこまれるように固められている。

煙道先端には、53×30cm、厚さ13cmを測る偏平な安山岩の河原石が、両側に組まれた石の上に蓋をするように置かれている。この石の下は地山層で掘りこまれた形跡はみられなかった。しかしこの偏平な石の外側にも左右に、20~30cm大の安山岩が組まれている。いずれも落込み



第25図 H 4号住居址実測図 (1:60)



- I層 (黒色土) 炭化、焼土粒子微量混入
- II層 (黄褐色土) ローム、焼土、炭化粒子微量混入
- III層 (赤褐色土) ローム、炭化粒子少量、焼土多量混入
- IV層 (赤色土) 焼土
- V層 (明褐色土) ローム、小石 (地山層) 混入

第26図 H4号住居址カマド実測図 (1:30)

底径5cmを測り短い。口辺部はヨコナデ、胴部はヘラによるナデが斜め、横位、縦位に施されているがヘラケズリの痕跡は弱い。胎土に混入していた砂粒子がヘラナデにより擦られて、細く短い擦痕を走行させている。胴下の底面付近は大胆なヘラケズリが施されている。内面はヨコナデが施されているが、胴下に細長いヘラケズリが残っている。

2、3は、小形の須恵器甕である。2は、口辺部を欠失する。3は糸切り底部を有する。

4は、器厚のうすい須恵器口辺部片である。黒色の自然釉が付着している。小形広口壺の口辺部かとおもわれるが伴然としない。

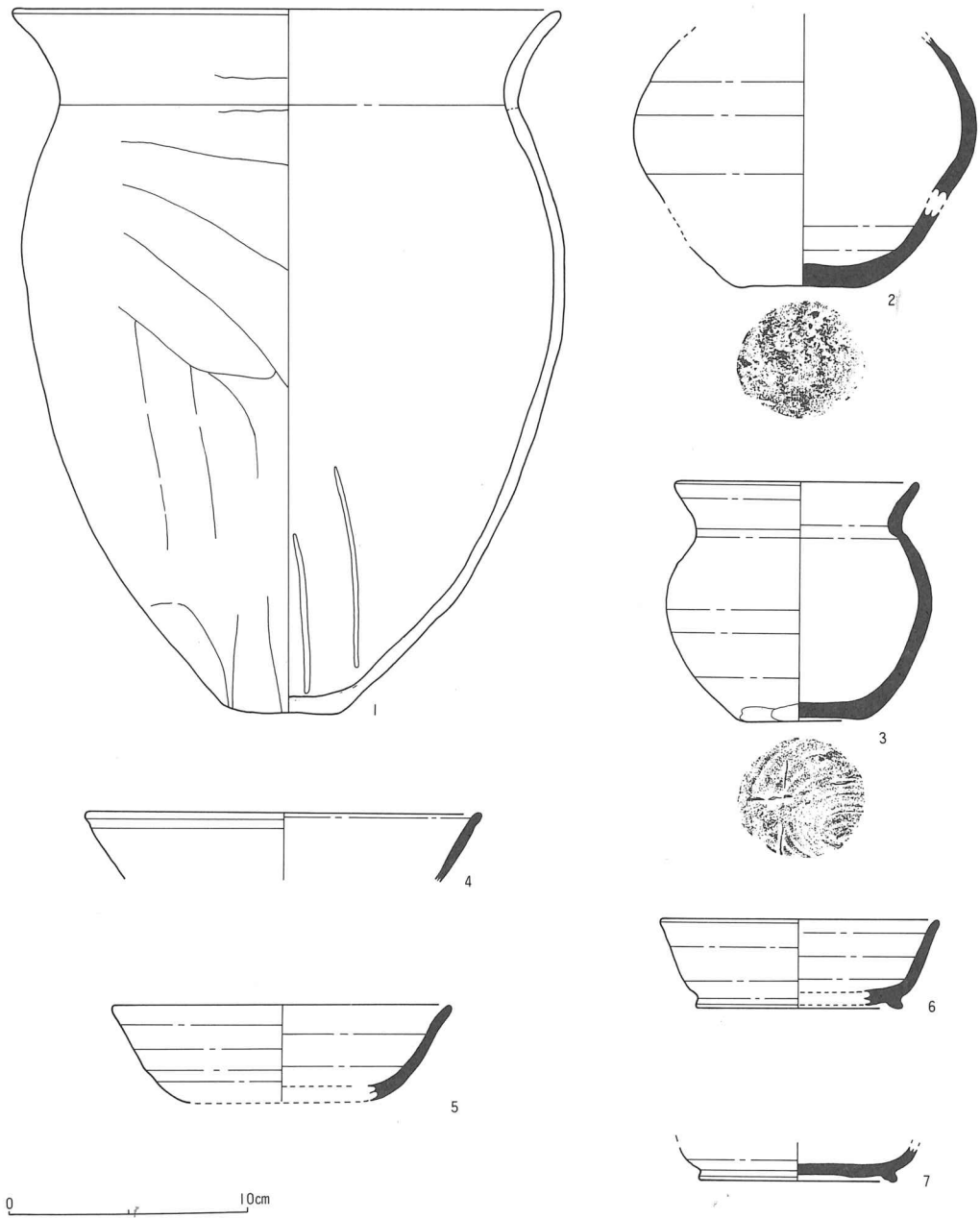
はない。石で組んだ煙道はあまり見られないが、佐久市岩村田上の城遺跡において検出されている。

#### 遺物 (第27・28図)

本住居址から出土した遺物は、器厚のうすい甕破片が大半を占める。いずれも2cm~5cm大の細片が多い。破片が多く底部片が2個体分出土していることから、この甕が主流であったことが伺える。

須恵器は大形の甕あるいは壺とおもわれる10cm大~5cm大の破片、坏口縁部片6点があった。この他に図示したものは、土師器甕、須恵器小形甕・坏・高台付坏等で須恵器が多い。

1は、土師器甕で口辺部くの字状に外反し、胴上で球形に湾曲する。



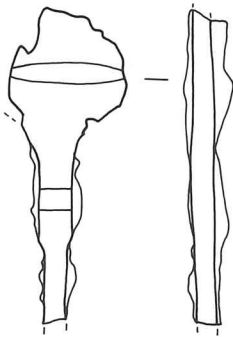
第27図 H4号住居址出土土器実測図(1:3)

5は、須恵器坏でわずかに残った底部はへラケズリがなされている。6、7共に高台付坏である。6は口辺部が直立して立ち上る。須恵器坏は3点共に器肌がなめらかであり、胎土が緻密である。いずれも床面直上からの出土で、カマド左脇から西壁中央に集中していた。



第5表 H4号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
27-1	甗	22.8 29.0 5.0	口辺部は「くの字」状に外反する。最大径は口縁部にある。底径短く、器厚はうすい。	口辺部ヨコナデ 胴部へらによるナデ 胴部～底部へラケズリ	ヨコナデ 胴部へラケズリ	赤褐色
27-2	須恵器 小形甗	- - 5.5	胴中央に最大径を有す。	ロクロナデ	ロクロナデ	暗褐色 回転実測
27-3	〃	10.2 10.0 5.4	口辺部直線的に開く。胴中央に最大径を有す。	ヨコナデ 胴部へラケズリ	ロクロナデ	暗褐色
27-4	須恵器 広口壺	16.5 - -	口辺部直線的に開く。器厚うすい。	ロクロ痕 自然釉付着	ロクロ痕	黒灰色 回転実測
27-5	坏	(14.0) (4.0) (8.0)	口縁部内湾気味に立ち上がるが、端部で外反する。底部へラケズリ。	ロクロナデ	ロクロ痕	青灰色 回転実測
27-6	高台付 坏	(11.6) (3.7) (8.6)	口縁部直立気味に開いて立ち上がる。底径広い。	ロクロナデ	ロクロナデ	灰褐色 回転実測
27-7	〃	- - (8.2)	底径広い。底部糸きり。	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色 回転実測



第28図 H4号住居址出土  
鉄鍬実測図(1:2)

また、住居址中央の覆土下から第28図に示した鉄鍬が出土した。現残の長さ8cmを測り、鍬身部3cm、頸部5cmである。鍬身部は三角形を呈すが、腐蝕が進んでいて断面が正確につかめない。逆刺の腸挟は挟りが小さい。また、頸部箆被の関は存在している。重さは30gである。型式分類は短頸箆被腸挟両丸造三角の鉄鍬となろう。

佐久平での調査例では、住居址内からの鉄鍬の出土は奈良時代に入ると急増する。古墳時代の住居址での出土はあまり例が見られない。南佐久郡においてもやはり同時期より鉄の精練が庶民の間ではじまっていたのであろう。

本住居址の所産期は奈良時代に比定されよう。

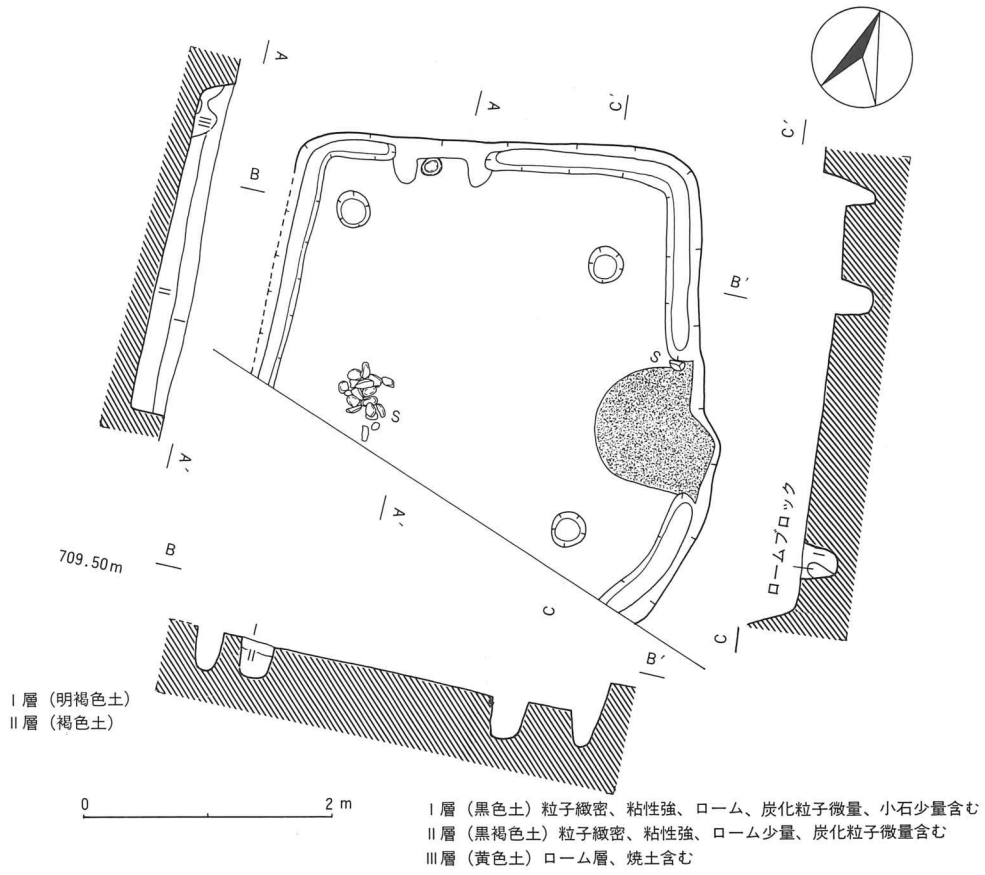
(島田 恵子)

## 5) H5号住居址

### 遺構(第29~33図)

本住居址は、H6号住居址と重複して検出された。H6号住に西壁を切られていたが、本址の方が床面がやや低かったため周溝は残っていた。南側は区域外のため完掘はできなかった。

平面プランは、東西側は約360cmを測る。南北側はカマドの位置、柱穴の位置から判断して4



第29図 H5号住居址実測図 (1:60)

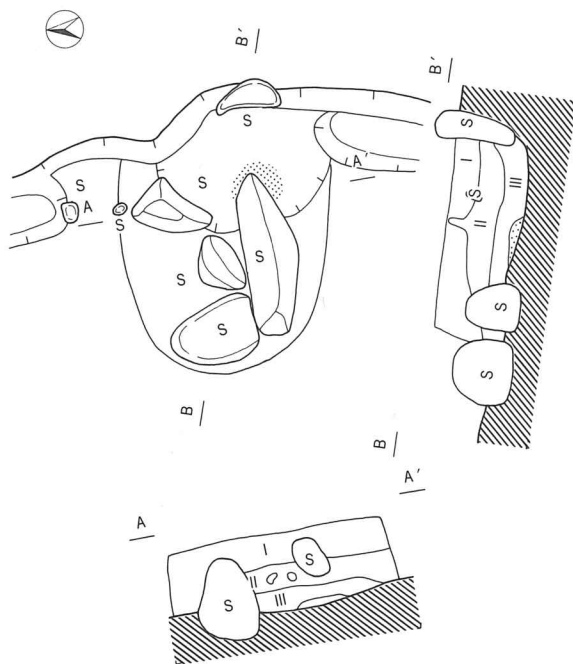
m前後を測ると推定される。形態は不整な方形を呈している。

住居址の深さは、30cmを測り、壁は急傾斜をもって立ち上る。また、本住居址はカマドを除く壁際に周溝が巡っている。幅15~20cm、深さは20cm前後を測りかなり深い周溝である。壁から垂直に落ちて底面は平である。雨水等を防ぐために板を巡らした溝と考えられるが、これだけ深く掘りこんだ周溝は例が少ない。

覆土は黒色を基調とした2層によって形成され、2層共に炭化粒子、ローム粒子を混入していた。

床面は、平坦で地山層への礫の混入はあまりみられない。また、西壁中央の床面には、薦を編むのに用いたとおもわれる8cm~15cmを測る石が16個重なるように集石していた。第33図に出土状態図を示した。約50cmの範囲内に集石している。

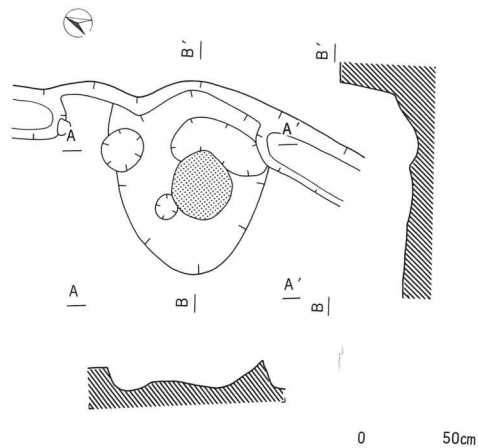
ピットは、3個検出された。3個とも平均化した規模で支柱穴であるとおもわれる。径28cm深さ30cmを測る。



第30図 H 5号住居址カマド実測図No.1 (1:30)

Ⅰ層 (黒色土) ローム斑点状に混入、炭化粒子微量混入  
 Ⅱ層 (赤褐色土) 焼土多量混入  
 Ⅲ層 (明褐色土) ローム斑点状に混入、焼土微量混入  
 Ⅳ層 (黄褐色土) ローム層

第30図 H 5号住居址カマド実測図No.1 (1:30)

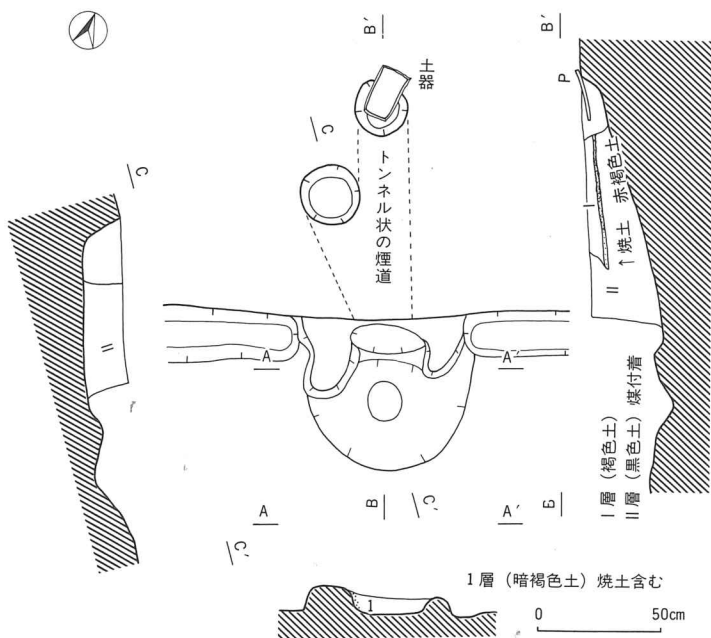


第31図 H 5号住居址カマド実測図No.2 (1:40)

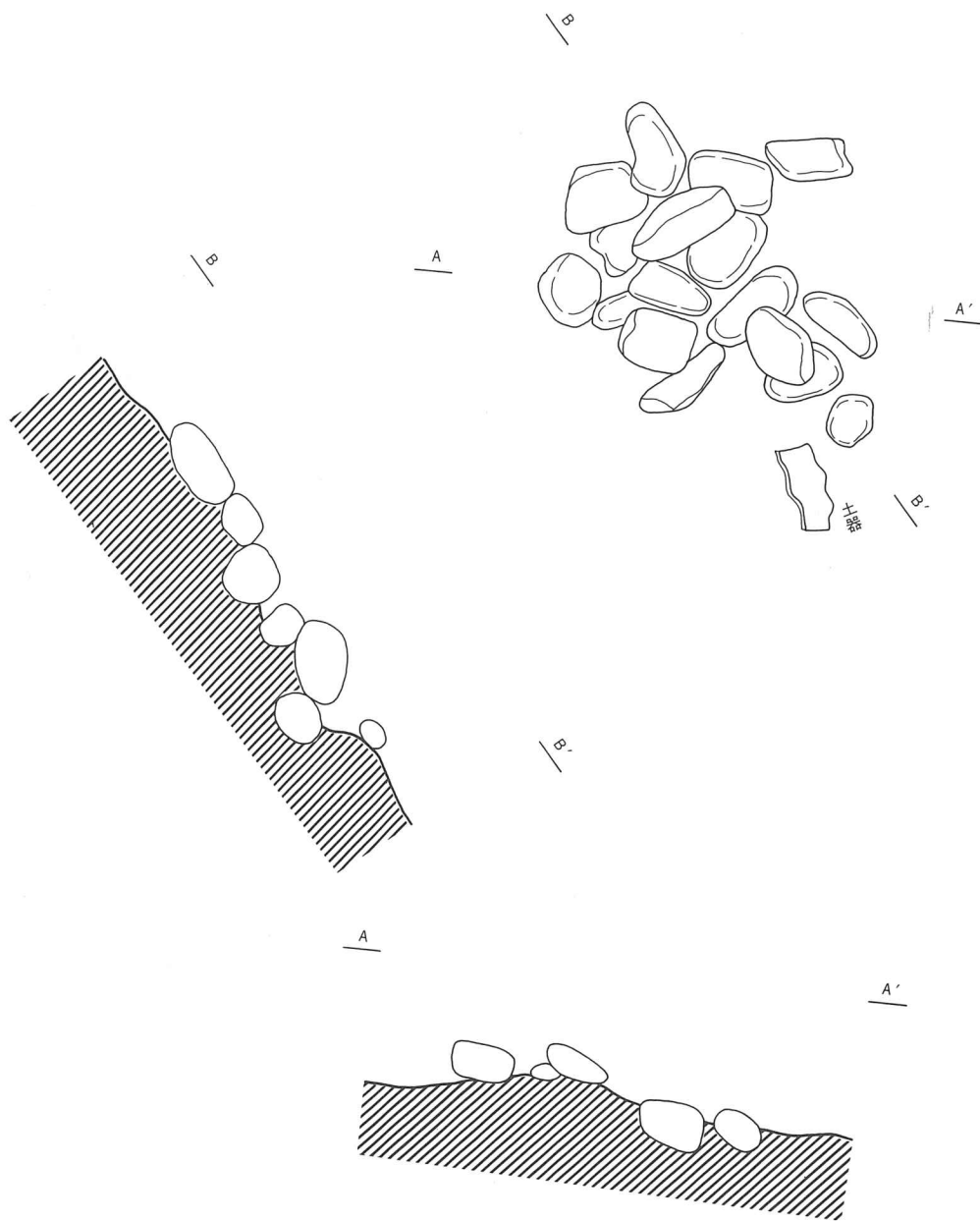
カマドは東壁中央と北壁中央から西寄りに2基が存在していた。北壁側のカマドは古く、東壁側のカマドが新しいとおもわれる。東壁のカマドは焚口の天井石が崩れており、住居址廃絶の折に壊されたと考えられる。

このカマドは、壁際に高さ32cm、幅26cm、厚さ10cmの玄武岩をピッタリ貼り付けるように据えている。焼土はこの礫から22cm内側に散布しており、H 4号・H 6号住居址のカマドと同様に火床はかなり壁際に近接している。石組を残すのみで、袖は完全に崩されていた。

北壁側のカマドは、壁から30cmの幅で左側の袖が、右袖は25cmを測る部分が残っていた。袖と袖の間隔は

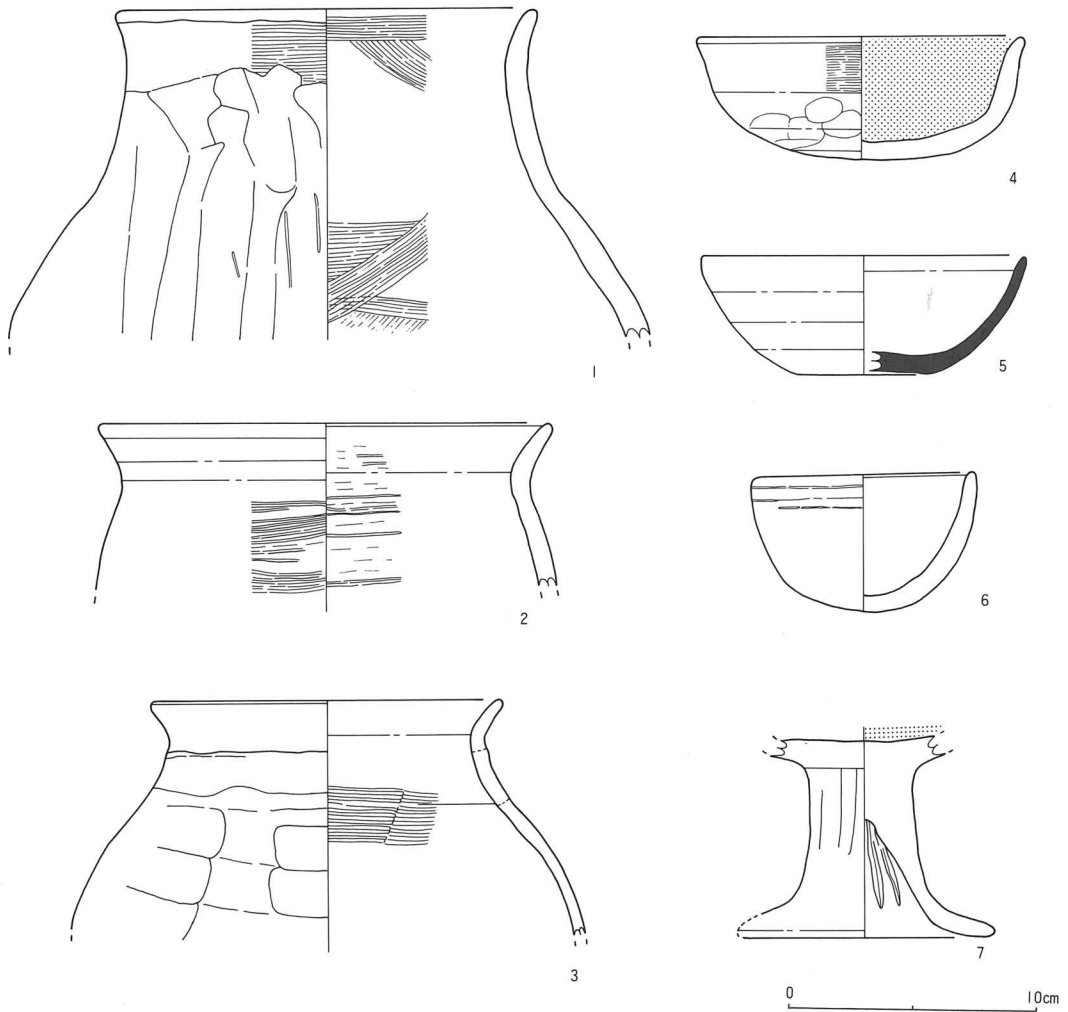


第32図 H 5号住居址カマドNo.2 実測図 (1:30)



第33図 H5号住居址薦編みの重し石出土状態図(1:10)

28cmとせまく、住居址と比例してカマドも小さい。このカマドは、煙道がトンネル状に当時のままの状態で遺残していた。おもしろいことに煙道は2つ存在している。一つは、壁から70cm外側に煙出しの穴があり、上面に長さ20cm、幅10cmの甕胴部片が伏せてあった。もう一つはカ

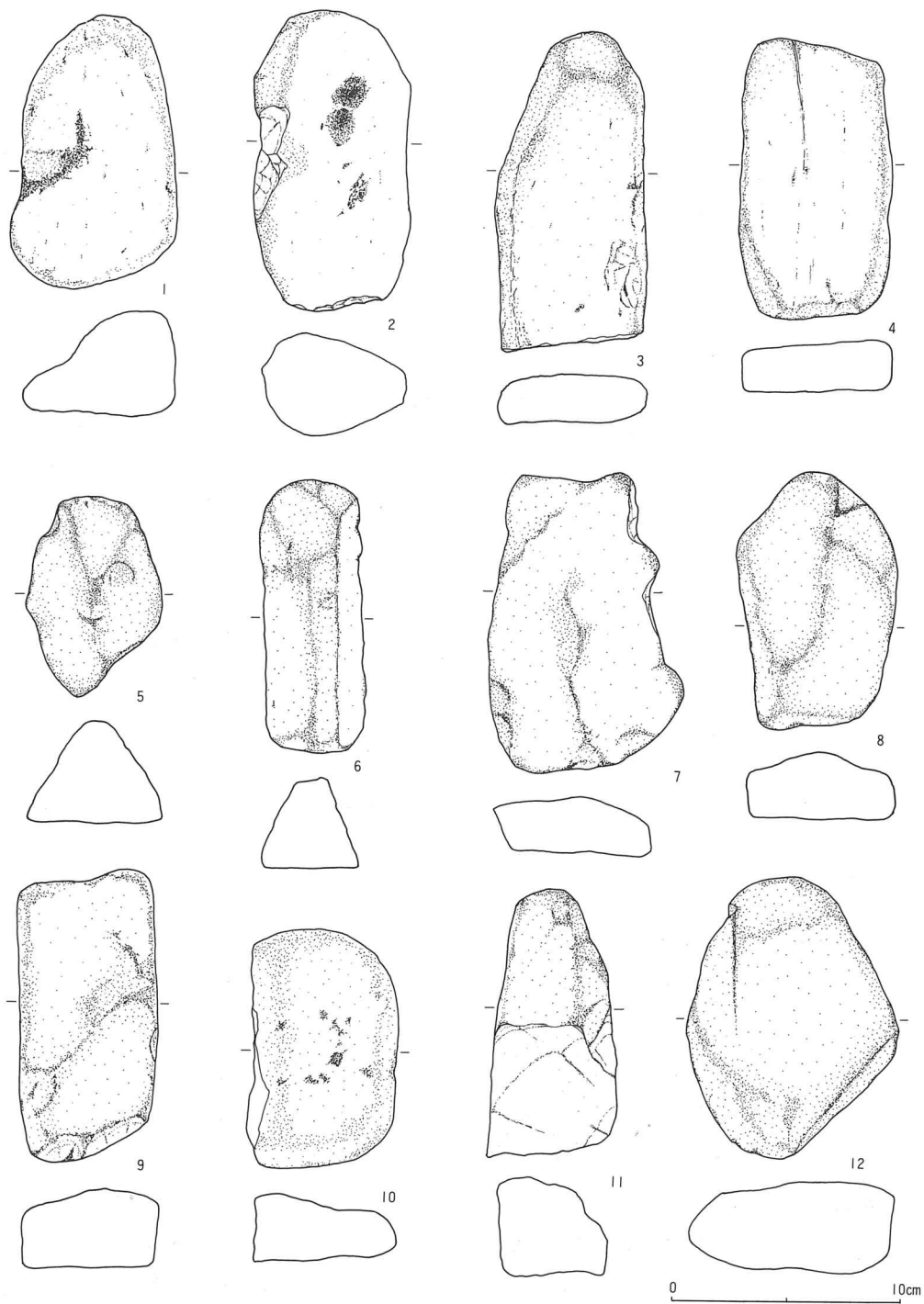


第34図 H5号住居址出土土器実測図(1:3)

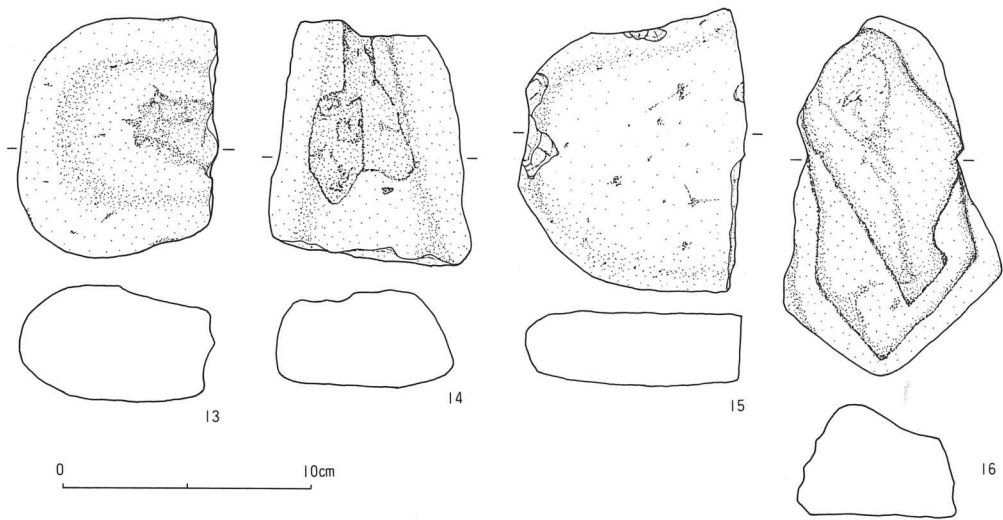
マド中央からやや西寄りで壁から40cm外側に煙出しがある。こちら側はカマド本体に対し煙道は斜めになる。煙出しの部分に土器片が伏せてあった煙道の断面図を見ると、底面6~17cm上面に赤褐色土が付着している。この部分が煙道の天井部であったことを証明しているといえる。もう一方の煙道断面図にはこの付着が見られない。これは、あまり使用しなかったことのあらわれでもあろう。

遺物(第34~37図)

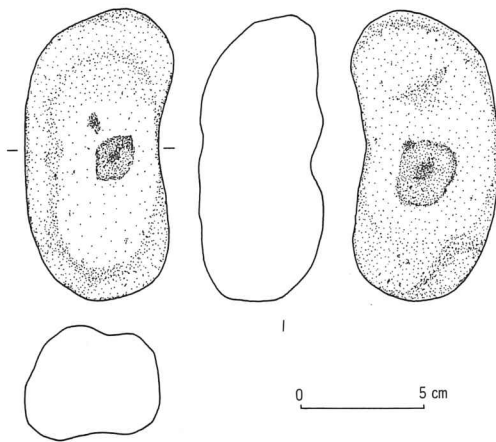
本住居址は、甕、坏、小形埴、高坏、須恵器坏が出土している。破片は、甕胴部片が多い。



第35図 H 5号住居址出土コモ編み重し石実測図No.1 (1 : 3)



第36図 H5号住居址出土コモ編み重し石実測図No.2 (1:3)



第37図 H5号住居址出土凹石実測図

1は、口辺が直立して立ち上る。回転によるナデの後、胴部はへラゲズリが施されている。この器形は、息の長いへラゲズリが施されている例が多いが、同上部のみの破片なので不明である。内面は刷毛状工具によるナデが施されている。器厚は厚い。2、3共に口辺部はくの字状に外反し、2は回転によるヨコナデが施されている。3は、口辺部ナデ調整され、胴部はへラゲズリがなされている。器厚はうすい。

4は、内面黒色の坏で口辺部ナデが施され、底部は光沢のあるミガキがかけられたのちへラゲズリされている。5は、須恵器坏で内湾して立ち上る。底部は粗雑なへラキリがなされている。

6は、小形の坏で、丸底を呈し腰のすわらない不安定な底面をみせている。口辺部内面はへらと輪積み痕がみられ外面はへラゲズリが施されているが、摩滅が著しい。

7は、高坏である。坏口辺部を欠失する。柱状部は垂直で、裾部は急激に屈曲して開く。

第35図、36図は 薦編みの重しに利用したとおもわれる集石を図面化したものである。1は砂岩である。角は全て丸く、右側面は平でわずかに擦られている。2は硬砂岩でかなりスベスベしている。正面に3ヶ所浅い凹みがあり、両側面の中央は反りがある。3、4は、荒船玄武岩である。厚さ2cm前後で正裏面共に平である。3は下端に近い両側面に使用した痕跡が認められる。5は変質硬砂岩で菱形をした小形の石であるがスベスベしている。6は硬砂岩で断面

が台形を呈する。右側面を除いた各面はよく擦れている。

7は、閃緑岩で緑色の斑点が浮き出ているきれいな石である。左側面に擦り痕がある。8は安山岩で右側面が擦られている。7、8共に扁平である。

9は、扁平な長方形をした荒船玄武岩である。全体が擦られている。10は輝石安山岩で左側に割れ口がある。扁平で裏側の中央に擦痕がある。11は砂岩で下端が割れている。裏面はよく擦られている。12は、砂岩、チャートが混入した堆積岩としての性格があらわれた石である。右側面中央に使用痕が認められる。13、14は共に安山岩で、13は右側が14は上下端が割れて9×7.5cmを測る大きさにそろえられている。

15は砂岩で右側が割れている。左側中央と上端中央に使用痕が認められる割れ口がある。割れ目のない下端にも使用痕が認められる。扁平な石である。16は荒船玄武岩である。うずまきのはっきりと認められる。両側面中央が凹んでおり全体がなめらかな肌ざわりを呈している。以上が、集石していた石である。扁平で大きさも統一している。全ての石に擦り痕が認められ、使用していたことを伺わせられる。第37図は凹石である。正裏面にかなり深い凹みをもつ。左右側面はよく擦れて色も変色している。両手で握りしめた使用の痕であるとおもわれる。

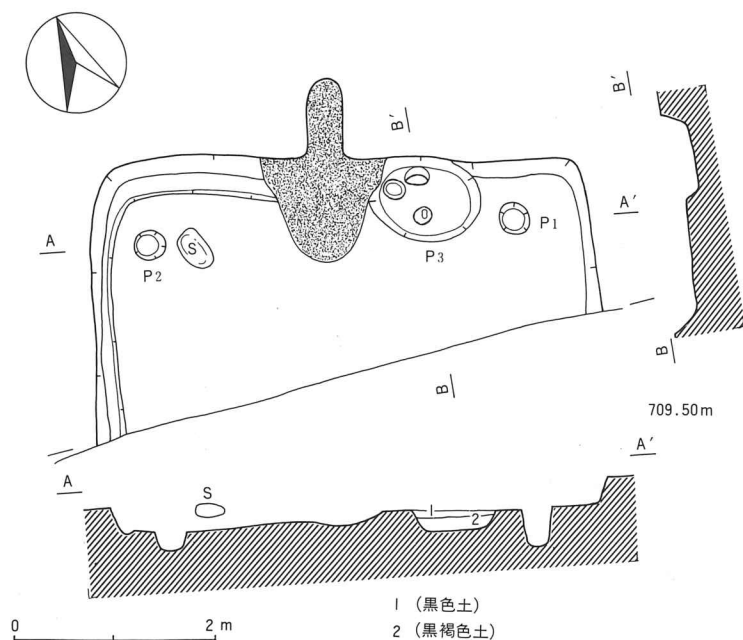
本住居址は、20cmという深い周溝および2つのカマドを有している。薦編みの重し石等も出土し、かなり生活の多様化が伺える。H 6号住居址と重複していること、カマドの形態、第34図4に示した、内面黒色でヘラケズリが施された坏底部の形態から、奈良時代の様相が伺える。所産期は、奈良時代に比定されよう。

(島田 恵子)

第6表 H 5号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
34-1	甕	(16.7) - -	口縁部直立気味に立ち上がり、端部でゆるく外反する。	口辺部回転によるナデ 胴上～胴中央粗雑なヘラケズリ	全体に刷毛状工具によるナデ	褐色 回転実測
34-2	〃	(18.0) - -	口辺部「くの字」状に外反。	回転によるヨコナデ	回転によるヨコナデ	褐色 回転実測
34-3	〃	(14.0) - -	口辺部「くの字」状に外反。口辺部の径は短い。器厚うすい。	口辺部ナデ調整 胴部ヘラケズリ	ヨコナデ	褐色 回転実測
34-4	坏	13.0 5.4 7.0	直立気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。器厚は厚い。	口辺部ナデ 底部ヘラミガキの後ヘラケズリ	内面黒色研磨	暗褐色
34-5	須恵器 坏	(13.0) 4.2 (5.5)	内湾気味に開いて立ち上がる。底部糸きりの後、粗雑なヘラキリ。	ロクロ痕	ロクロナデ	灰色 回転実測
34-6	小形 坏	9.0 5.4 4.0	内湾して直立気味に立ち上がる。底部丸底で不安定。	ヘラケズリ	口辺部横位のヘラ痕と 輪積み痕 底部ナデ	黄褐色
34-7	高坏	- - (10.4)	柱状部は短く直立し、裾部で大きく外反する。	柱状部ヘラケズリ 裾部ヘラミガキ	内面黒色研磨	黄褐色 回転実測





第38図 H 6 号住居址実測図 (1 : 60)

## 6) H 6 号住居址

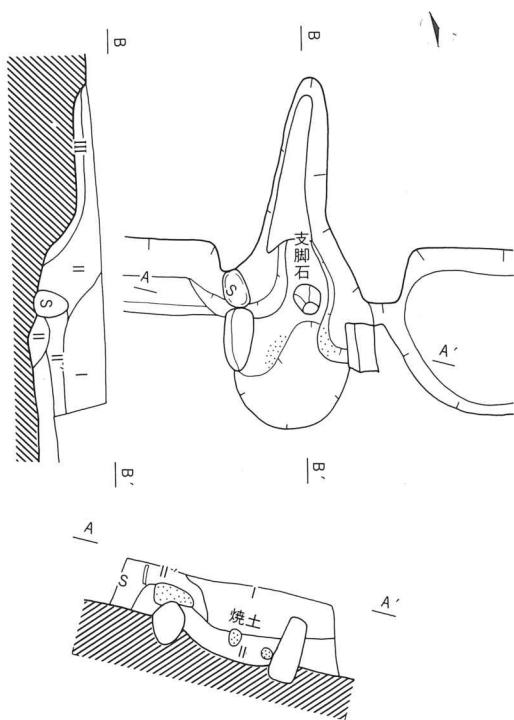
### 遺 構 (第38~40図)

本住居址は、H 5 号住居址を切って構築されている。そのため重複した部分のプラン確認はなかなか困難で、新旧の関係がはっきりしなかった。また、南側の区域外は完掘を断念した。平面プランは、東西 4 m を測り、南北は不明であるが東西との対比からして 4 m 前後を測る小形住居址で、形態は方形を呈すると推定される。カマドを中心とする主軸方位は、 $N-25^{\circ}-E$  を示す。

壁高は 20 cm を測り、壁はやや傾斜をもって立ち上る。覆土は黒褐色を呈する I 層に覆われた埋土であった。

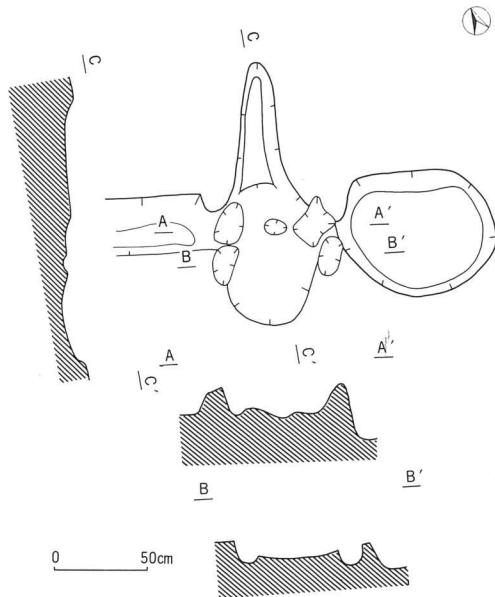
床面は、踏み固めた程度の固さで貼り床はなされていなかった。ピットは、北側壁際にあり、 $P_1$ 、 $P_2$  共に径 24 cm を測る。深さは  $P_1$  が 30 cm、 $P_2$  が 16 cm を測りやや浅くなる。カマド右脇には、 $90\text{cm} \times 66\text{cm}$ 、深さ 15 cm を測る貯蔵用のピットが存在している。ここには、中形甕と壺が 2 個体置かれてあった。壺の 1 個は伏せた状態で出土した。中形甕、壺の中からは黒く炭化した食料が残っていた。この貯蔵穴はカマドの脇にあって、こうした什器類を保管しておく用途の土壌であったことが理解できる。

カマドは、北壁の中央からやや西寄りに位置している。壁外に幅 25 ~ 15 cm、現存の深さ 10 cm を測る細い煙道が掘りこまれており、両袖には 2 個の石が配されて粘土で包みこむように固め



- I層 (黒褐色土) ローム、炭化粒子微量混入
- II層 (赤褐色土) 焼土多量混入、焼けこみ (炭化粒子少量混入)
- II'層 (黒褐色土) 焼土、炭化粒子微量混入
- III層 (黄褐色土) ローム多量、焼けこみ

第39図 H6号住居址カマド実測図No.1 (1:30)



第40図 H6号住居址カマド実測図No.2 (1:40)

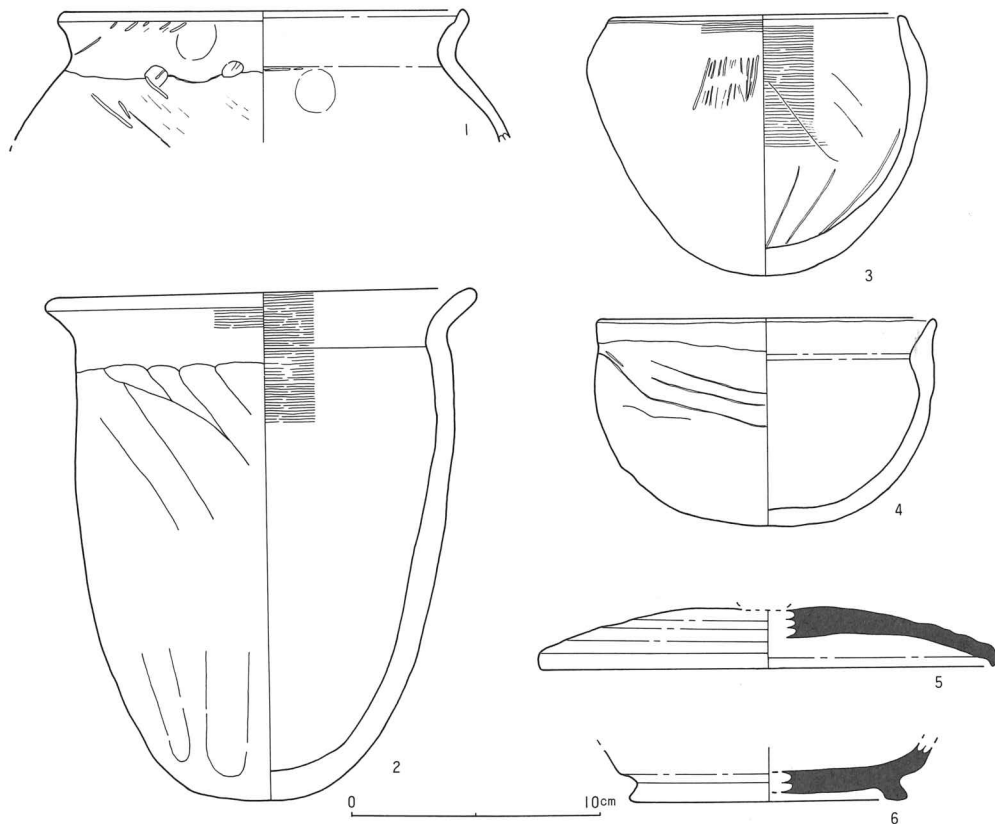
られて袖部を作っている。火床はやや凹んで焼土が付着していた。支脚石は高さ14cm、幅10cmを測る安山岩が埋めこまれた状態で残っていた。

カマドのNo.2図は袖石、支脚石を除去したあとの図面である。両袖の石は、地山をわずか掘りくぼめただけで石を配して粘土で包みこんで袖部をつくっていることがはっきり確認できた。支脚石の位置から本住居址のカマドもH4号住居址と同様、小形住居址であるためか壁際ギリギリのところに設置されている。

### 遺物 (第41図)

本住居址出土の土器は、土師器甕の大形・中形・埴形土器、須恵器蓋、須恵器高台部片を図示した。この他破片は、土師器坏口縁部2点、その他破片20点、須恵器壺胴部片3点を数えるのみで少ない。

1は、甕口辺部片である。口辺部短かく、胴上部が張る。球形状にふくらむとおもわれる。口辺部は内外面共にナデが施される。指おさえの痕跡が残っている。外面は、へらによるナデが施された後、ところどころに粗雑な沈線状のへらの痕が残っており全体に調整は粗雑である。2、3、4は、カマド右脇の土壌内から出土した。2、3は正位で、4は伏せた状態にあり丸底の



第41図 H6号住居址出土土器実測図(1:3)

第7表 H6号住居址出土土器一覽表

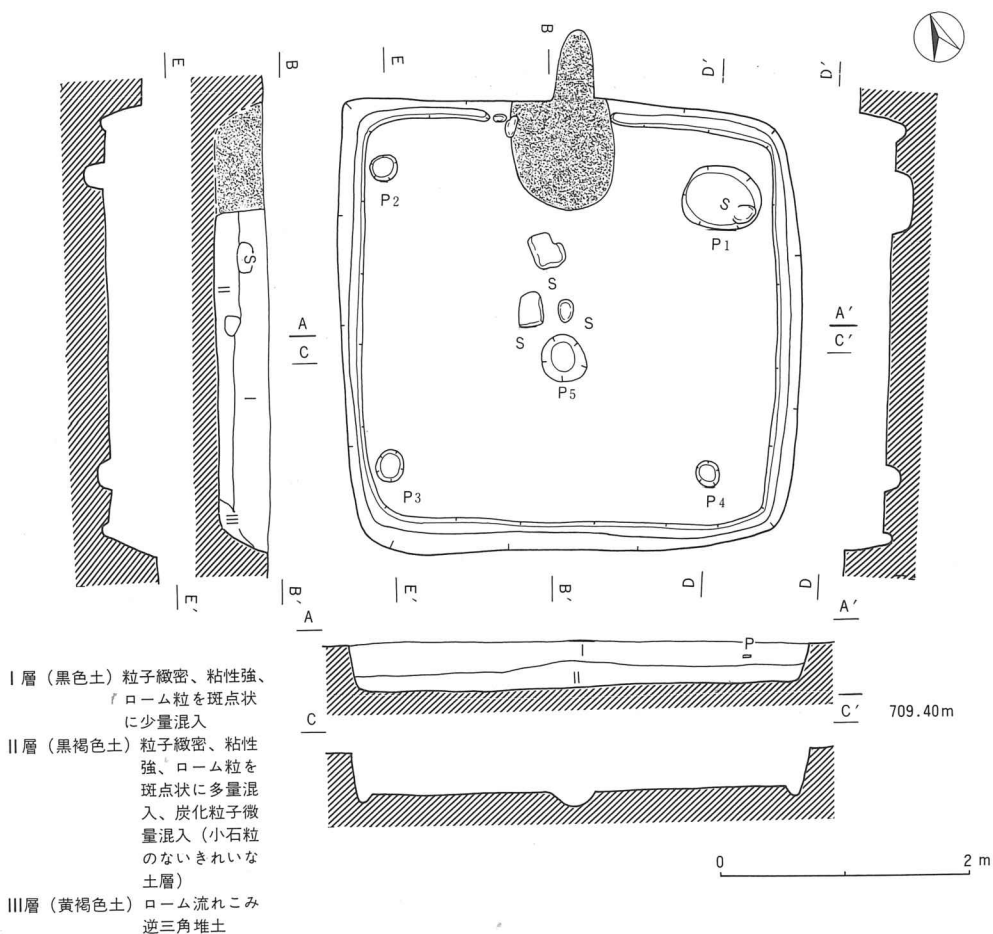
挿 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整 ( 外 面 )	調 整 ( 内 面 )	備 考
41-1	甕	(16.5) - -	口縁端部に稜を有し、口辺部は「くの字」状に外反する。	口辺部ナデ ヘラケズリ 指おさえ	口辺部ナデ	褐色土。長石・金雲母微量混。回転実測
41-2	中形甕	17.2 20.0 5.5	口辺部直線的に開く。胴部は底部にかけてややすぼまるずんどう型である。	口辺部回転によるヨコナデ。胴上～底部まで粗雑なヘラケズリ	口辺～胴上部まで回転によるヨコナデ 下部はナデ	赤褐色。外面胴部煤付着
41-3	碗	11.8 10.4 4.0	口縁部内傾した碗形。丸底を呈す。	口縁部回転によるヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部～胴上まで回転によるヨコナデ 胴下ヘラケズリ	赤褐色。加熱され摩滅している
41-4	碗	13.5 8.3 6.0	口辺部直立気味であるが、ゆるく外反し丸底を呈す。	口縁部ロクロナデ 胴部ヘラケズリ 摩滅している。	内面口縁部は「くの字」状を呈す。 ナデ	赤褐色。 加熱
41-5	須恵器蓋	- (2.3) (18.2)	口縁端部は直立する。	ロクロ痕	ロクロ痕	赤褐色。 回転実測
41-6	須恵器高台付坏	- - (11.0)	台部大きく開き底径広い。底部回転ヘラケズリ。	ロクロ痕	ロクロ痕	青灰色。 回転実測

底部の一部が欠損していた。2は、口辺部が直線的に開き最大径を有す。回転によるナデが施された後、ヘラケズリ、ヘラナデが施されている。外面胴部には煤が付着している。3は、無頸壺ともいうべき器種であるが、ここでは壺とした。熱を受けて摩滅しているためザラついているが内外面共に口辺部は回転によるヨコナデが施されている。胴部には一部沈線状のヘラケズリがみえる。4は、口辺部内面にはっきりした頸部があり、外面はわずかな頸部が認められる。前述したが、2・3・4は共に煮炊きに使用された甕および壺である。3、4の小形な器まで煮炊きに使用されていたことが今回の調査で確認できた。

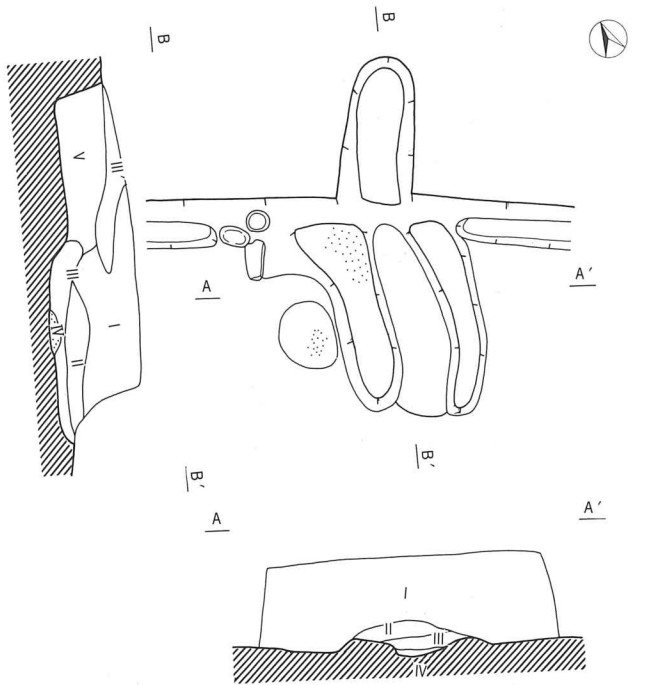
5、6は須恵器で、5は、口辺端部が断面三角形を呈する蓋である。器厚があつくかなり大形であるが摘み部分から欠損している。6は、高台部片であるが、住居内より同個体の湾曲する同部片が出土していることから、小形の壺であるとおもわれる。底部は回転ヘラケズリが施されている。

本住居址は、以上の出土遺物から奈良時代初頭に比定されよう。

(島田 恵子)

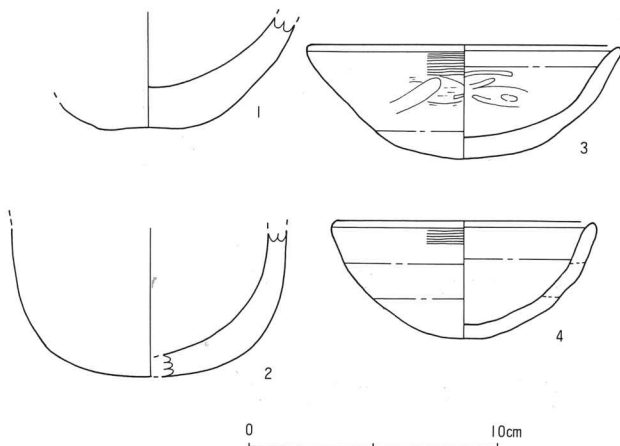


第42図 H 7号住居址実測図 (1 : 60)



- I層 (黒褐色土) ローム、焼土、炭化粒子微量混入
- II層 (褐色土) ローム、焼土、炭化粒子微量混入
- III層 (赤褐色土) 焼土、炭化粒子、ローム混入
- III'層 (赤褐色土) 煙道覆土
- IV層 (赤色土) 焼土
- V層 (黄褐色土) 焼土微量、ローム多量 (固い層)

第43図 H 7号住居址カマド実測図 (1:30)



第44図 H 7号住居址出土土器実測図 (1:3)

## 7) H 7号住居址

### 遺構 (第42~43図)

本住居址の平面プランは、東西370cm、南北350cmを測り、東西に僅かに長い方形を呈する。主軸方位は、 $N-20^{\circ}-E$ を示す。

覆土は、3層より形成され、I層は、黒色を呈し、粒子は緻密にして、粘性強く、ローム粒子を斑点状に多量に混入している。II層は、黒褐色を呈し、炭化粒子を含む。III層は逆三角堆土である。

床は、前面堅緻な貼床であり、周囲には、幅6~10cm、深さ8cmを測る周溝が巡らされていた。

ピットは5個検出された。P<sub>1</sub>は、北東隅に検出され、東西64cm、南北に54cm、深さ14cmを測る。P<sub>2</sub>は、北西隅に検出され、径22cm、深さ14cm、P<sub>3</sub>は、西南隅に検出され、径24cm、深さ18cmを測る。

P<sub>4</sub>は東南隅に検出され、径22cm、深さ14cmを測り、P<sub>5</sub>は住居址中央やや南寄りに検出され、40×34cm、深さは12cmを測る。

P<sub>1</sub>は、貯蔵穴を兼ねた柱穴とおもわれる。その他P<sub>2</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴であろう。P<sub>5</sub>は、全体を支える支柱穴かとおもわれる。

カマドは、北壁中央に検出された。焚口から煙道までの長さは150cmを測る。焚口より煙道口まで、長さ70cm、

第8表 H7号住居址出土土器一覧表

挿 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整 （ 外 面 ）	調 整 （ 内 面 ）	備 考
44-1	甕	- - 4.0	底径短い。 器厚は厚い。	底部凹みあり不安定 摩滅著しい	ナデが施されている	黄褐色
44-2	埴	- - (5.0)	底部より直立気味に内湾する。 器厚は厚い。	ヘラナデ	刷毛状工具による調整	赤褐色 回転実測
44-3	坏	12.5 4.5 5.0	丸底を呈し、口辺部はやや内湾 しながら直線的に開いて立ち上 がる。	口辺部回転によるヨコ ナデ 底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面赤褐色 外面褐色で黒 斑ある。
44-4	坏	10.5 4.6 4.0	丸底を呈し、口辺部は内湾しな がら立ち上がる。	口辺部回転によるヨコ ナデ 底部粗雑なヘラケズリ	指による回転ヨコナデ 指紋かすかに残る	黒褐色

幅30cmの火床を持ち、東側に幅15cm、長さ95cm、西側は幅22cm、長さ約60cmを測る、両袖が残存していた。左側の袖には焼土が付着している。壁外には、幅30cm、長さ53cmを測る煙道が検出された。また、袖の中には石を組んで粘土で固めた痕跡は認められなかったが、左の袖が曲がっており、袖の外側に25×23cm、深さ5cmを測る穴が認められ、焼土が散布していた。あるいはこの部分に石を埋めこんで補強していたことも考えられる。火床に支脚石の痕は認められなかった。本住居址のカマドは、煙道中央から直線にして40cm、カマド本体が曲っている。また、カマド左脇の床に8～15cm大の玄武岩が検出された。カマド上部に使用されていたものかとおもわれる。

#### 遺物（第44図）

本址の遺物出土は少なく、図示できたものは4点であった。その他破片は器厚の厚い甕細片が大半を占める。

1は、底径短かく、器厚の厚い甕底部である。底面がやや凹んでいる。2は、赤褐色を呈した埴形土器の底部であるとおもわれる。3、4は底径の丸い小形坏で、口辺部は回転によるヨコナデが施されている。3は、内外面共に弱いヘラミガキが施されている。内面は比較的丁寧に、外面は大胆である。4も内面は丁寧なナデ調整が施されているが、外面底部は粗雑なヘラナデとヘラケズリが見られる。

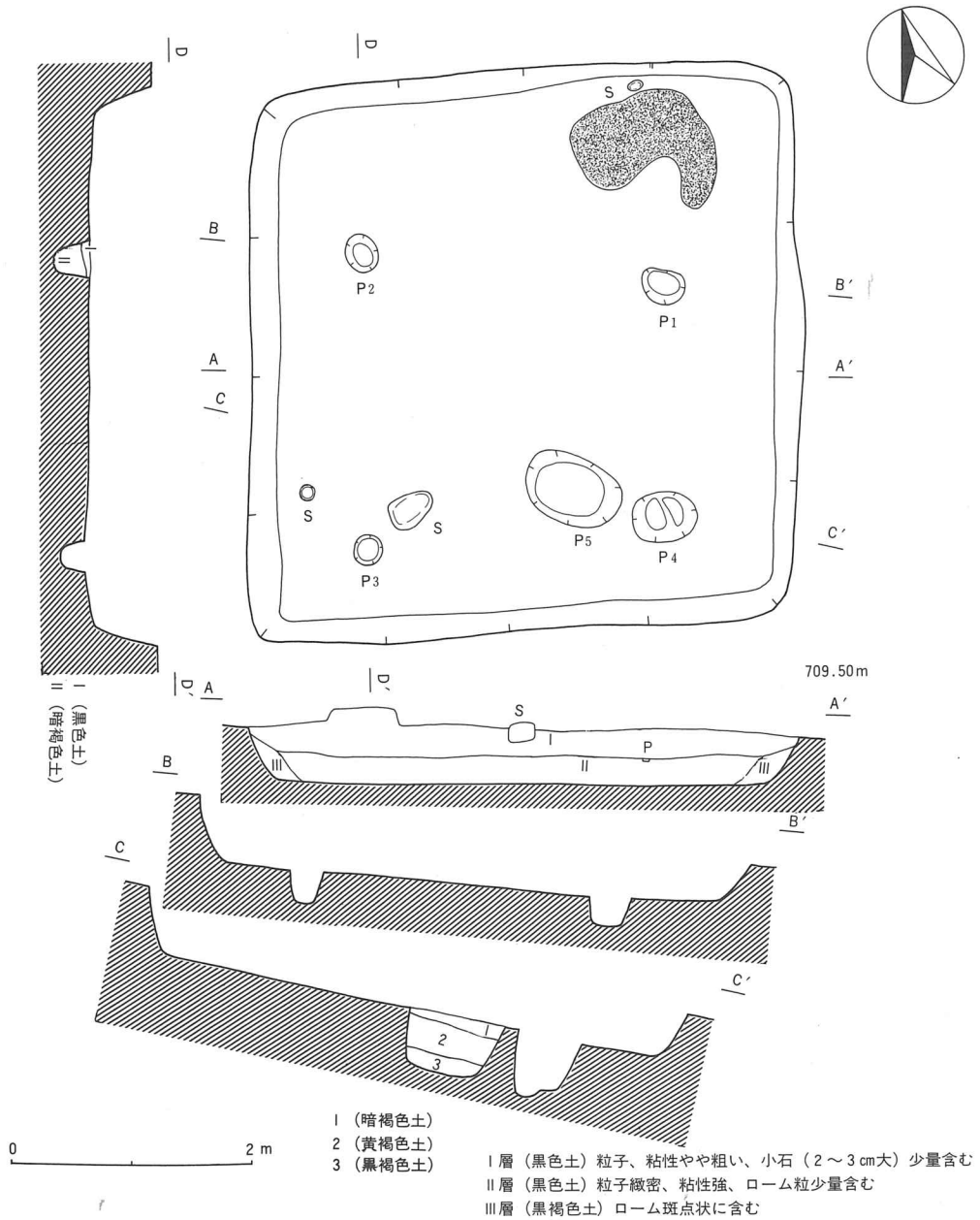
本住居址の所産期は、奈良時代初頭に比定されよう。

（三石 延雄）

#### 8) H8号住居址

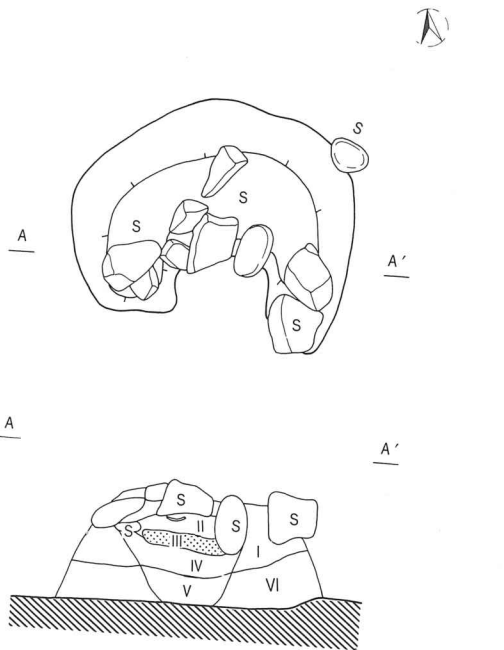
##### 遺構（第45・46図）

本住居址は耕作土を削平した時点より大量の土器片が浮いた状態で出土したが、周辺全体が黒色土であったためプラン確認はなかなか困難であった。耕作土を10cmずつ掘り下げてようや



第45図 H 8号住居址実測図 (1:60)

く20cmの時点で東壁の一部が確認されたので、それを頼りにプラン確認に入った。しかし、西壁は上面からの確認は出来ず、床面から追って壁を確認した。このプラン確認時にも多量の土



- I層 (褐色土) ロームを粘土のように固めた層
- II層 (赤褐色土) 焼土、炭化粒子少量含む
- III層 (赤色土) 焼土のかたまり
- IV層 (赤褐色土) 焼土、炭化粒子、ローム粒含む
- V層 (黒褐色土)
- VI層 (暗褐色土) 粗い層

第46図 H 8号住居址カマド実測図 (1:30)

54×40cm、深さは52cmを測るが東側に三日月形のテラスを有している。テラスの深さは40cmを測る。支柱をささえた支柱穴の跡であるとおもわれる。P<sub>5</sub>は80×55cm、深さ60cmを測り、底面には甕の破片が敷いたような状態にあった。壁は垂直に立ち上り、固く叩き締めた様相を呈していた。貯蔵穴であったとおもわれる。

カマドは、北壁中央にあるものと当初よりその部分を残して掘り下げを開始し、トレンチを入れたが空振りであった。しかし、プラン確認時点より、北東コーナー寄りに石や土器が集まっている部分があり、焼土の堆積も認められたので、その部分にトレンチを入れて断面観察を行なった。焼土は床面より20cmの高さのところ6cmの厚さで堆積している。焼土の右脇には、高さ23cm、幅12cmを測る卵形をした安山岩が立てられたような状態にあった。その周辺には玄武岩、礫岩等の角礫が散乱し、高台付坏が混入していた。

このような状況の中、カマドの存在が伴然としない。前述したように、本住居址のプラン確認時より、灰釉陶器、高台付坏片等国分期に比定される土器片が多量に出土しており、床面に

器片が出土した。灰釉陶器・須恵器・高台付坏等の平安時代の遺物が目立った。

平面プランは、東西455cm、南北460cmを測り、正方形に近い形態を示している。主軸方位は、N-16°-Eを示す。

壁高は、40~56cmを測り、壁は急傾斜をもって立ち上る。覆土は、黒色を基調とした3層によって形成されている。I層は粒子、粘性共にやや粗く、2cm~3cm大の小石を少量含む。II層はやや粘性が強くなる。III層は黒褐色を呈し、ロームを斑点状に混入した土層である。

床面は、平坦であるが叩き締めた堅緻な様相は認められなかった。東側の壁中には砂礫層が浮き出ており、住居址床面も小石が多い。

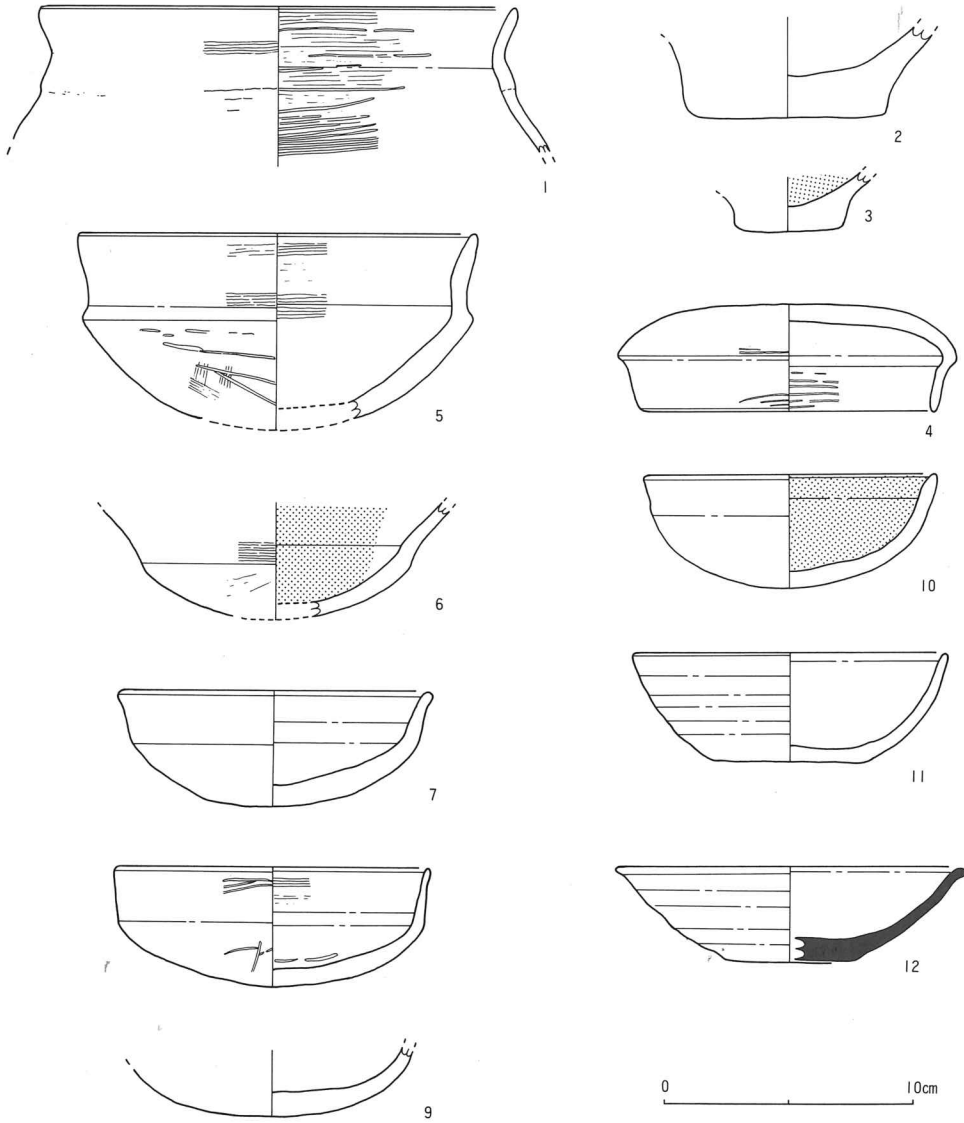
柱穴は4個検出された。北側の2個は住居址の内側に位置している。P<sub>1</sub>は28×35cm、深さ25cmを測り、不整な楕円形を呈す。P<sub>2</sub>は25cm×35cm、深さ28cm、P<sub>3</sub>は径24cmの円形で深さは20cmを測る。P<sub>4</sub>は



おいては真間期に比定される土器が出土している。重複している様相も認められていない。焼土が20cmの高さにあつては、床貼りの住居址かとも考えられるが、カマド構築のあり方と合せて今後の問題を残す遺構である。

遺物 (第47・48図)

H 8号住居址は、プラン確認時から上部より多量の土器片が出土し、土器捨場とおもわれる



第47図 H 8号住居址出土土器実測図 (1 : 3)

第9表 H8号住居址出土土器一覧表

挿 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整 （ 外 面 ）	調 整 （ 内 面 ）	備 考
47- 1	甕	(19.2) - -	口辺部「くの字」状に外反する。 器厚うすい。	口辺部刷毛状工具によるナデの後ヘラケズリ	刷毛状工具によるナデ	褐色
47- 2	甕 底部	- - 8.0	器厚の厚い甕底部。	調整粗雑で肌がデコボコしている	ヘラケズリ	茶褐色
47- 3	〃	- - 4.4	底径の短い甕底部。	ナデ 指によるナデのあと残る	内面黒色	茶褐色
47- 4	蓋	10.0 4.3 11.8	天井部やや湾曲したきれいな曲線を呈し、口辺部との境に強い稜を有す。口辺部やや内傾気味	ナデの後弱いヘラミガキ	ナデの後弱いヘラミガキ	赤褐色
47- 5	埴	(16.0) (7.8) (8.0)	口辺部やや外傾気味に直立し、安定した丸底を呈す。 稜は強い。	口辺部弱いヨコナデ 底部ヘラケズリ	回転による弱いヨコナデ	茶褐色 回転実測
47- 6	埴	- - (6.0)	口辺部外傾して大きく開く。底部は丸底を呈す。 稜は弱い。	口辺部回転によるヨコナデ 底部ヘラケズリ	回転によるヨコナデの後ヘラミガキ。内面一部黒色でない部分ある	赤褐色 回転実測
47- 7	坏	12.6 4.6 6.0	口辺部弱く外反する。丸底を呈す。 稜は弱い。	口辺部弱いヘラミガキ 底部ヘラケズリ	全体に弱いヘラミガキが施されている	赤褐色 回転実測
47- 8	坏	12.6 4.7 6.0	口辺部直立し、丸底を呈す。 稜はやや強い。	全体に弱いヘラミガキが施されている	全体に弱いヘラミガキが施されている	赤褐色
47- 9	坏	- - 7.0	丸底を呈す。	全体に弱いヘラミガキが施されている	ナデ 一部黒斑ある	赤褐色
47-10	坏	11.7 4.5 6.0	口辺部弱く外反、丸底を呈す。	摩滅著しい	内面まだらに黒色 研磨	褐色
47-11	須恵器 坏	(12.5) (4.3) (6.0)	口辺部は底部より内湾気味に立ち上がる。 底部はヘラケズリの平底。	ロクロ痕	内面まだらに黒色 研磨	茶褐色 須恵器の生焼け。 回転実測
47-12	須恵器 坏	(14.0) 3.8 (5.2)	口辺部は底部より大きく開いて立ち上がる。	ロクロ痕 底部糸きり後ヘラケズリ	ロクロナデ	青灰色 回転実測

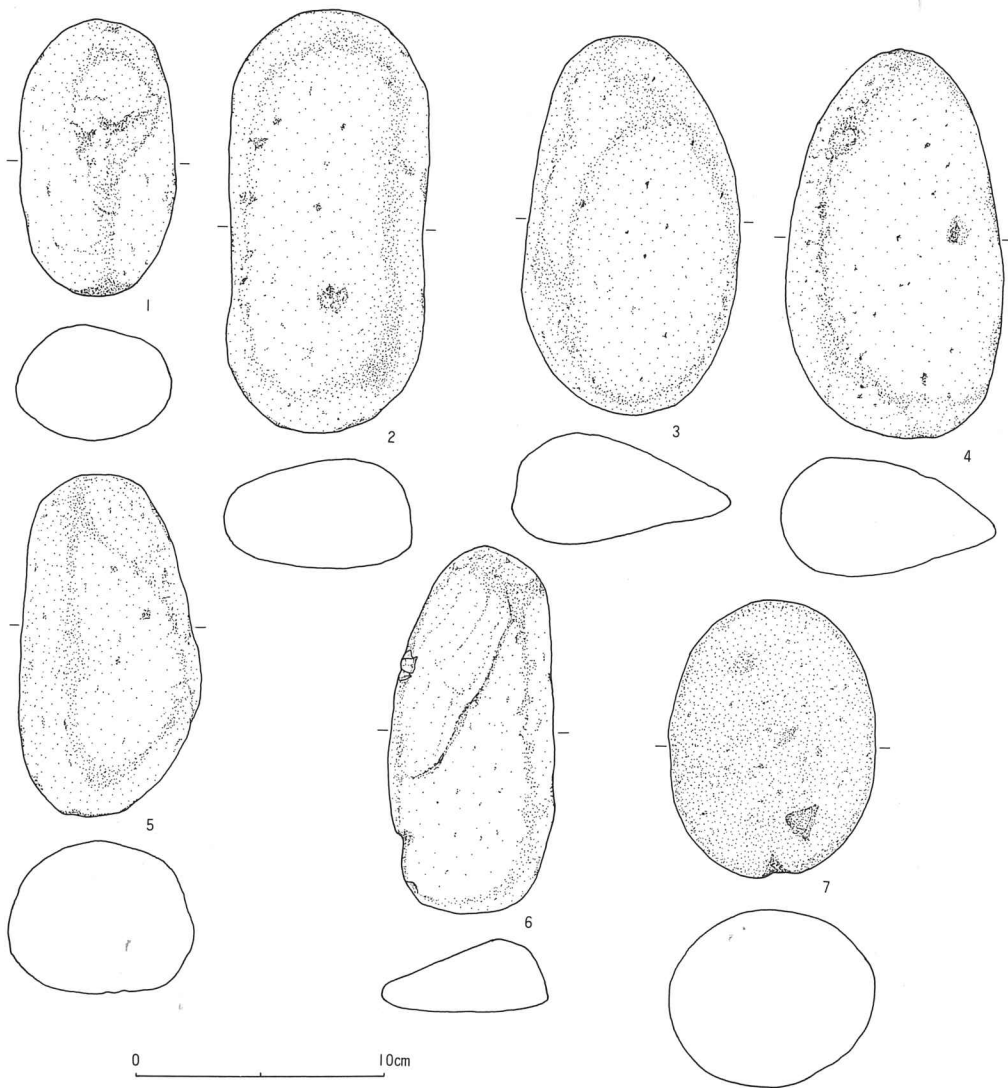
状態であった。上部からの出土量は段ボールに一箱あり、他の住居址出土の量を一括したと同じ量であった。図示したものは、H8号住居址に共なる床面直上、覆土下部から出土したものを取りあつかった。

1は、甕の口辺部片である。くの字状に外反し、胴上部に最大径がある。口辺部刷毛状工具によるナデが施されている。2、3は甕底部である。共に器厚は厚い。3は底径が短い。4は蓋である。須恵器の模造品であるとおもわれる。器厚はうすく、かなり丁寧につくられている。ナデの後、弱いヘラミガキが施されている。5、6は埴である。丸底を呈し、口辺部と底部の境に強い稜を有する。6は内面黒色を呈す。7～9は坏で、口辺部が直立気味に立ち上り、底径の広い丸底を呈す。弱いヘラミガキが施されている。

10は内面黒色を呈し、丸底でやや小形となる。11は、ヘラケズリの平底である。

12は須恵器坏で、口辺部の器厚は薄い。底径は短く、糸切りののち部分的にヘラケズリがみられる。

第48図は出土した石器を図示した。1～6は本住居址の覆土上部の土器と混入して出土したものである。1・3・4・5は安山岩で、八ヶ岳系の石であり千曲川から運んできたものである。1を除くと、楕円形を呈して大きさもそろっている。全体にツルツルしており擦られている。



第48図 H 8号住居址出土石器実測図（1：3）

る。2・6は砂岩である。蓆編みの重しとは異った用途に使った石であるとおもわれる。

7は、輝石安山岩で卵を大きくした形の整った石器である。下端に割れが見受けられるが使用痕はない。表面中央がわずか擦られている。

H2号住居址のカマドに支脚石として使用されていた石に形、大きさ等類似するものも見受けられる。安山岩は熱をうけてもほとんど変色していないことから、あるいは支脚石を抜いて、土器溜りの中に放棄した。又は支脚石用に河原から拾い集めておいたものであったことも想定される。本住居址の所産期は古墳末期～奈良時代の過渡期における住居址であるとおもわれる。

(佐藤 敏・島田 恵子)

## 9) 耕作土出土遺物 (第49～51図)

プラン確認時における耕作土中より出土した遺物を第49図に示した。これ等の土器はほとんど第2地点のH1号住居址～H8号住居址周辺から出土した。

1は、須恵器壺の胴下～底部片である。胴上～口縁部が見あたらないので長頸を有するの短頸壺になるか不明である。2は、灰釉陶器の高台部片である。淡緑色の釉が台部上から、内側は底面から施釉されている。東濃系であるのご教示を得ている。3は、土師器高台付坏の台部で弱いミガキが全面にみられるがへらの痕跡はみられない。台部は比較的細いが高い。

4は、赤褐色を呈した坏である。偏平な丸底を呈し、口辺部に弱い稜をもつ。

5は、台付甕の台部と甕との接合部片である。台は裾にかけて大きく開くが、台底部先端を欠損する。甕胴下部も大きくふくらむ。

6は、内面黒色の高台付坏で器厚が厚く安定感のある台部を呈している。十文字の暗文が施されている。

7は、内面黒色の土師器坏である。底部の糸切りは静止糸切りが施されている。

8・9は須恵器である。8は、高台付坏で口辺部を欠失する。糸切り底部ののち台部が貼り付けられている。9は、底部に回転糸切りがみられる。

10、11は須恵器蓋である。10は、少量であるが器面に灰釉が降りかかっている状態の小片である。

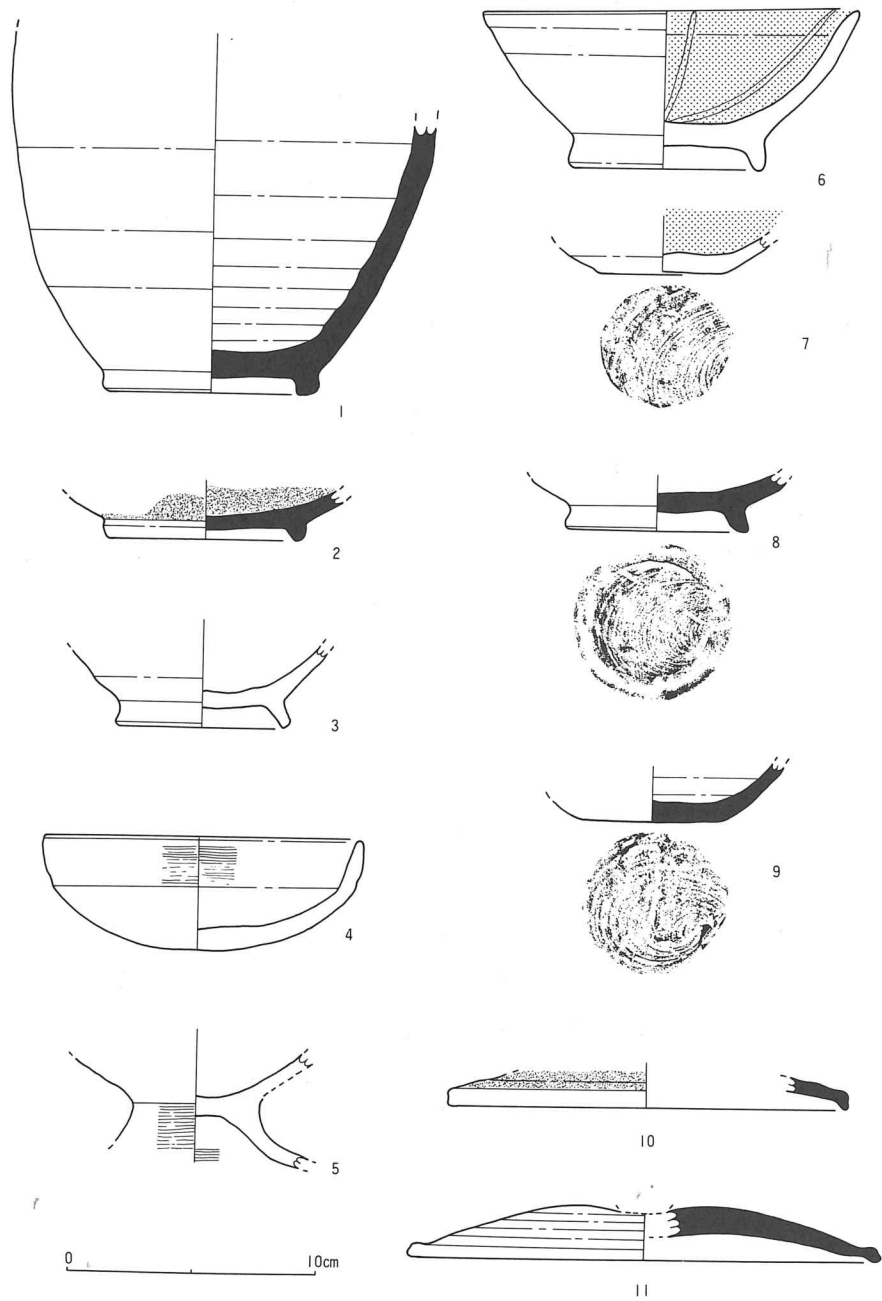
11は、口辺部は19cmを測り、かなり大きい。口辺端部はやや外傾する。

(島田 恵子)

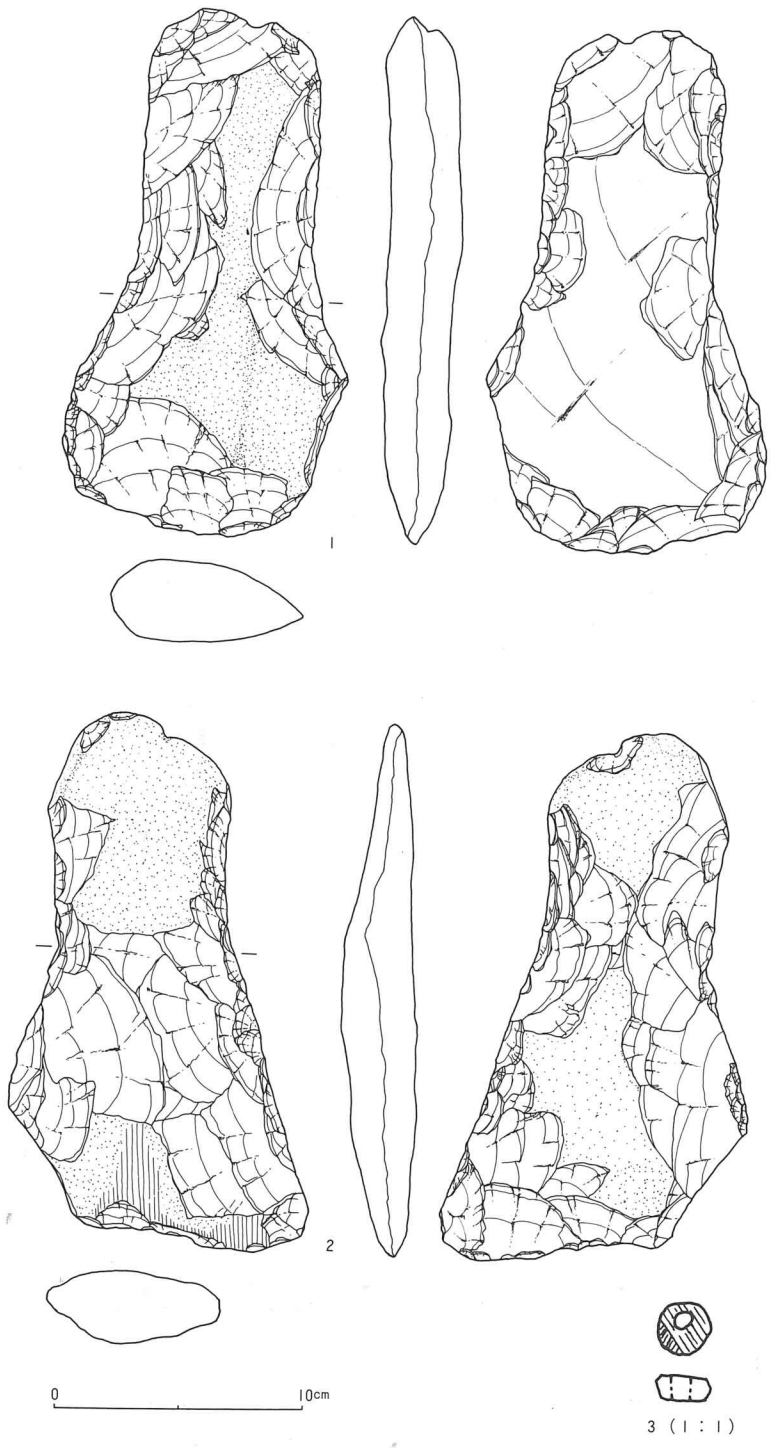
第50図は、H8号住居址及び耕作土より出土した大形打製石斧を図示した。

1は、荒船玄武岩製で器長21.2cm、最大幅11cm、最大厚2.9cmの完形品で、H8住より出土。

2も、荒船玄武岩製の器長21.4cm、最大幅11cm、最大厚2.9cmを計るが、刃部を少し欠損している。床面の刃部には、作業により擦れた部位が認められる。耕作土より出土した。



第49図 構作土出土土器実測図



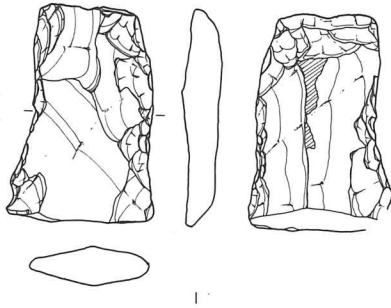
第50图 H 8号住居址・構作土出土大形打製石斧・白玉実測図(1:3)

第10表 耕作土出土石器一覧表

挿図 番号	器種	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
49-1	須恵器 壺	- - 8.6	底部より内湾し、胴部において直立気味に立ち上る	ロクロ痕	ロクロ痕	青灰色
49-2	灰釉 高台付 坏	- - 8.2	底部より大きく開く。 高台貼付	施釉は台部上より施される	底面より施釉されている	淡緑色
49-3	土師 高台付 坏	- - 7.0	底部より湾曲気味に開く。 高台貼付 器厚うすい	台部ロクロナデ	弱いミガキ	赤褐色
49-4	〃 坏	12.8 4.5 6.0	口辺部は直立気味に立ち上り、弱い稜を有す。底部は偏平な丸底である。	口辺部回転によるロクロヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部回転によるヨコナデ 底面ヨコナデ	赤褐色
49-5	〃 台付甕	- - -	台部と甕との接合部の破片である。	柱状部回転によるヨコナデ	ナデが施されている	褐色土
49-6	〃 高台付 坏	15.0 6.2 7.8	口縁部内湾して立ち上がる。 端部尖り気味。	口辺部ロクロヨコナデ 摩滅している	口辺部ロクロヨコナデ 内面黒色 十字文の暗文	赤褐色
49-7	〃 坏	- - 5.0	底部糸切り		内面黒色研磨	黄褐色
49-8	須恵器 高台付 坏	- - 7.3	底部糸切りの後、台部貼り付け。	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色
49-9	須恵器 坏	- - 6.0	底部糸切り	ロクロナデ 指おさえ残る	ロクロ痕	灰色
49-10	須恵器 蓋	- - (16.0)	口辺端部断面三角形を呈す。 器厚うすい。	ロクロ痕 淡緑色の釉	ロクロ痕	白灰色。淡緑色の灰釉が降りかかっている。 回転実測
49-11	須恵器 蓋	- (2.2) (19.0)	口辺端部やや外傾する。 摘み部で凹む。	ロクロ痕	ロクロ痕	青灰色 回転実測

この2つの石器は、ともに礫面を多く残すが、これは素材（原石）を板状のものに求めたためと、大形であるということによる。整形剥離は大雑把に行なわれているために無駄とも思われる剥離も少なくないし、荒い出来あがりになっている。しかし形状、形態的に規格性が強く感じられる。これは、この石器の用途に由来すると考えられ、それは農具として内職的に製作された感が強い。本石器が使用されたと思われる古墳時代最末期から奈良時代初頭にはようやく鉄の精練が始まったところで、住居址内から鉄鏝の出土がみられる。本遺跡のH7号住居址内からも1点出土している。しかし、鉄性の農具は一般庶民にはなかなか手に入りにくいものであったとおもわれる。

本遺跡の土層のような強粘土では固くて、木製農具では役に立たなかったとおもわれる。そこで、用途によっては、ある程度の重さと、強度をもった大形の石器が尚も作業の中心的な役割を果たしたと考えられる。たとえば、開墾作業などがそれかもしれない。



第51図 耕作土出土石器実測図

出土している。2点は土器の把手である。もう1点は2つの孔がある口縁部付近の破片である。把手から判断して、堀之内式期であるとおもわれる。

出土した小形打製石斧は、これ等の土器と供伴する縄文時代後期の所産と考えられる。

(吉沢 靖)

3は滑石を素材とした白玉である。Y  
2号住居址プラン確認の折耕作土より出  
土した。第51図は耕作土出土の小形打製  
石斧である。

着柄の部が残り刃部の先端を欠損して  
いる。荒船玄武岩を素材としており、着  
柄の両側面に細い剝利を施して、抉りをつ  
けている。裏面には着柄の際の擦痕が  
認められる。

写真図版25に示してあるが、本遺跡か  
らは縄文後期に比定される土器片が3点



## 第 5 章 考 察

白田町最大の面積を有す原遺跡の調査は、周辺に所在する古墳群と共に南佐久郡における古代史解明の鍵を握る実に意義ある調査となった。

検出遺構は、弥生時代後期後半の住居址 2 棟、同時代に比定される特殊遺構 1 棟、土壙 2 基古墳時代末期～奈良時代に比定される住居址 6 棟、平安時代 2 棟等であった。とりわけ、古墳時代末期～奈良時代における住居址の検出は南佐久郡下では初見である。

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、大型打製石斧、薦編みの重し石等である。

これ等の遺構、遺物について、歴史的背景を踏まえ、当時の生活復原を試みながら、本遺跡の考察を行いたい。

第 1 1 表 原遺跡検出遺構一覧表

( ) 内推定値

遺 構	平 面 プ ラ ン			主軸方位	壁 高	炉 カマド	時 代
	形 態	東 西	南 北				
Y 1 号	方 形	440 <sup>cm</sup>	480 <sup>cm</sup>	N - 7° - E	15~26 <sup>cm</sup>	—	弥生時代後期後半
Y 2 号	隅丸方形	(500)	(550)	————	18~34	—	弥生時代後期後半
T 1 号	隅丸方形	292	340	N - 6° - W	17~25	—	弥生時代後期後半
H 1 号	方 形	(400)	(450)	N - 14° - E	20~32	北	平安時代
H 2 号	方 形	460	490	N - 12° - E	40	北	古墳時代末～奈良時代
H 3 号	不整方形	450	500	S - 10° - w	37	南	平安時代
H 4 号	方 形	355	400	N - 33° - E	23~30	北	奈良時代
H 5 号	(不整方形)	(360)	(400)	————	30	東・北	奈良時代
H 6 号	方 形	(400)	---	N - 25° - E	20	北	奈良時代
H 7 号	方 形	370	350	N - 20° - E	27~40	北	奈良時代
H 8 号	正 方形	455	460	N - 16° - E	40~56	—	古墳時代末～奈良時代

## 1 遺 構

弥生時代後期後半の集落は、大奈良地区の住宅地から御幸神社付近まで広がっていることが今回の調査で明らかになった。Y 2号住居址が集落の南限になり、かなり大きな広がりであることが解る。佐久平に所在する弥生時代後期の大集落は、原遺跡ではほぼ終りそれより南は、小さな集落が点在するだけとなる。

今回は、弥生時代後期後半の住居址2棟が検出されたが、道路幅のみの調査であり再度の水道管敷設工事のため攪乱がはげしく、遺構のまとめは省略した。また、T 1号特殊(ベッド状)遺構が検出された。ベッド状遺構の詳細については、後述する。

次に古墳時代末期～奈良時代における住居址について簡単にまとめたい。

古墳時代末期～奈良時代における住居址は、H 2号住居址・H 8号住居址があげられる。この時期の住居址は、450～490cmを測る中形規模で深さも40～56cmを測り、しっかりした作りである。柱穴は4本規格的に配置されている。住居址も北に向けて建てられ、主軸方位は、N-12°・16°-Eを示している。

奈良時代に入ると住居址は小形化する。3.5m～4mを測り、深さは20～30cmと浅い。主軸方位も20°～30°東側に中心を向けて住居が建てられている。柱穴は4本配置するがかなり浅く柱が埋め込まれている。床面は貼り床で、周溝が巡る。H 5号住の周溝は20cmを測る深さで、あまり例のみられない深くてしっかりした溝が掘りこまれていた。

カマドは住居址に比例して小さく、火床は壁際に接近している。石をふんだんに使って袖部を作り、粘土で固めている。H 4号住居址は煙道が石組みされており、H 5号住居址は、奥壁にぴったり石を据えつけてカマドを構築している。また、支脚石が残っていたのは、H 6号住居址であった。古墳時代末期～奈良時代に比定されるH 2号住居址も、支脚には川原石を使用しており、土製の支脚は使用されていなかったようである。

また、H 5号住居址では煙道を作りかえ、それも調子が悪かったらしく、東壁中央に新たにカマドを構築している。最初作った煙道は煙出しの部分が距離的に遠かったらしく、短くするため新しく左脇に設けたが火床から左側に曲っているため不都合であったと考えられる。当初の煙道の天井部には、煤・焼土が付着しているが、作りかえた煙道には付着が全く見られなかったことからこうしたことが考えられよう。

平安時代に入ると住居は再び大きくなり、深くなる。住居址も北側に中心を向けて建てられるようになる。しかし、H 3号住居址のカマドは南壁中央に設けられ、左脇に灰を溜める施設があった。また、遺物は覆土上面から出土し、H 3号住居址ではほとんど床面直上から出土していない。住居址廃絶がどのような状態でおこなわれたか、今後の課題である。さらに、H 1号住居址からは、鉄滓、猿投窯の灰釉陶器短頸壺の蓋が出土しており注目される。

(島田 恵子)

## 2 弥生時代以降の所謂ベッド状遺構について

——長野県内分布状況——

はじめに

原遺跡では、T1号より所謂「ベッド状遺構」が検出されている。これを機に長野県内のベッド状遺構について、その現状を簡単にまとめておきたい。尚、県内のベッド状遺構の集成は、既に1981年「下小平<sup>(1)</sup>」の中で工藤かよ子氏がまとめておられるが、今回は更に付加資料や全国の検出状況にも若干触れ乍ら以下に述べてみたい。

ベッド状遺構規定概念として

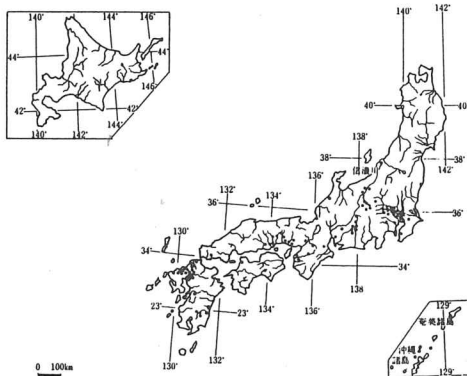
本文に移る前に、どのようなものを「ベッド状遺構」と呼ぶのか明らかにしておく必要があるろう。

現在のところ、ベッド状遺構の明確な規定は1969年河野真知郎氏が「初期農耕集落の解明－ベッド状遺構の再検討－」『CIRCUL-PACIFIC』Iの中で示されたもの一例だけである。河野氏は「ベッド状遺構とは竪穴住居址内の床面において一段高まった部分」を指し、その規模は「人が横たわる程度のもの」とし「それに満たないものを土壇状遺構として区別」している。

一方、田村晃一氏は1969年「我孫子中学校校庭遺跡」『我孫子古墳群』の中で、一段高まった部分を「ベッド状遺構」と呼び乍らも、一段高まること無く住居址壁周に沿って踏み固められない部分が認められる住居址に関しても、ベッド状遺構付設住居址とほぼ同等に扱っている。因って田村氏は「土間」と「寝所」といった内部構造の変化に重視し、ベッド状遺構に対して「むしろ普遍的な変化」との評価を下したわけである。

今日御活躍される研究者の声を拝聴すると、田村氏の見解と相通ずる方々が多いようである。

しかし、ここでは、意識的に床面の一部を高めたことに注目し、概ね河野氏の平面規模に準拠し、竪穴住居址床面に於いて明瞭な段を有し、幅50cm、長さ150cmを最低限度の大体の目安として、ベッド状遺構と呼ぶことにする。



ベッド状遺構分布図

No.	遺跡名
1	安源寺
2	三輪
3	平樂平
4	夕タラ堂
5	上直跡
6	藤巻
7	芝間
8	下小平
9	野馬窪
10	北西ノ久保
11	野火付
12	社軍神
13	宮瀬本村
14	三間沢川左岸
15	橋原
16	堂垣外
17	的場
18	月夜平
19	北原
20	清屋前
21	座光寺原
22	原

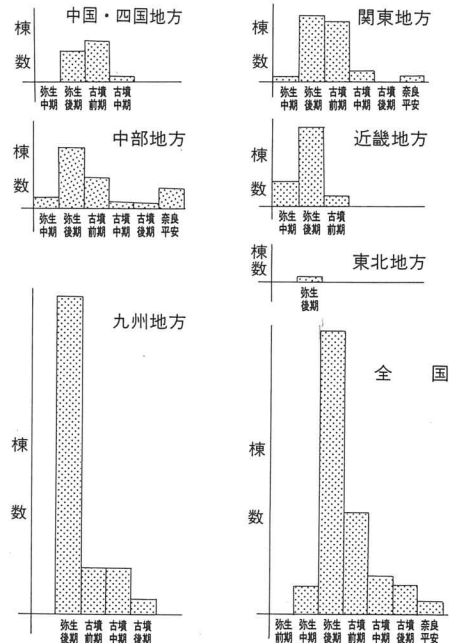


第52図 長野県ベッド状遺構分布図

(1 : 1,500,000)

1) 全国ベッド状遺構検出状況

全国のベッド状遺構総数は、筆者の見知し得る限りでも134遺跡、227遺構であり、実際はそれを上回ることになる。これらは南東北地方から、南九州地方にかけて分布しており、北東北・北海道・南西諸島には未だその存在は確認されていない。この分布状況をドットで表わしたものが、第1図である。これを観ると、南関東と北九州に濃く分布し、次いで中部高地と姫路平野付近にやや集中化の傾向が指摘できる。これらを地域別・時期別に観ようとしたものが第3図である。このグラフから、全国的には弥生時代中期に現れたベッド状遺構が、弥生時代後期に急増し、古墳時代以降衰退の一途をとれることが見て取れるわけだが、各

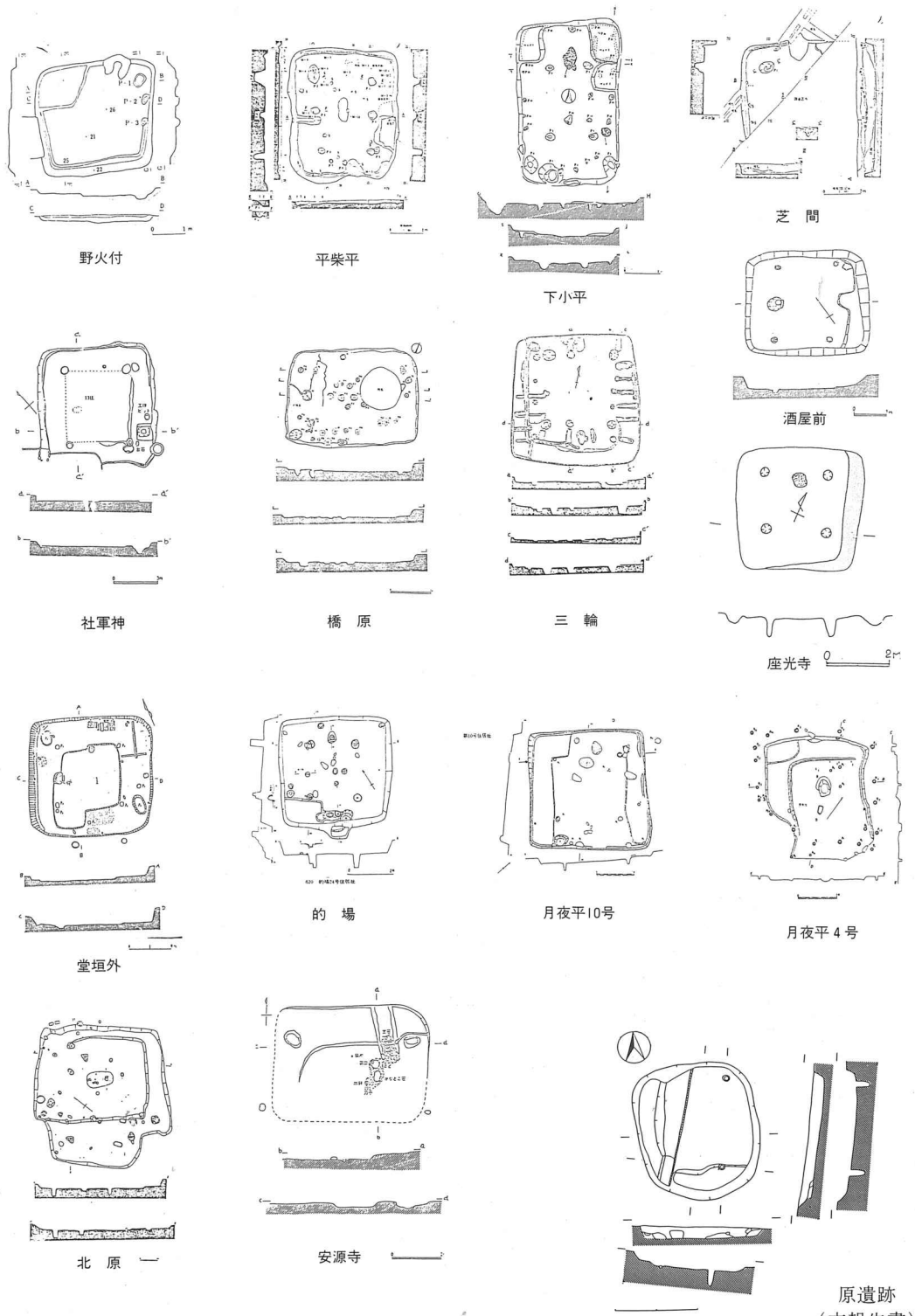


第53図 ベッド状遺構検出数傾向グラフ

第12表 長野県内既出ベッド状遺構一覧表

遺跡名	時期	所在地	文献	備考
野火付	平安 前葉	御代田町 野火付	「野火付」1985 御代田教育委員会	H12号住居址 土壇状遺構に近い
上直路	弥生 後期	佐久市 岩村田		
北西ノ久保	弥生 中期	佐久市 岩村田 北西ノ久保	「北西ノ久保」1987 佐久埋蔵文化財調査センター (2次調査)	Y74号住 (2次) 1棟 (1次)
下小平	弥生 後期	佐久市 岩村田 下小平	「下小平」1981 佐久市教育委員会	Y 2号住居址
蛇塚野馬窟	平安	佐久市 新子田		1 棟
腰巻	古墳 前期	佐久市 下平尾 腰巻	報告書刊行予定	3号住居址
芝間	古墳 後期	佐久市 岩村田 東芝間	「芝間」1986 佐久埋蔵文化財調査センター	1号住居址
社軍神	古墳 前期	小県郡 丸子町	「三角一三角遺跡群緊急発掘調査概報」1980 丸子町教育委員会	3号住居址 玉造工房
タタラ堂	弥生 後期	小県郡 東部町		
橋原	弥生 後期	岡谷市 川岸 橋原	「橋原遺跡」1981 岡谷市教育委員会、橋原遺跡調査会	34号住居址
宮渕本村	弥生 中期	松本市 宮渕 本村	「宮渕本村」(遺構編)II 1986 松本市教育委員会	
三間沢川左岸	平安	松本市 和田		
平柴平	弥生 中期	長野市 安茂里	「平柴平遺跡緊急発掘調査概報」1971 長野市教育委員会	Y4号住居址
三輪	古墳 後期	長野市 三輪	「三輪遺跡」1980 長野市教育委員会、長野市遺跡調査会	2号住居址
酒屋前	弥生 後期	飯田市 伊賀良 大瀬木	「昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一飯田市市内(その2) 1973	1号住居址
座光寺原	弥生 後期	飯田市 座光寺原	「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学誌』第4号、1967 今井善光	6号住居址
堂垣外	古墳 前期	伊那市 美馬笠原 堂垣外	「長野県伊那市美馬笠原堂垣外遺跡調査概報」『信濃』21-4、1969 桐原健、御子榮泰正	1号住居址
的場	弥生 後期	下伊那郡 松川町 元大島	「的場」1973 松川町教育委員会	
月夜平	弥生 後期	下伊那郡 高森町 市田	「月夜平一第一次調査報告書」1969 高森町教育委員会	4・9・10号住居
北原	弥生 中期	下伊那郡 高森町 市田	「北原遺跡」1972 高森町教育委員会	2号住居址
安源寺	平安 中期	中野市 安源寺	「安源寺II」1979 中野市教育委員会	3号住居址、鍛冶址

地に目を移すと、最盛期及び衰退の在り方がそれぞれ異なることが解かる。<sup>(3)</sup>



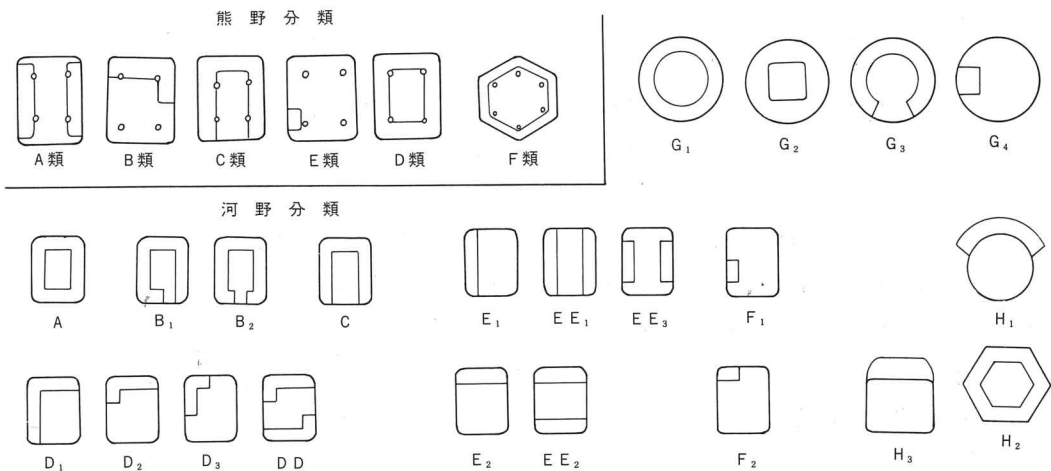
第54図 長野県内既出ベッド状遺構実測図

原遺跡  
(本報告書)

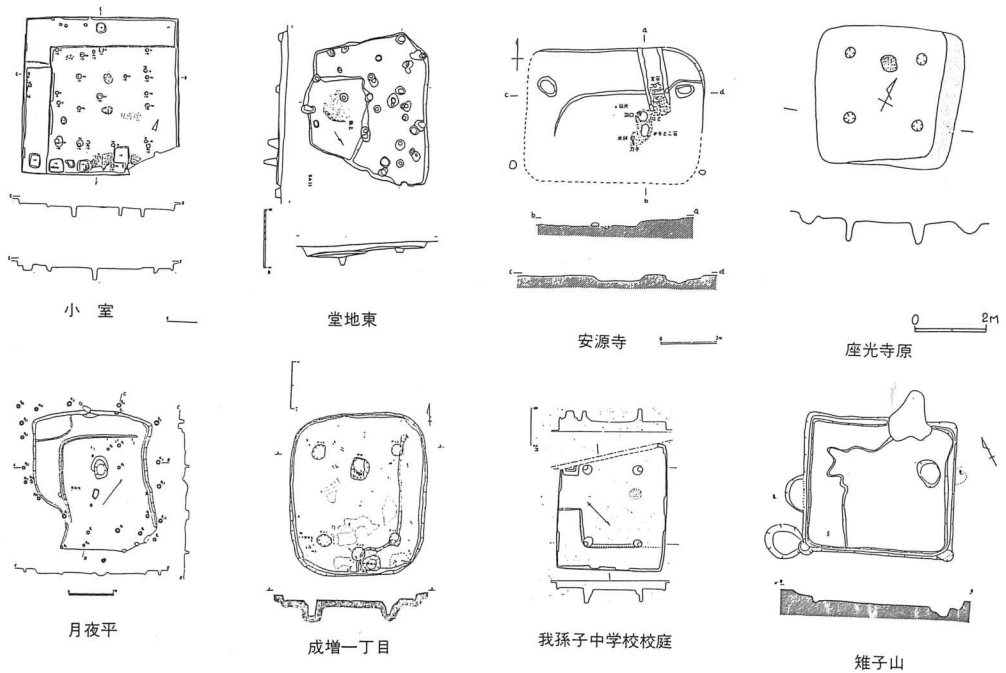
## 2) 長野県内ベッド状遺構の分布

長野県を包括する中部地方の在り方は、第3図を観ると弥生時代後期に急増し、古墳時代前期に半減し、中期以降激減している。これは全体を総括したグラフと似通っており、換言するならば平均的な在り方と言えよう。その中で長野県例は表1に提示した22遺跡、25遺構を知り得た。これらを時期別に観ると、弥生時代中期5棟、後期12棟、古墳時代前期3棟、中期0、後期2棟、平安時代4棟であり、やはり弥生時代後期例が圧倒的に多い。この2次限的分布を示したものが、第3図である。当然乍ら弥生時代遺跡の濃い分布域に集中し、天竜川、千曲川両流域に観られるが、千曲川流域の分布が濃く、佐久地方への集中傾向は留意しておきたい点である。

これらの平面形態は様々であり、全国的に観ても傾向は見出すことはできない。尚、平面形態については、熊野正也氏が「弥生時代集落構造の一考察—ベッド状遺構をもつ住居址を中心として—」『史館』2(1974)の中で6形態に、河野氏が「初期農耕集落の解明—ベッド状遺構の再検討—」(前出)の中で22形態に分類している(第5図参照)。原遺跡は「L」字形を呈し、河野分類D<sup>1</sup>類に属する。D<sup>1</sup>類は全国的にも珍しく、類例としては千葉県小室遺跡D-203号住居址、宮崎県堂地東遺跡S A11号住居址が挙げられるのみである。「L」字形態の中でも多いものは、熊野分類B類、河野分類D<sup>2</sup>類である。これらには長野県月夜平遺跡第4号住居址・座光寺原遺跡第6号住居址・安源寺遺跡H3号住居址、千葉県我孫子中学校校庭遺跡第2号住居址、埼玉県雉子山遺跡第1号住居址・屋田遺跡第5号住居址、東京都成増一丁目遺跡第30号住居址の7例が挙げられる。これらのうち、原遺跡と同様の弥生時代後期のものは、月夜平遺跡・座光寺原遺跡・雉子山遺跡・成増一丁目遺跡・堂地東遺跡の6遺跡であり、我孫子中学校校庭遺



第55図 ベッド状遺構の形態分類



第56図 原遺跡類例形態平面図

跡が古墳時代前期、小室遺跡が古墳時代後期、安源寺遺跡が平安時代のものである。

以上、長野県内のベッド状遺構について、極く簡単に列挙した。県内では千曲川流域に濃い分布が認められたが、もっと細かな時間軸の中で、関係地域の在り方を考え合わせるにより、ベッド状遺構が偶発的なものか、一連の文化の流れの中から痕跡として遺存するものなのか解かるのではないだろうか。これについては、稿を改めて述べるつもりだが、そして初めて最大の論点である、用途・機能へと考察の歩を進めることができると考えている。

#### 参考文献

- (1) 「下小平」1981 佐久市教育委員会
- (2) 「我孫子中学校校庭遺跡」1985 我孫子市教育委員会に再録されている。
- (3) 篠原浩江「弥生時代以降のベッド状遺構について——分布の概要——」『佐久考古通信』No.45 1988 佐久考古学会
- (4) 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』I 1971 房総考古資料刊行会
- (5) 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 1985 宮崎県教育委員会
- (6) 「雉子山遺跡」『東松山市史』資料編 第I巻 1981 東松山市教育委員会事務局
- (7) 『屋田・寺ノ台 関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (8) 『成増一丁目遺跡発掘調査報告』1981 成増一丁目遺跡調査会

#### 基本文献

- 河野真知郎「初期農耕集落の解明—ベッド状遺構の再検討—」『CIRCUL-PACIFIC』1 1969  
 熊野正也「弥生時代集落構造の—考察—ベッド状遺構をもつ集落を中心として」『史館』2 1974

### 3 お焦げ・煤の付着について

本遺跡の発掘調査で特に注目される遺物は、甕の中に食物の煮たものが炭化して残っていたことである。H2号住居址とH6号住居址の2住居址の計4個体の甕の中から発見された。

写真図版18、21に食物の残りを示してあるので参照されたい。第57図18-4の甕の中にあつた食物の煮残りは黒く炭化して、底面～胴下部の器面に付着していた。粉状のデンプン質を煮たものらしく、デンプン特有の光沢がある。18-3の小形甕の中には少量ではあるがやはり同様の食物が甕底面に付着していた。この2個体の甕は前述したようにカマド内より出土している。18-4は支脚石の上にかかったままの状態にあつた。18-3は、その横で右側にやや傾いた状態にあり、カマド上部に置いてあつたものが壁の崩落によりズリ落ちたとおもわれる。

18-1・19-9は煤とお焦げ痕が認められるが、これは以前に使用していたものであると考えられる。18-1は煮こぼれおよび煤の付着は著しいが、内面のお焦げは少量認められるだけである。19-9は、煤の付着、お焦げ痕は微量であるが、器面は熱を受けて摩滅が著しい。

41-2～4は、H6号住居址のカマド右脇の貯蔵穴内より出土した。41-2の中形甕は、18-4と同様底面～胴下4cm上部まで付着していた。底面は約2cmの厚さで炭化しており、ところどころに粒もみられるが、粉状のデンプン質の方が多量である。

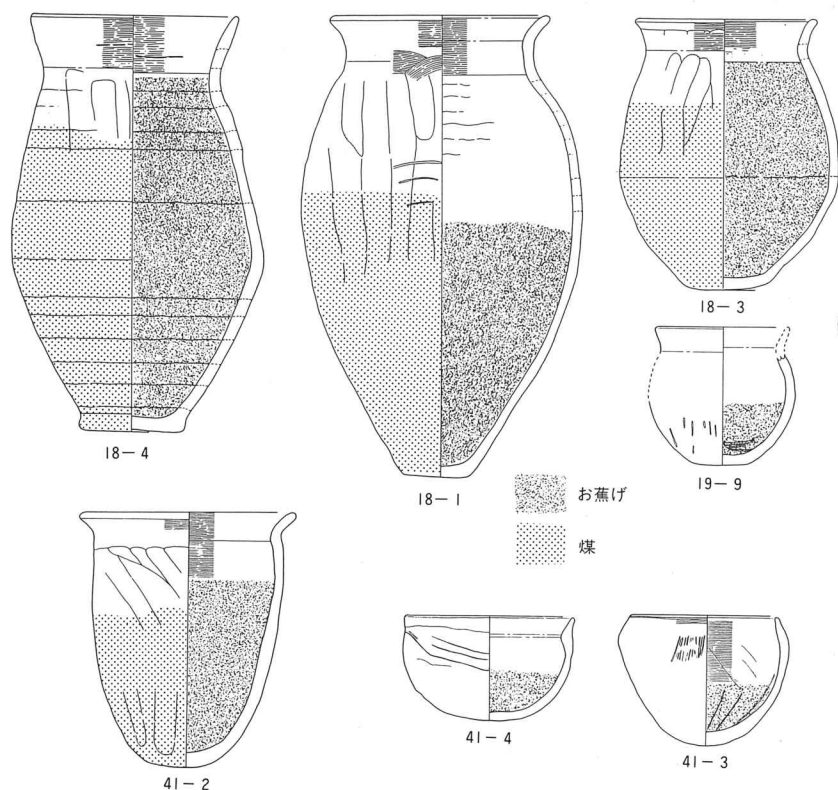
41-4は、底面に少量のお焦げが付着していたが、器面はかなり熱を受けており摩滅がひどく一部剥落していた。41-3もお焦げ痕と器面に熱を受けた状態が顕著である。

本調査でのお焦げ痕の発見により、古墳時代末期から奈良時代の煮炊について新しい発見をしたといわねばならない。従来、食料の煮炊きは甑を使用して蒸したと考えられていた。奈良時代初期にはその甑も消滅してしまっている。そのため、甑の消滅は竹製のセイロが普及したからではないかという想定もなされていた。<sup>(参考文献14)</sup>しかし、本遺跡における調査によってその一端が解明したのである。炭化した食物の材料についてはいずれ鑑定を依頼したいと考えている。

稲作は、生業の一部であつて、畑作が尚主流を占めていたことは南佐久地区においてはその地形的な面から考えられることである。灌漑施設の充実は乏しく、自然の湧水や湿地帯を利用した稲作が行なわれていたことは、南佐久郡下の山間地に急増する平安時代の小さな遺跡群において理解されている。遺跡は陽当りの良い湧水地付近に存在している。そしてその地は再び明治時代より人々が住み、わずかな土地を切り開き、湧水や沢水を利用して水田耕作を行っているのである。

律令体制によって庶民の生活は、租庸調による税金が課せられて苦しく、恐らく稲はそのほとんどを治めてしまったものとおもわれる。甕の中に残っていた食料は粉状のデンプン質のものを材料としていたことにもあらわれているように、畑作による穀類であると想定される。本遺跡より出土した大形の打製石斧はその剥離からこの時代に作られた可能性が高いことを前述してある。粘土質の固い土層は鉄器の普及の少なかった該期にあつては、石器に頼らざるをえ





第57図 お焦げ・煤附着の土器

なかったであろう。人々はこうした努力を重ねながら食料生産のために労働し、竪穴住居址の中で生活していたのである。

さらに、お焦げ痕、煤附着の甕については、ほとんどの報告書で観察がなされていないため他遺跡についての比較検討ができないが、ここでは一つの指摘としておきたい。それは、奈良時代初頭より出現しはじめた、器厚が薄く、口縁が「くの字」状を呈する土師器長胴甕は、煮沸に用いられていたかは、疑問である。甑の消滅と平行して出現する器種である。本遺跡から出土した第27図1の甕には、煤、お焦げの附着は全く認められない。その他、破片においても内外面ともにきれいであり、煮沸には使用されていない。小海町弥左衛門屋敷遺跡H1号住居址から出土した、同器種の甕も同様であった。セイロ等を使って蒸していたとして、甕には水を入れるだけであるから内面は汚れないとしても、カマドで毎日煮炊きしていたとすれば煤の附着と煮こぼれは当然生じているであろう。また、熱伝導の高率化は器厚の多少の差はあまり関係ないことも、筆者の煮沸実験によって得られている。むしろ厚い方が煮沸にはよい。さらに、本遺跡では煮炊きに埵形（第41図3・4）のような小形土器までも使用しているのである。

器厚のうすい土師器長胴甕は、煮沸とは違った別の用途があったと考えられる。

こうした点から、どのようにして土器が作られたのかという観察から、今後はさらに一步進めて、どのように作られて、どのように使われたかを追求していく報告書が増加することを願っている。土器は人間が使うために、人間によって作られているのであるから、時間軸と共に並行して考えたい問題である。

#### 4 薦編み重し石

H 5号住居址からは第35・36図に示した薦編みのために使用したと考えられる重し石が西北コーナー寄りに集石していた。第13表にこれ等の石の大きさを一覧表にまとめた。長さは、8.6~14.2cm、幅4.3~9.1cm、厚さ2.2~4.5cm、重さ220~620gを測る。使用した石は、雨川等付近産出のものが大半を占めている。

竪穴住居に生活していた当時の人々の暮しはどのようなものであったか、具体的な様相を知る手がかりに「万葉集」がある。

ひとり寝と薦朽ちめやも稜蓆緒になるまでに君をし待たむ

(一人で寝たとて薦が朽ちるといふことがありましようか。それほど蓆だのに、稜織の蓆が破れて緒になるまでだってあなたをお待ちしましよう。)

刈薦のひと重を敷きてさ寝れども君とし寝れば寒けくもなし

(刈薦のたった一枚を敷いて寝ていても、あなたと寝ていると寒いことはない。)

註 刈薦——刈った薦であんだむしろ

真薦刈る大野川原の水隠りに恋ひ来し妹が紐解くわれは

(真薦を刈る大野川の川原の水のようにこもって、ひそかに恋して来た娘の紐を今こそ解くよ。私は。)

畳薦へだて編む数通はさば道のしば草生ひざらましを

(畳薦を距て編みにする数ほども通っていらしたら、道の雑草もはえないでしょうに。)

註 畳薦——敷物にする薦

以上の歌から推察されるように、竪穴住居に住む庶民の夜具は、湿地帯や川原に自生する真薦(真菰)でむしろを編んでそれを敷いていたことが理解される。真薦はイネ科の多年草で高さ1~2mまでのびるため、むしろを編む材料としていたようである。

さらに、竪穴住居内の様子を理解するための歌をみてみよう。

玉垂の小簾の垂簾を行きかちに寝は寝さずとも君は通はせ

(玉垂の小簾の垂簾を間にして寝ることはできずともあなたは通っていらして下さい。)

玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ

(玉を垂らしたすだれのすき間から入って通っていらっしやい。足乳ねの母が音をとがめたら風と申しておきましょう。)

とあるように、住居内の間仕切りは、玉垂の小簾（玉をたらしたすだれ）であったとおもわれる。この時代の結婚形態は妻問い婚（男性が女性の家へ通う）であったことも歌の中から伺える。しかし、土地によっては入手しやすい材料を使ってそれぞれ工夫をこらしていたものとおもわれる。

第13表 薦編み重し石一覧表

No.	長さ	最大幅	厚さ	重量(g)	石質	備考
35- 1	11.5	7.2	4.5	420	砂岩	
35- 2	13.0	6.8	4.5	540	硬砂岩	割れ面ある
35- 3	13.5	6.5	2.2	340	荒船玄武岩	
35- 4	12.0	6.5	2.2	370	荒船玄武岩	
35- 5	8.6	5.9	4.5	220	硬砂岩(変質)	
35- 6	11.8	4.3	3.9	300	硬砂岩	
35- 7	12.6	8.4	2.3	440	閃緑岩	
35- 8	11.0	6.8	2.9	360	安山岩	
35- 9	12.1	5.9	3.4	440	荒船玄武岩	
35-10	10.3	6.3	2.8	340	輝石安山岩	割れ面ある
35-11	11.5	5.4	4.2	360	砂岩	割れ面ある
35-12	12.2	9.1	4.0	560	硬砂岩・チャート	
36-13	9.5	7.7	4.5	520	安山岩	割れ面ある
36-14	9.1	7.9	3.9	460	安山岩	割れ面ある
36-15	11.2	8.7	2.8	440	砂岩	割れ面ある
36-16	14.2	8.5	4.4	620	荒船玄武岩	

原遺跡の集落を構成していた人々の生活基盤となる社会的背景は、氏族制社会の崩壊から律令制度の確立期に向かう時期である。この時期の庶民生活は、政変による転換期であったとおもわれる。考古学的な面での変化は、超大形住居址（佐久市樋村遺跡258号住居址は、畳80枚が敷ける大形である。）が消え中形～小形住居址へと移行するが、竪穴住居内での生活はカマド等の基本的な生活のあり方に変化はない。しかし、律令制度により日本で初の「男女の法」による家族法が制定され、山上憶良の貧窮問答歌「父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へ吟ひ」とあるように結婚形態への変化がみられる。これ等については稿を改めた（島田 恵子）

## 5 土 器

本遺跡から出土した土器を住居址、時期、器種別に区分けして第58・59図に示した。これ等の土器様相を住居址毎にみていきたい。

H2号住居址出土の土器は、甕9個体、坏3個体、高坏1個体とかなり多い。焼失による廃絶であるため、当時竪穴住居址に住んでいた人々の一家族の什器類の一括セットがほぼそろっているとおもわれる。

甕は、口辺部が「くの字」状に外反するが、その内弱く外反する18-4、小形甕の19-8・9があり、強くくびれる、18-1・2、19-6がある。胴上～中央にかけて最大径をもち、球胴状にふくらむ18-2と、球胴を呈す19-7がある。また、18-3・4は胴中央～下にかけて>状にふくらんでいる。輪積痕が明瞭に残るのは、18-1・2・4、19-5・6がある。器厚は、19-5が薄く、18-1がやや薄くなりつつある。その他は厚い。

調整は、輪積痕が内面に特に多く、外面にも口辺部にかなり残っているように粗雑である。また、粘性の強い土の中に埋っていたため摩滅し、ヘラナデ痕も明瞭に観察できない。特にヘラの幅は明確に残されず均一的にヘラナデが成されている。まず、口辺部は強弱はあるが回転によるヨコナデが内外面に施されている。陶芸家の方に鑑定していただいたところ、手動によるロクロヨコナデ痕であるとのことであった。胴部はヘラケズリが施され、ところどころヘラ先による沈線が残されている。また、胎土に混入していた砂粒がヘラケズリの方向にスジとなって流されている痕跡は明確に観察される。19の7は前面ヘラミガキされているがヘラの方向が浮き出していない。弱いヘラミガキで均一的にミガかれている。摩滅が著しい。

坏は、内面黒色研磨された20-11、摘みが見つからない須恵器蓋より転化した土師器坏20-12がある。これは須恵器蓋の模倣品である47-4と器形が類似するが、模倣品は器厚が薄く、天井部と口辺部の稜が強いことと、天井部の湾曲の曲線が美しい。坏は器厚が厚くガッチリしている。稜もやや弱い。20-13は盤状を呈した坏で、底面が平坦で器厚が厚く安定した器形である。12、13共に赤味を帯びた褐色を呈し弱いヘラミガキが施されている。20-14は高坏で、坏身は

内面黒色であり、外面は口辺部のみ黒色研磨されている。坏口辺と底部との境に強い稜がある。須恵器の出土は皆無であった。

次に、H 8号住居址出土の土器をみたい。第59図には坏・蓋のみを図示した。47-10は、小ぶりの坏で、内面はまだらに黒色研磨されている。丸底を呈す。47-7・8は丸底で口辺部と底部の境に稜を有す。弱いヘラミガキが施されており、赤褐色を呈す。47-5は碗状の大形の坏で稜が強い。47-4は須恵器模倣の蓋である丁寧に成形・調整がなされている。47-11は須恵器の生焼けで一見して土師器と見間違える。12は手持ちヘラケズリされた須恵器坏である。以上の土器群から、H 2号・H 8号住居址は古墳時代末期から奈良時代における過渡期に比定した。該期の資料は調査例の多い佐久市・小諸市・御代田町においても乏しく、初見の資料であるといえる。そのため再度慎重に検討を重ねて時期を決定したが、今後この時期の資料が増加することにより改めて検討しなければならない状況におかれるであろうと考えている。

甕は、器厚の厚いものから器厚の薄くなる(19-5)変化が明確にあらわれている。また、球胴を呈しヘラミガキされた器厚の厚い甕(19-7)は、佐久市若宮遺跡においては、奈良時代初頭のH12号住居址より出土している。

坏は、口辺部と底部との境に稜を有した器形が多く丸底を呈する。また、口辺部が直立して立ち上る坏は摘みをもたない須恵器蓋の転化したもので、古墳時代末期的様相が強い。これ等の器形は山梨県に出土が多い。さらに赤褐色を呈す胎土も山梨県の影響が考えられる。

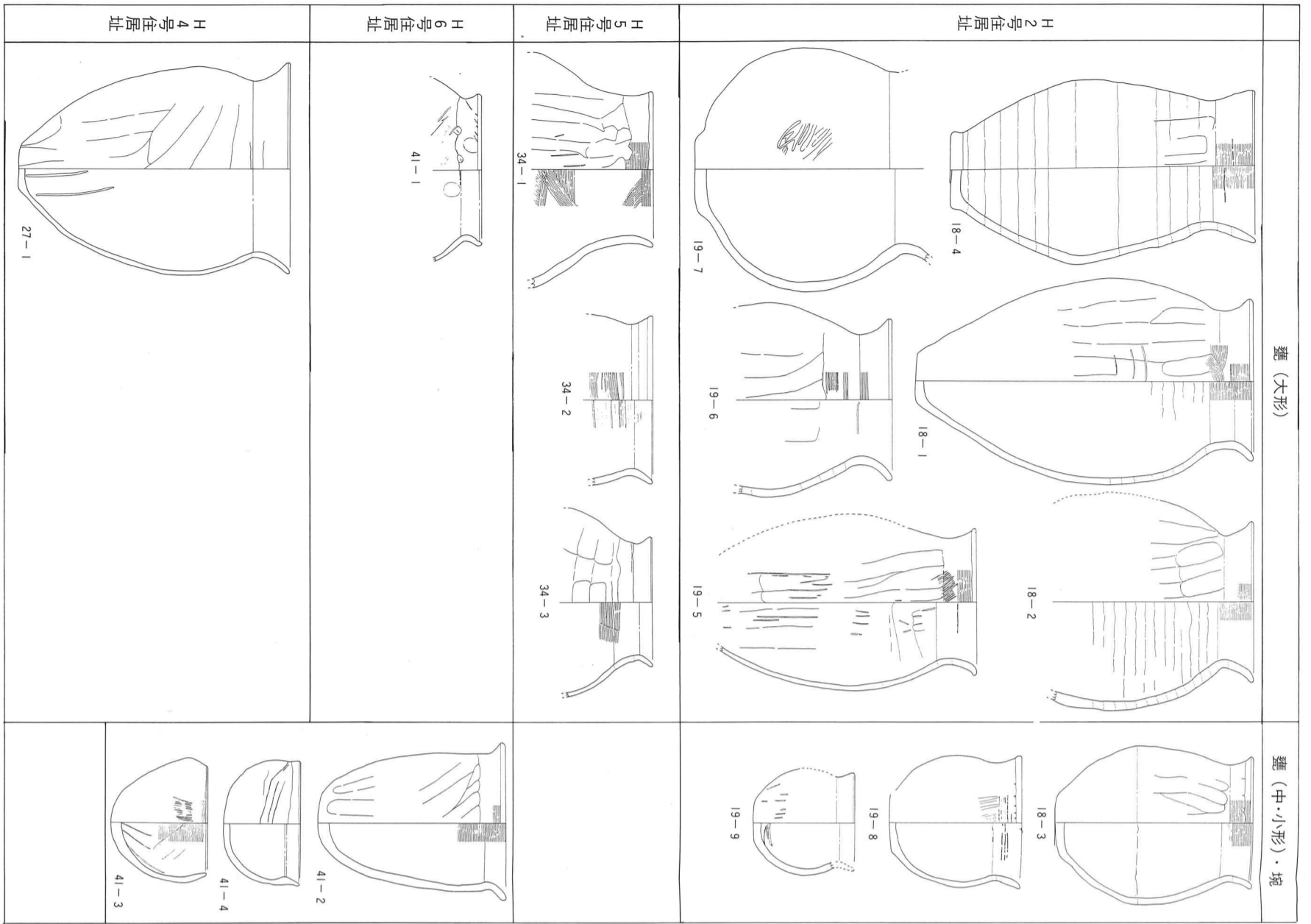
高坏は、やはり坏に稜が残っており、鬼高式土器の影響が見られる。以上がH 2号住居址の土器であるが、H 8号住居址では、甕口辺部と底部を第47図に図示してある。底部片はいずれも器厚が厚い個体の底部であるが、口辺部片は器厚の薄い甕である。

土師器坏は、丸底を呈し、小形が多い。須恵器蓋の転化したもの、須恵器蓋の土師器模倣品もある。須恵器坏は小形で口辺が大きく開くものと内傾するものがあり、底部は手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリとに別れる。

前述したが、本調査区より出土した須恵器坏のヘラキリ底部片、カエリのない須恵器蓋、甑の出土の見られないことも、古墳時代的様相に欠けるものである。また、球胴を呈したヘラミガキの甕の下限期、器厚の厚い甕から器厚の薄い甕への変化が認められること等奈良時代的様相が伺える。しかし、稜を有した丸底の坏等は古墳時代的影響が強い。

次に奈良時代の住居址出土の土器群に触れたい。

H 7号住居址からは、44-3・4の小形の坏が出土した。この他甕と碗の底部片、器厚の薄い甕破片が出土している。44-3・4の坏は、口辺部に回転によるヨコナデが明確に残っている。少ない資料であるが、このロクロヨコナデと器厚の薄い土師器長明甕の破片によって時期



	内面黒色埴	丸底(須恵器蓋転化)埴	盤状埴・丸底埴	丸底(小形)埴	高埴・蓋(須恵器模倣の土師器)	須恵器埴・高台付埴	その他須恵器
H2号住居址	20-11	20-12	20-13		20-14		
H8号住居址	47-10	47-8 47-7	47-5		47-4	47-12 47-11	
H5号住居址	34-4			34-6	34-7	34-5	
H7号住居址				44-3 44-4			
H6号住居址						41-6	41-5
H4号住居址						27-5 27-6 27-7	27-3 27-2 27-4

第59図 原遺跡出土の古墳時代末期～奈良時代の埴・高埴・埴・蓋・須恵器集成図

決定ができた。

H 5号住居址は、小刻みにヘラケズリされ、やや丸味を帯びた底部を有す内面黒色の坏、丸底の小形坏、高坏、糸切りの後ヘラケズリされた粗雑な底部を呈する須恵器坏が出土、また、甕は、器厚が厚く長いヘラケズリが施されたものと、器厚が薄くなりはじめた甕2個体がある。

H 6号住居址からは、煮炊きに使用した中形甕41-2、埴41-3・4と器厚の薄い甕41-1、須恵器高台付坏、カエリのない須恵器蓋が出土している。埴には回転によるヨコナデが認められる。

これ等、H 7・H 5・H 6号住居址は奈良時代初頭に比定されよう。

H 4号住居址からは、器厚が薄く胴部がやや短くなった土師器甕と須恵器坏1、須恵器高台付坏2、須恵器小形甕2個体が出土し、須恵器がほとんどである。奈良時代全期を通して出土する底径の長いやや丸味を帯びたヘラケズリの須恵器坏27-5が初めて出土している。本住居址は、H 7・H 5・H 6号住居址より新しいと考えられる。

資料も少なく、時間的制約からこれ以上の細分は不可能である。南佐久郡における初見であり、山梨県、群馬県との土器編年の検討とも合せて、今後、付近の調査の増加を待って別稿で誤り、見落しを修正していきたいと考えている。

(島田 恵子)

## 6 原遺跡の歴史的考察

原遺跡は白田町田口地区の字大奈良に所在する。大奈良は江戸時代には大給松平氏の田野口領とは別に、上中込と共に幕府領(天領)に属してした。延享3年(1746)助郷割替には「高350石 大奈良村」とある。明治9年田口、上中込、大奈良の3村が合併して田口村となった。大奈良村がいつできたか、大奈良という村名がなぜつけられたか明かでないが、雨川右岸の段丘上にあって、千曲川畔の沖積平野を前面にして立地するそのたたずまいは、その村名と共に古い歴史を物語っている。大奈良村の鎮守神は原遺跡に所在する春日神社である。今回の原遺跡の発掘調査はこの神社の門前からはじまった。春日神社は明治43年上中込の住吉神社を合祀して御幸神社と改称した。祭神は天児屋根命、武甕槌命、底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、息長足姫(神功皇后)であるが、天児屋根命、武甕槌命は春日神社の祭神で、底筒之男命以下は住吉神社の祭神である。この旧春日神社(現御幸神社)の所在する原遺跡には幸の神、外九間、中原の3古墳群があって、現存する12基の古墳は白田町の古墳の中で最大級の規模をもつものである。旧春日神社の東南方750mに新海神社の大鳥居があり、さらにその延長上1kmの宮の沢に新海神社が鎮座する。その間の沿道にも古墳群が存在し、それらの古墳は大部分が新海神社地となっている。

今回発掘調査の行なわれたのは広大な原遺跡のうち、西よりの段丘端に面した部分で、古墳群はそれより東方に分布する。御幸神社(旧春日神社)境内の西辺にそって南にのびる農道の

拡幅に伴って行なわれた緊急調査で、極めて限られた面積の発掘にとどまったのであるが、弥生式後期（箱清水式）の住居址1軒とベッド状遺構を伴う小型住居址1、古墳時代末から奈良時代初頭にあたる住居址6軒、平安時代住居址2軒を検出した。奈良時代初頭の住居址では石組カマドにかかったままの2つの甕形土器から粥状の炭化物が検出された。平安時代の住居址からは鉄滓が検出され、製鉄址の可能性も考えられる。今回調査された原遺跡は弥生時代から平安時代に及ぶ集落址であるが、その中心は奈良時代の初頭にある。

この古代の村の人たちは弥生時代から雨川流域や西方の段丘崖下の湧水を利用して稲作をすすめていたものと思われる。この千曲川畔の平地を囲むように北方に離山の独立丘があるが、その南麓からは4個の銅釧が発見されていて、この付近が弥生時代に相当な発展をしていたことを示している。

雨川左岸の三分は屯倉の遺称が転化したものといわれるが、畿内をはなれた辺境の屯倉は政治、軍事の重要拠点をえらんで、地方豪族の土地を没収して設定した大和朝廷の支配機構と考えられるが、6世紀後半から7世紀にかけては、現地の豪族や中央から派遣した下級官人<sup>みやげ</sup>を屯倉首、田令などの監督官に任命して、その地方の農民を田部として耕作させた。大化改新以後は戸籍がつくられ、郷(里)、戸が編成され、租、庸、調の税法が定められると租税は郡、郷の正倉に収納されるようになった。三分から入沢にかけては田口用水堰や広域農道にそって、山際古墳群や田中、井上、戸井口、荒巻、山際等の弥生から平安時代にわたる多くの遺跡が分布していて、ここが古代稲作の適地であったことを示している。また離山の北方には大田部(現佐久市)部落があり、屯倉の耕作民である田部の名をとどめている。このように原遺跡を中心とする南北に長い千曲川右岸の平地一帯は稲作がはやく開け、6、7世紀からは大和朝廷の屯倉として直接その支配下に置かれていたものと推定できる。屯倉が政治、軍事の重要拠点に置かれたものとするれば、それは当時の状況からみて、田口峠や内山峠をにらんで、大和朝廷が関東、奥羽への前進基地とするために設定したものと考えられる。原遺跡内や田口地区の古墳は巨石を用いた横穴式石室をもつ円墳が多く、それらは6世紀後半から7世紀の築造と考えられるから、まさにこの頃の支配者たちの墳墓として考えることができる。

今回発掘調査された原遺跡の住居址は7世紀末から8世紀初の奈良時代初頭のを主としているから、これらの古墳よりもややおそく、直接むすばないことになるが実際には原地区の古墳群はまだ発掘調査を行なったものがないから断定することはできない。白田町の古墳で発掘調査の行なわれたものは田口の英田地畑古墳、入沢の五霊西12号古墳と川西の白田美里の蛇塚古墳(清掃調査)の3基である。このうち新海神社のそばの英田地畑古墳と美里の蛇塚古墳からは蕨手刀が出土し、入沢の五霊西古墳からは銅製の銚帯具4個が出土している。蕨手刀は把頭の形が蕨手の形をしている刀で、8世紀奈良時代を中心に7世紀末から9世紀にかけて使用され、その出土例は東国で200例近く確認されているのに、西国ではわずか5例といわれ東国



に圧倒的に多く、特に東北地方に偏っている。蕨手刀は直刀から日本刀への進化の過程でつくられた太刀で、その形式は上州・信州のものが古いから上・信で生まれた可能性があるとの説もあるが、当時は大和朝廷の東北征討が盛んに行なわれていた時代であるから、東日本の大和朝廷に直属した伴造的氏族の間で使われた武器といわれる。長野県下の蕨手刀出土地はその形態がはっきりしているものは10例とされているが、佐久では白田町の2例のほかは小諸市加増の源太谷地古墳から出土している。諏訪地方では原村の八ツ手遺跡など4例があり、県下の蕨手刀出土地が諏訪と佐久に集中しているのが注目される。

入沢五霊西古墳から出土した鍔帯は、大化の改新によって古代国家が成立し、官制が整い位官が制定された結果、官人が位階に応じて着用するように法制化された飾り帯で、鍔とよばれる金具をつけていたから鍔帯という。鍔帯はバックルに当たる鉸具と尾端金具の鈍尾と、その中間につける飾り金具の巡方（四角）と丸鞆（弧形）の4種の部品から成るが、帯に装着されたままの完全な出土例がないからその構成の詳細はわからない。養老令（718）の衣服令に金銀装腰帯は五位以上、六位以下は烏油<sup>くろあぶら</sup>腰帯とある。烏油腰帯は銅鍔に黒漆を塗った黒色の鍔を用いたものである。鍔帯の使用は延暦15年（796）に前後的に禁止され（「日本紀略」）それ以後は金銀銅の鍔帯にかわって石製の鍔帯が用いられた。したがって律令制に於て鍔帯が正規に使用されたのは、奈良時代710年代から平安時代初頭の延暦15年（796）までということになる。長野県下の鍔帯の出土例は松本市、茅野市、諏訪市の古墳から巡方または丸鞆が1または2ヶ出土しているに過ぎない。そのうち諏訪市のものは石製巡方で時代が下る。佐久では佐久市前田遺跡の1号住居址から銅鍔巡方が1個だけ出土している。これに対して入沢の五霊西古墳から出土した鍔帯は鉸具1、巡方1、丸鞆2で、銅製で黒漆を塗ったあとがあり、まさに烏油腰帯である。その大きさやしっかりした造りから郡司級に相当するほどのものと考えられる。当時地方で有位の官人といえば郡司である。郡司は国司の監督下で佐久郡内の統治にあたった。郡司には地方豪族のうち有力で才能のある者が任ぜられ、大領（長官）少領（次官）と事務官として主政、主帳があった。郡司は終身官で世襲し、職分田（大領6町、少領4町、主政、主帳各2町）が与えられ、その子弟は国学への入学が可能で、官吏登用試験が受けられ、朝廷へその子女を衛士（兵士）や妾女（女官）として貢進して中央とのつながりを持つこともできた。しかし律令の官位令では郡司には官位は規定されていないが、選叙令で大領が外従八位上、少領が外従八位下に任ぜられることになっている。郡司が政務をとる佐久郡衙は、佐久郡の中樞部にあつて、そこには政庁をはじめ租税を収納する官倉、伝馬をつなぐ厩舎や役人の住居、その他の付属施設などがあつたはずである。佐久郡衙の所在地は東山道に近い佐久平の交通の要衝で、生産力の豊かな地に置かれたという考え方が有力であるが、発掘調査の進んだ佐久平でもまだ佐久郡衙の比定地は確認されていない。入沢を郡司の居住地とするのには無理があるが、埋蔵文化財詳細分布調査では、当時南佐久南部の山間地に向かって急速に開発が進められてい

る状況が確認されているから、その南方への発展の基地としての青沼郷入沢に郷長クラスの有力者がいた可能性はある。蕨手刀を出土した英田地畑・蛇塚の両古墳と、銚帯を出土した五霊西古墳はいずれもその出土遺物から8世紀奈良時代の古墳であることが明かである。まだ発掘調査を終わっていない原遺跡を中心とした原・大奈良地区の古墳群の中にも奈良時代のものがあることは十分に考えられ、今後の調査に期待される。

新海神社之記によれば新海神社は諏訪神の建御名方命の子興波岐命を主神とし、それは佐久郡を草創した新開神であり、興波岐命は別の名を大県神とも八県宿称神ともいう。新海神社記はまた八県宿称神とは和名抄の佐久郡八郷の県主の神で、延喜式神名帳にある英多神社であるとする。日本三代実録は貞観10年(868)3月9日信濃国従五位下八県宿称命神が正五位下を授けられと記しているが、そのほかには八県宿称神についての記録はないが、もし神社記の説をとれば、英多神社を祀った佐久の県主は八県称命神という諏訪系の氏族ということになる。これはたいへん重要なことであるが、佐久の県主についてはまだ諸説があって推定の段階を出ない。新海神社の名が最初に見えるのは延文元年(1356)諏訪円忠が著わした諏訪大明神絵詞で、諏訪湖御渡について記した中に「佐久の新開社は二日ほどの行程である」と記されている。応永4年(1397)11月26日諏訪上社神長官守矢貞実が御渡について幕府に報告した文には、諏訪大明神と佐久新海大明神が湖中に参会して御渡が生じたと記している。諏訪湖の結氷が一大音響と共に亀裂を生ずる御渡は、諏訪上社大祝から毎年幕府に報告され、当社神幸記に嘉吉3年(1443)から天和元年(1681)まで約240年間にわたる記録が残されているが、それは諏訪明神と佐久新海明神が湖中で参会するものとして記されていて、新海神社と諏訪上社の関係の深いことを思わせる。

これに対して大奈良の春日神社の祭神は天児屋根命、武甕槌命で藤原氏の氏神である。奈良春日大社は武甕槌命、経津主命、天児屋根命を祭神としている。武甕槌命と経津主命は伊邪那岐命が迦具土神を斬ったとき、刃より滴り落ちる血が経津主神の祖となり、鏝より滴る血が武甕槌命の祖となったと日本書紀に記されていて、この両神は国譲り神話に活躍し、香取神宮と鹿島神宮に祀られている。藤原氏はこの2神を氏神として奈良に春日大社として祀ったのである。大奈良の地名と共に藤原氏の氏神である春日神社がここに祀られていることは、この地方にとって重要な意味をもつものと思われる。

新海神社と諏訪上社の関係が深いことは既に述べたとおりだが、この諏訪と佐久を結ぶ重要な交通路が大河原峠である。また神道集には諏訪明神が、その母である日光山の神のもとへ通う途中で、信濃と上野の国境にある荒船山に住んでいた美女の荒船明神と夫婦になったという説話がのせられていて、諏訪一佐久一上州を結ぶ大河原峠、田口峠の古い交通路があったとを物語る。叡山大師伝には最澄が上野国浄土院(現鬼石町浄法寺)に東国布教の一大拠点をつくるため、法華経1,000部を現茅野市芹ヶ沢の大山寺から大河原峠・田口峠(推定)を越えて運ん

だことが記されている。この田口峠の向こうに上州一宮の貫前神社がある。この貫前神社はもと荒船明神を祀ったもので、神道集には荒船明神はインドから天甲船に乗って飛来した美女が荒船山にとどまったものである。この美女（荒船明神）と諏訪明神が夫婦になったというのである。この神は渡来人の神と考えられる。上州甘楽郡にははやくから渡来人がここに落付いて繁栄していた。荒船明神つまり貫前神社はこの渡来人たちが崇敬して祭祀していたものである。和銅4年（711）に甘楽郡の織裳、韓級、矢田、大家、緑野郡の武美、片岡郡の山等という6郷をもって新しく多胡郡を設置して、郡司に羊（人名）を任命したことが続日本紀と多胡碑に記され、同書の天平神護2年（766）5月22日条に新羅人193人に吉井連の姓を賜ったことがあり、多胡郡が新羅からの渡来人を中心につくられた郡であることがわかる。多胡郡の胡は外国或は渡来人のことである。これに対して甘楽郡の隣りの碓氷郡には早くから物部氏が居住していた。特に現安中市磯部の物部氏は磯部氏を称し、物部氏の氏神石上神宮を分祀していたが、8世紀半ごろには甘楽郡西部へ進出し、従来渡来人が奉仕していた貫前神社に物部氏の祖神、職業神である抜鉾神を「ふつのみたまのつるぎ」として祀ったので貫前神社は抜鉾神社となり渡来人の神と物部氏の神の二重の性格をもつようになった。（抜鉾神社は明治4年に貫前神社と改称した。）

甘楽郡の古墳は下仁田町馬山を西限として、富岡市から甘楽町福島の間にも錦川ぞいにたくさん分布している。富岡市の古墳総数は約450基、そのほとんどが古墳後期の6～7世紀のもので、原遺跡の古墳群と同時代に属する横穴式石室の円墳であくが、福島の高森稲荷古墳のように大規模な前方後円墳もある。巨石を使った横穴式両袖型石室をもつこの古墳は墳頂に高森稲荷神社が祀られているが彦狭島王墓の伝承があって佐久との関係が考えられる。前期の山頂古墳としては富岡市の北山茶臼山古墳（4世紀末）同茶臼山西古墳（5世紀初頭）があり、三角縁神獸鏡、石釧、木製楯などが出土していて、この地方の開拓の古さを物語っている。近年の関越自動車道建設に伴う発掘調査で、吉井町インター建設予定地の矢田遺跡から文字を線刻した滑石製紡錘車が多数発見され、その中に9世紀代の住居址から「物部郷長」「八田郷」等の線刻が検出されている。この遺跡は前記の多胡郡矢田郷の地で、北方錦川の対岸には多胡碑がある。9世紀には物部一族が渡来人にかわって多胡郡の郷長となってその勢力をのばしていたことがわかる。

群馬県側で物部氏の活動が活発であったのに対して、信州では物部氏の資料はきわめて少い。しかし佐久郡では唯一つ清川の上原政彦氏宅に「物部猪丸」の銅印が所蔵されていて、極めて重要な史料として注目される。この銅印は3cm×3.1cmの方形で、高さ2.7cm、厚さ0.25cm、撥形の鈕を付している。この銅印は明和3年（1766）上原氏の屋敷の庭の地下2尺5寸の平石の下から出土し、信濃奇勝録の著者井出道貞はこれを見て、出雲風土記に記された物部猪磨（丸）の説話をのせ、物部猪丸の銅印は奈良朝に流人としてこの地に下った人が、これを伝来したも

のであろうと記している。旧南佐久郡志田口村の項には、この銅印は「昔から、いつでも米1駄に代えられると言い伝う」と、その価値の高いことを記している。銅印は中国で発生し、日本では慶雲元年(704)鍛冶司に命じて諸国印を鑄造させた(「続日本紀」)とあるのが初見である。印は天皇印をはじめ各省、国、社寺、軍団、郡印など公印(官印)だけで私印は造らせなかった。平安時代貞観10年(868)6月28日太政官符で、諸家には1寸5分以下の印章を用いることを許すとある。家印は摂関家など三位以上の公家に限られた。その後しだいに印章を使用するものが多くなったが、これを用いたものは僧侶と郷長級までといわれる。しかし平安中期からは花押(書き判)が使われるようになるから、私印は平安初期にだけ使われたものと言える。長野県下に現存する銅印はこの「物部猪丸」印の他には諏訪下社の「売神祝印」(国重要文化財)と松本市三間沢川左岸遺跡出土の「長良私印」があるだけである。特に「物部猪丸」印のように個人の名前を記した印は全国的にも極めて少ないという。群馬県では高崎市の条里制遺構の水路から「物部私印」の銅印が出土していて、この地方に物部氏の多いことを示している。清川出土の物部猪丸の銅印が、原遺跡をめぐる大奈良田口清川の古代とどのようなかかわりをもつのか、また上野国甘楽郡、多胡郡の物部氏との関係なども興味ある今後の課題である。今回原遺跡の発掘調査によって南佐久地方ではじめて奈良時代集落が検出されたことは、これを契機として周辺古墳群や新海神社、春日神社及び大奈良、三分、大田部の古代地名、清川出土の「物部猪丸」銅印、さらに田口峠を越えた上野国一の宮貫前神社や周辺の古墳群をめぐる、渡来人や物部氏族とのかかわりなど、広い視野から今後の研究を進めることの必要性を一層強く示している。

(井出 正義)

## 引用参考文献

- |    |                        |          |  |
|----|------------------------|----------|--|
| 1  | 白田町教育委員会               | 1987     | 「勝間原遺跡」  |
| 2  | ”                      | 1988     | 「五霊西12号古墳」   |
| 3  | ”                      | 1988     | 「白田町遺跡詳細分布調査報告書」                                       |
| 4  | 小海町教育委員会               | 1989     | 「弥左衛門屋敷遺跡」   |
| 5  | 小諸市教育委員会               | 1983     | 「曾根城遺跡」  |
| 6  | ”                      | 1988     | 「鋳物師屋」   |
| 7  | 御代田町教育委員会              | 1985     | 「野火付遺跡」  |
| 8  | ”                      | 1987     | 「前田遺跡」   |
| 9  | 佐久市教育委員会               | 1981     | 「下小平遺跡」  |
| 10 | ”                      | 1984     | 「若宮遺跡」   |
| 11 | ”                      | 1984     | 「樋村遺跡」   |
| 12 | 長野県史刊行会                | 1988     | 「長野県史考古資料編全一卷（四）」                                      |
| 13 | 山梨県教育委員会               | 1987     | 「姥塚遺跡・姥塚無名墳」   |
| 14 | 堤 隆                    | 1987     | 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」<br>——佐久地方の様相——長野県考古学会誌55・56号 |
| 15 | 中西 進                   | 1984     | 「萬葉集」 講談社  |
| 16 | 群馬県埋蔵文化財調査団関越道上越線調査事務所 | 1987. 3. | 現地見学会資料「矢田遺跡」  |
| 17 | ”                      | 1987     | 「調査概要・矢田遺跡」  |
| 18 | ”                      | 1987     | 「古代古墳と中世城郭」—富岡市大<br>島・野上・南後筒・上高瀬—                      |
| 19 | 尾崎喜左雄他                 | 1987     | 「群馬県の地名」 平凡社   |
| 20 | 八幡一郎                   | 1987     | 「南佐久郡の考古学的調査」 歴史図書                                     |

## あ と が き

発掘調査は、汗と土とのたたかいであります。土は長い間その下に遺構を保存してくれます。然し土は時には私たちに素直にこの遺構を教えてはくれません。この土で私たちは実に苦勞します。

此の調査が始まったのは6月20日でした。夏の調査は、暑いのと雨が多いのとで大変です。「炎天下遺構もとめて掘る土に汗は流れてとめどなく落つ」もう十数年も前になりますが、佐久市の上の城遺跡の調査の時私がこんなへたな歌を作った事をふと思い出しました。今回の調査中、協力者の柳沢幸恵さんが「発掘やどろ手で拭けぬ汗ばかり」という実感のこもった秀作を作っています。

雨が降ると土はつるつるすべって一輪車が動かない。前に縄をつけて二人で引っぱったりもします。こんな苦勞もありますが、掘った土の下から遺構が見つかり、めずらしい土器が出てきたりして、遠い古代の人達の生活に接する事の出来た時などは発掘ならではの味えない喜びであります。

調査員や作業員のご苦勞の結果、弥生時代の住居址が2軒、特殊遺構1、古墳時代末期から奈良時代の住居址6軒、平安時代の住居址2軒、という成果があがりました。

これは、大奈良、原の大きな遺跡の中のほんの一部にすぎませんが、大奈良、原、部落の古代史の一端が解明され、又奈良時代の集落が発見された事などは、白田町の古代史は勿論のこと南佐久の古代史の解明にもつながる貴重な調査でもあります。

こう言ふ歴史は土の中に埋れており、此れらは金では買う事の出来ない貴重な文化財です。開発という名のもとにとかく、失なわれがちであり、又埋蔵文化財は厄介物あつかいにされがちであります。此の原遺跡の調査にあたりましては、地元の皆さんのご理解とご協力に依り貴重な調査が出来ました。

又第2地区西側は住宅に接近し、道路には水道管と下水道管が敷設されて居り、地元の人たちの要望もあり、一部を地主である井出泰輔氏のご理解に依り土地を広く掘らせていただき貴重な成果のあがったことを御礼申し上げます。

報告書作成にあたっては、短時間という限られた期限の中、担当者をはじめお手伝いいただいた調査員、協力者の方々の昼夜にわたる勞に深く感謝の意を表します。

南佐久郡においては、古墳時代末期から奈良時代の住居址および集落の発掘調査は初見であります。遺跡内に所在する古墳群と共に今後の研究に期待をおうところ大であり、白田町における古代史解明の第一歩を歩きはじめたといえる調査となりました。

本報告書がそうした今後の地域史研究において、手がかりの一端をになうことができれば幸いです。特に考察の中には、本遺跡から検出されたベッド状遺構について、広く全国、長野県内の類例をあげた研究が寄せられております。また、大奈良・原・田口地区における古代史も詳細な論考がなされております。出土した土器、住居址等においても当時の生活を復原しながらわかりやすく考察しており、調査団の諸先生方の努力が伺える報告書となりました。町民の皆さんに広く活用していただくことを祈念して、報告書刊行まで大勢の方々にご協力、ご援助いただきましたことに重ね重ね厚くお礼申し上げます。 (調査団長 三石 延雄)

圖 版

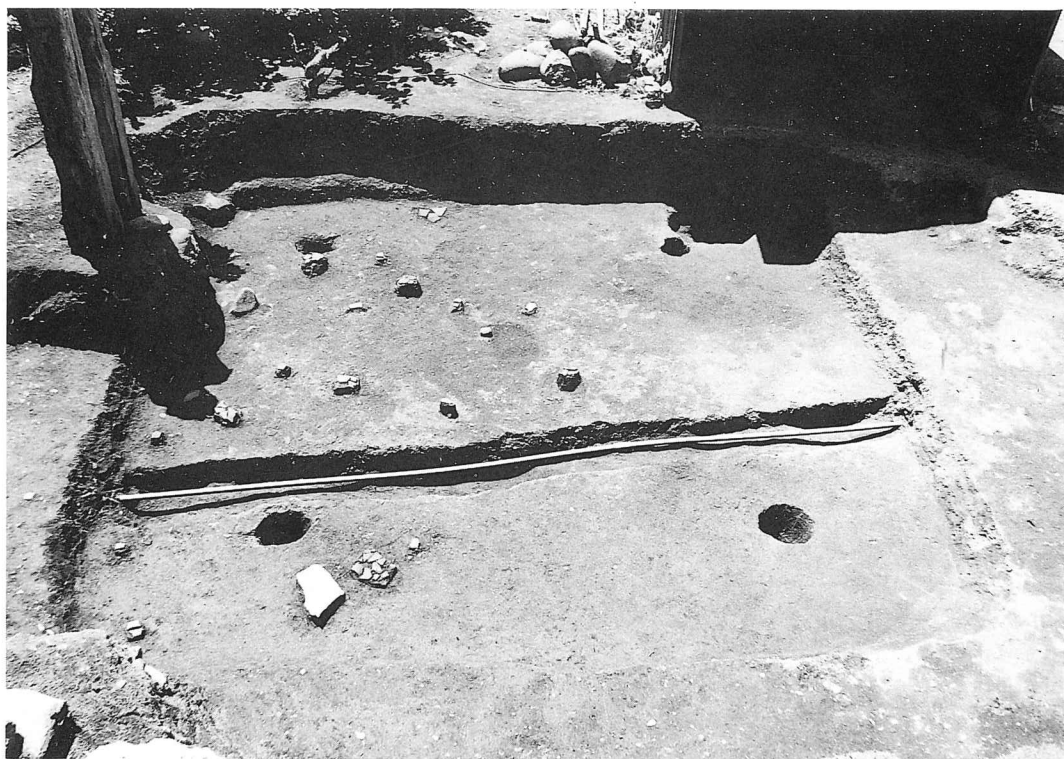


1 調査区第1地点近景

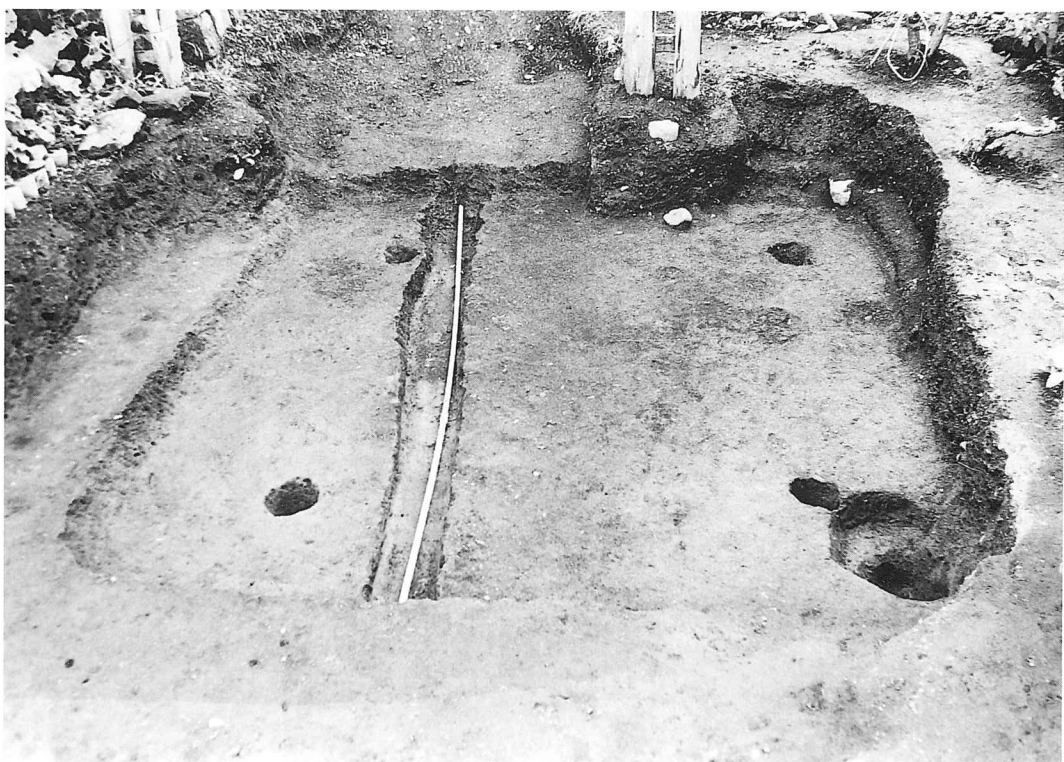


2 調査区第2地点近景

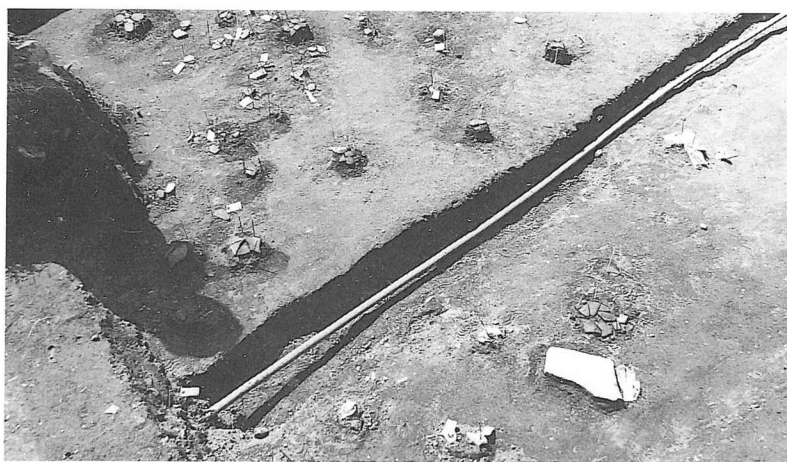




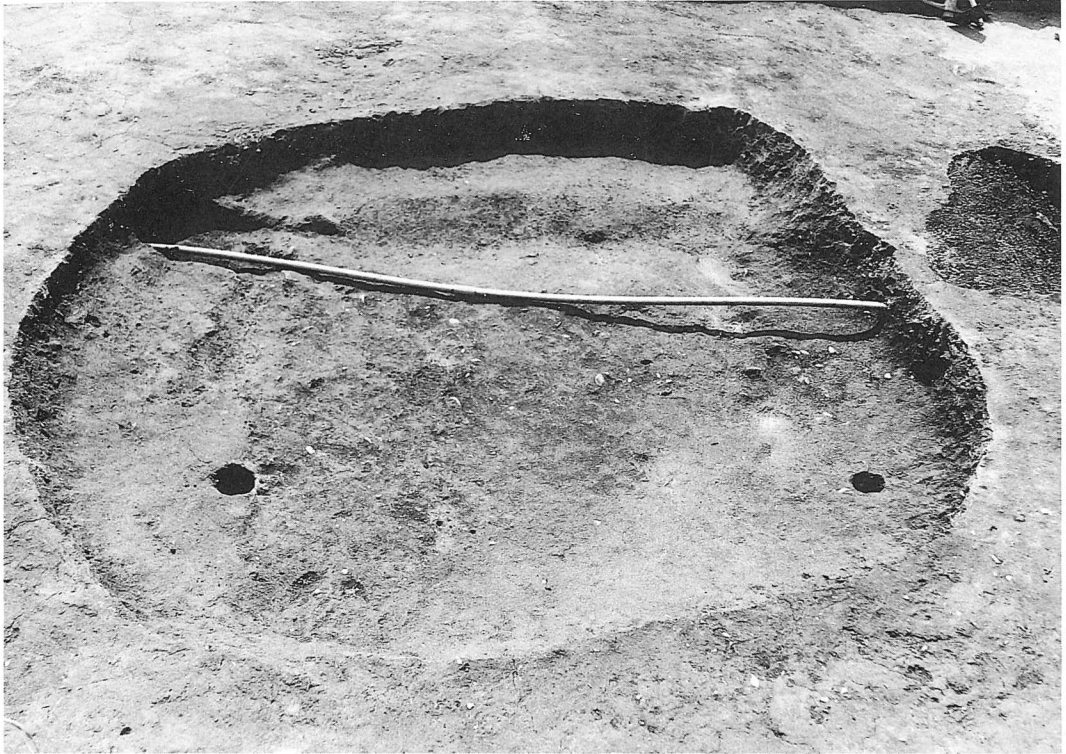
1 Y1号住居址（東方より）



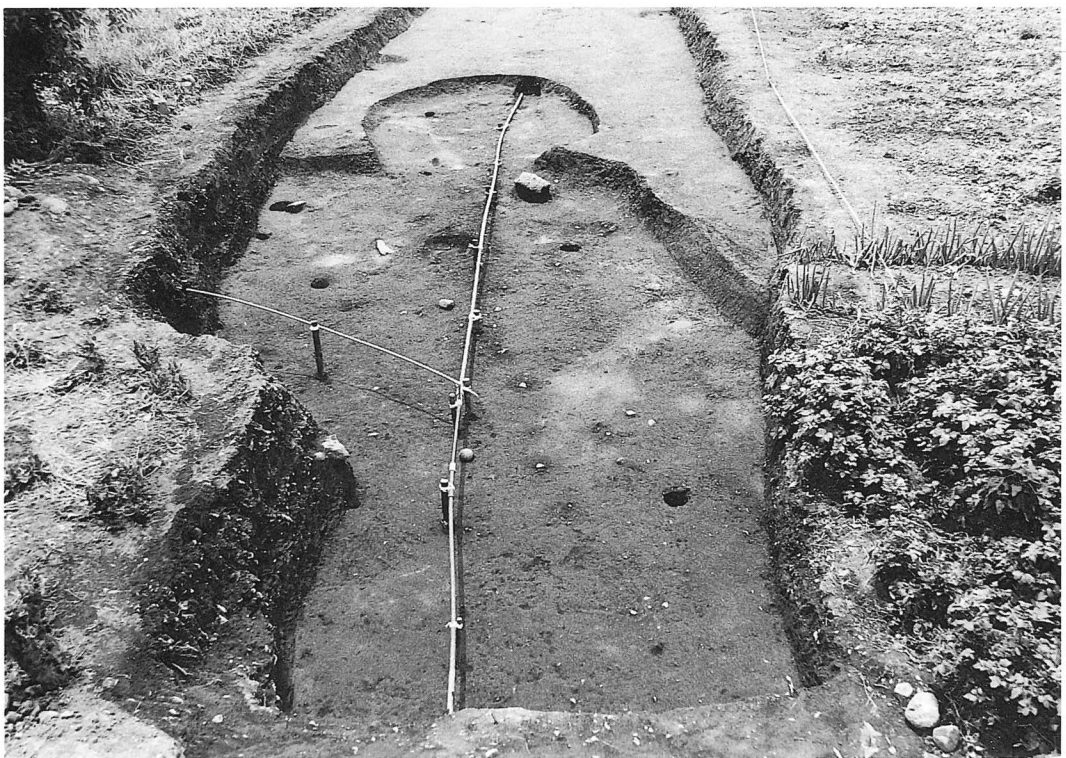
2 Y1号住居址完掘状態（北方より）



1 Y1号住居址遺物出土状态·土壙



1 T1号特殊遺構（東方より）



2 Y2号住居址（北方より）



1 D1号土壙



2 D2号土壙



3 調査区第1地点の2全景(南方より)



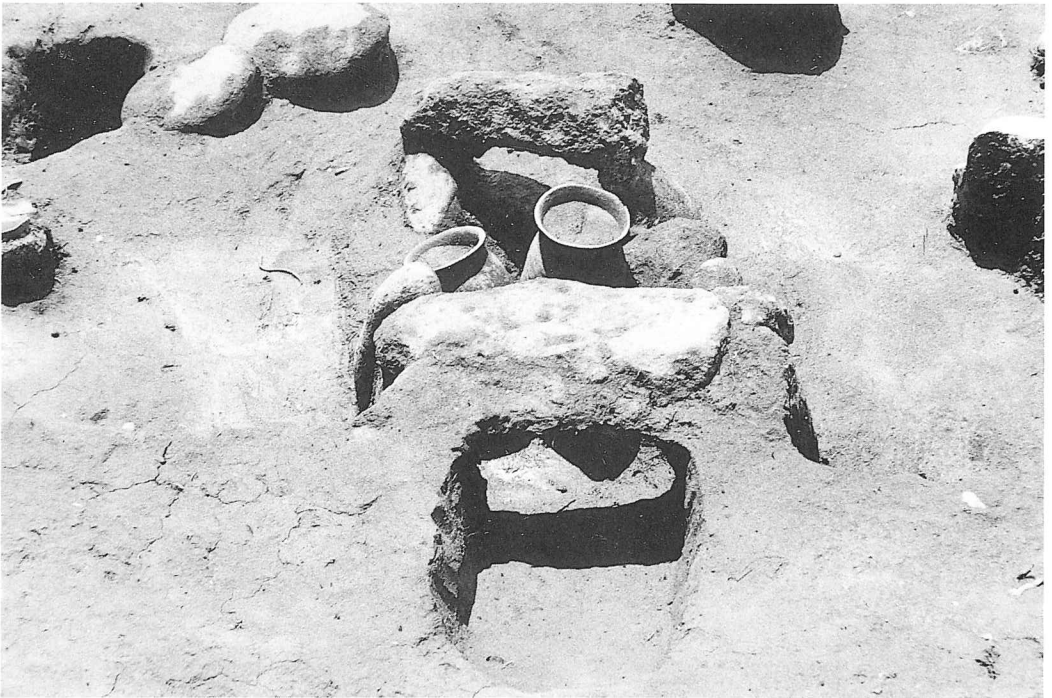
1 H1号住居址 (南方より)



2 H2号住居址 (北方より)



1 H2号住居址カマド（南方より）



2 H2号住居址カマド（北方より）

図版八

1 H2号住居址遺物出土状態

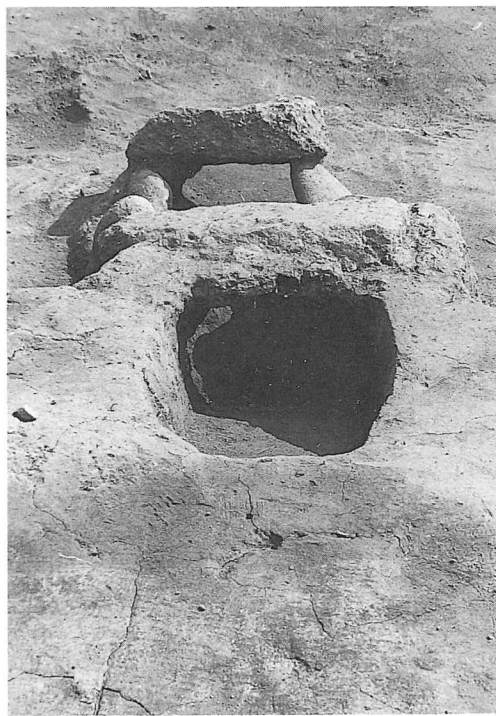




1 H2号住居址完掘状態（南方より）



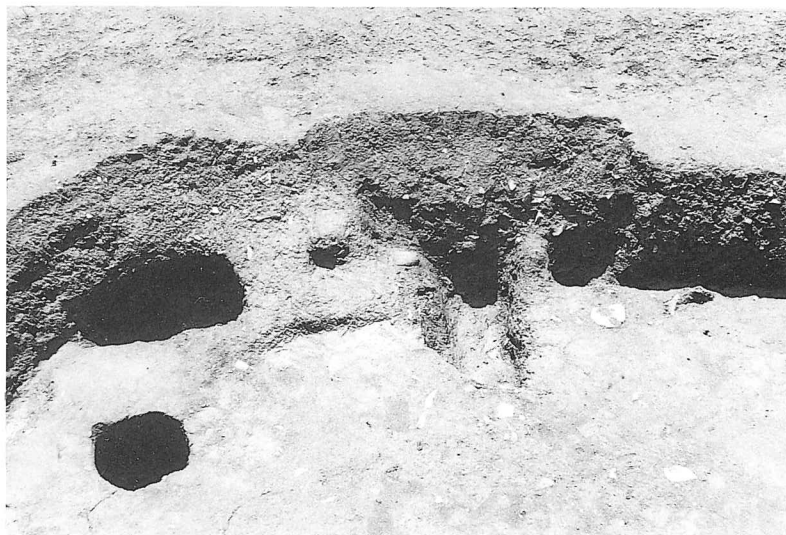
2 H2号住居址カマド







1 H 3号住居址 (北方より)



2 H 3号住居址カマド・灰溜施設



1 H4号住居址（南方より）



2 H4号住居址カマド



3 H4号住居址遺物出土状態



1 H 5号住居址完掘状態（東方より）



2 H 5号住居址カマドNo. 2  
（煙道が2つある）



3 H 5号住居址カマドNo. 2  
（煙出しの部分に甕の胴部が伏せてある）



1 H5号住居址(西方より)



2 コモの重し石出土状態



3 H5号住居址カマドNo.1



1 H 6号住居址（手前）西方より



2 H 6号住居址カマド完...状態



1 H 7号住居址 (南方より)



2 H 7号住居址遺物出土状態



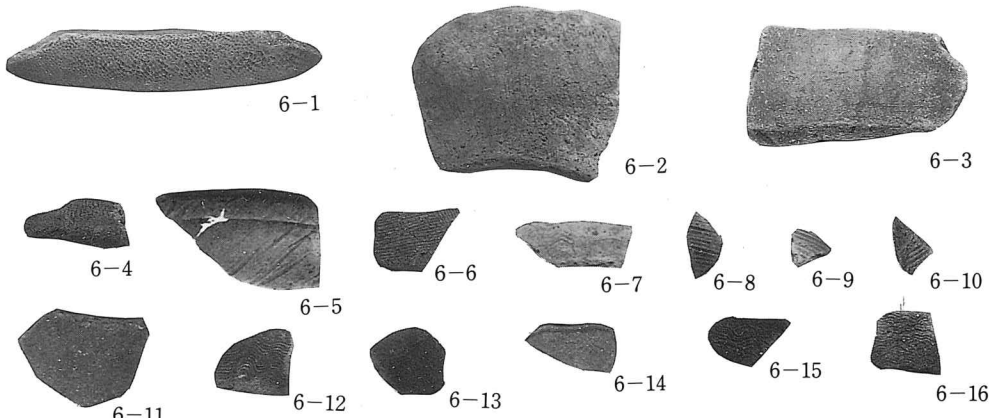
3 H 7号住居址カマド



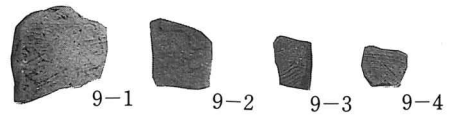
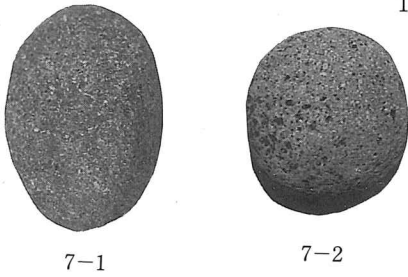
1 H8号住居址（南方より）



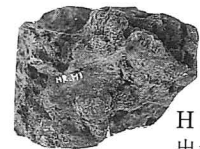
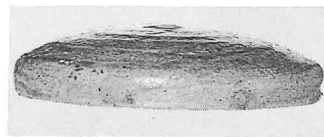
2 H8号住居址完掘状態（南方より）



1 Y 1号住居址出土土器



2 Y 2号住居址出土土器



H 1号住居址  
出土の鉄滓

3 H 1号住居址出土土器



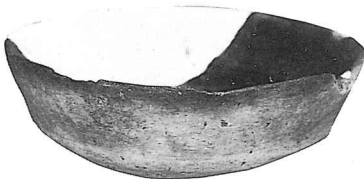
19-8



19-9



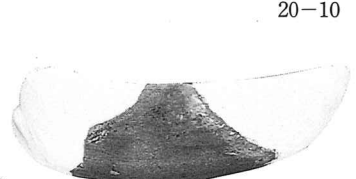
20-10



20-11



20-12



20-13

4 H 2号住居址出土土器





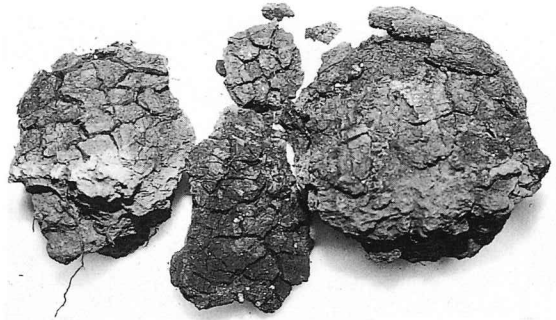
18-1



18-4



18-3

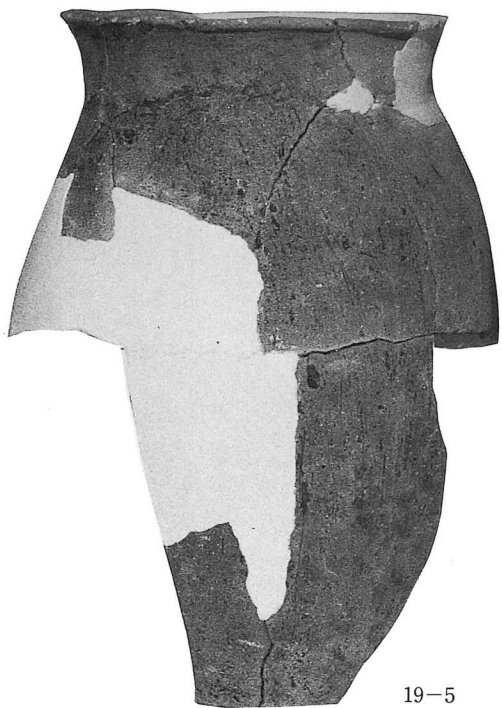


18-4 甕出土の食物



18-3 出土の食物

1 H 2 号住居址出土土器



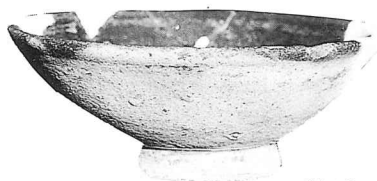
1 H2号住居址出土土器



1 H 2号住居址出土土器一括セット



24-1



24-2



24-3

2 H 3号住居址出土土器



27-3



鉄鏃



27-6



27-7

3 H 4号住居址出土土器・鉄鏃

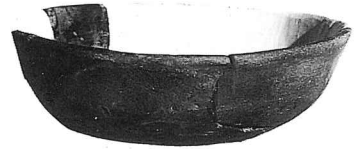


27-1

1 H 4号住居址出土土器



34-2



34-4



34-5



34-7

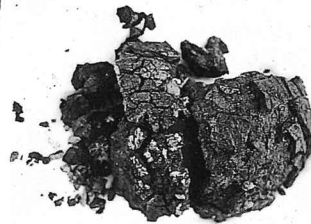


34-6

2 H 5号住居址出土土器



41-2

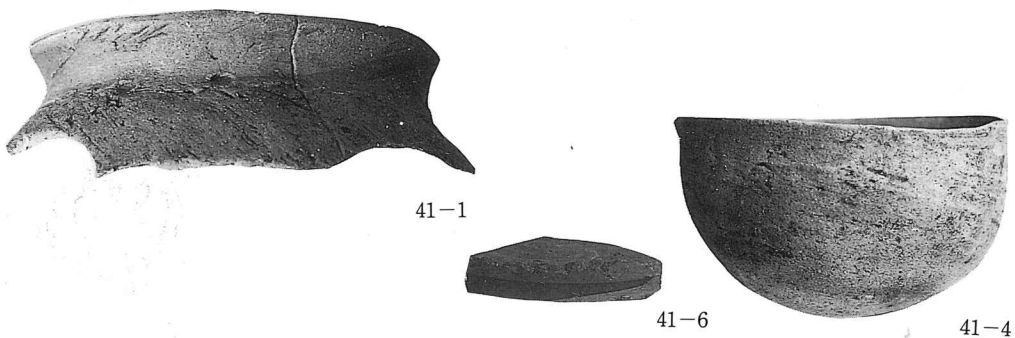


41-2 甕出土の食物

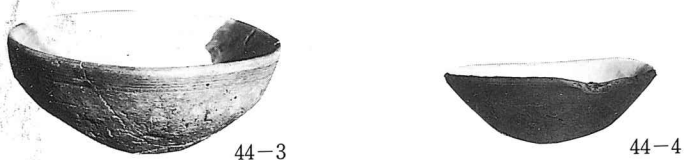


41-3

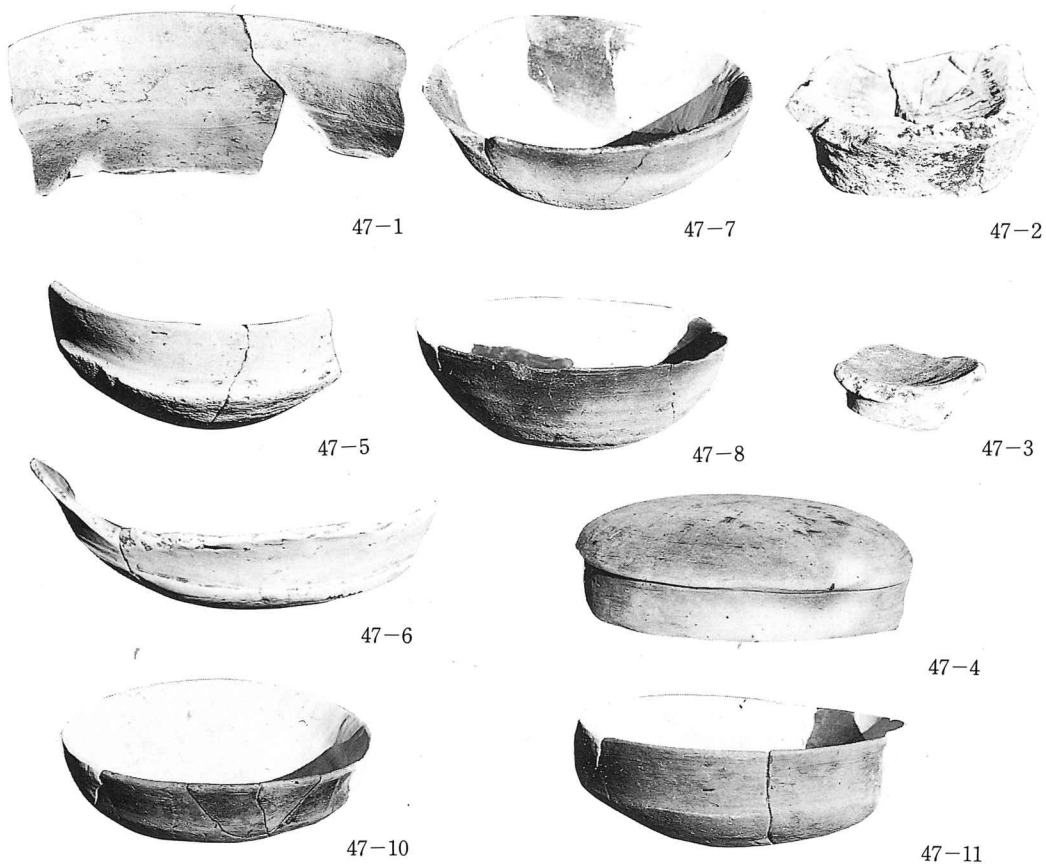
3 H 6号住居址出土土器



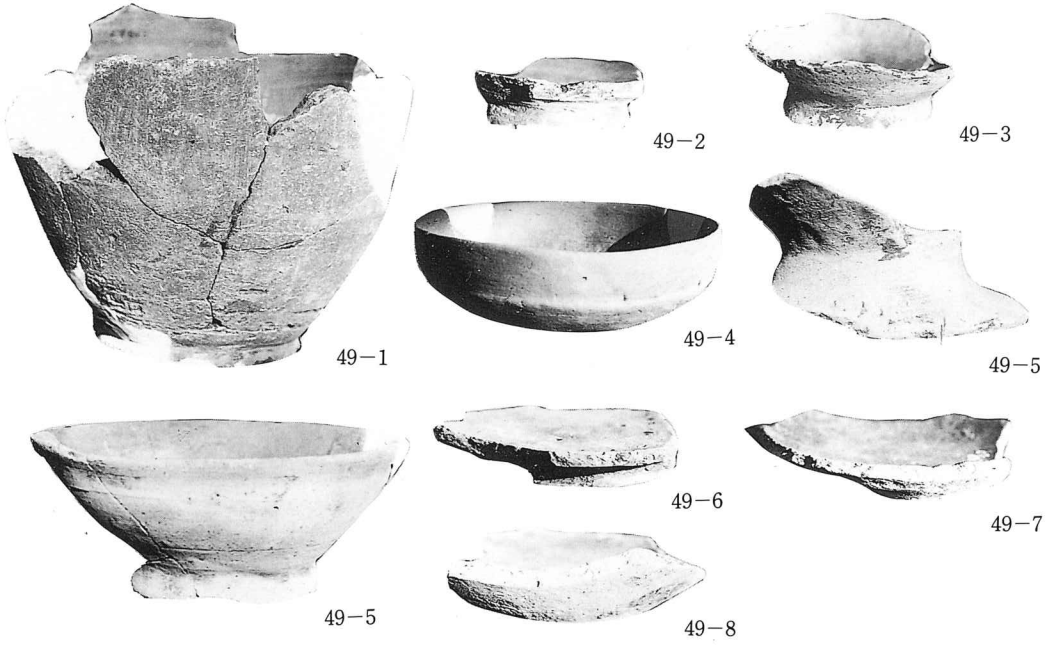
1 H 6 号住居址出土土器



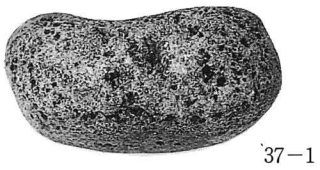
2 H 7 号住居址出土土器



3 H 8 号住居址出土土器



1 耕作土出土土器



2 H 6 号住居址出土凹石



50-1



50-2

3 大形打製石斧



1 H 5 号住居址出土のコモ編の重し石 (35・36-1~16)

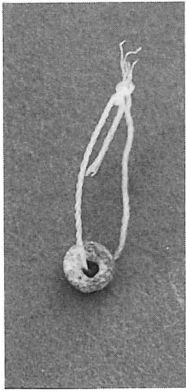


打製石斧

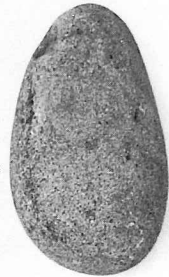
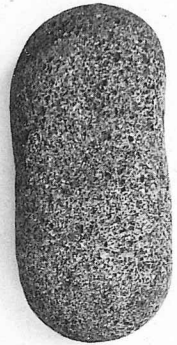
51-1



1. 耕作土出土の縄文後期の土器

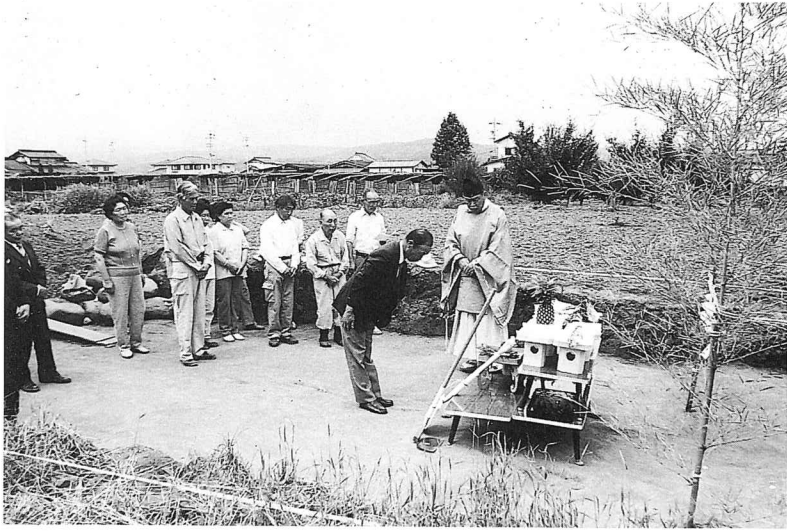


白玉



2 耕作土・H 8号住居址出土石器類(47-1~7)





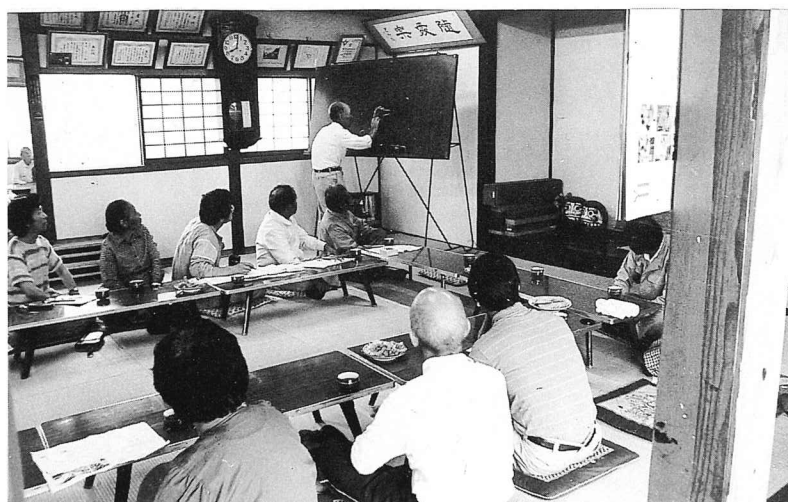
1 地鎮祭



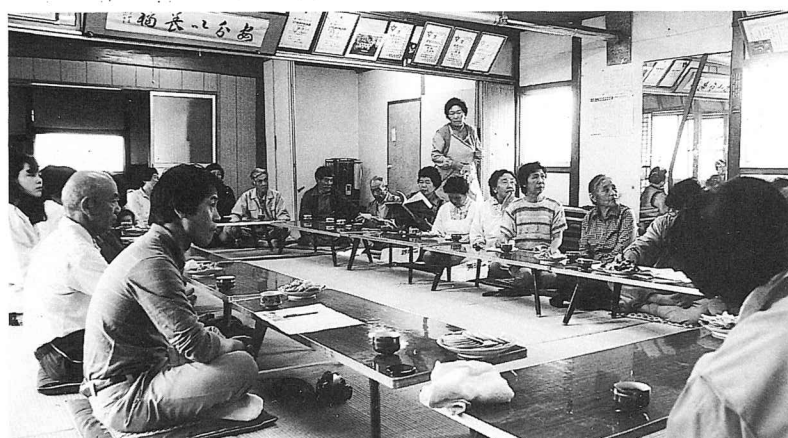
2 発掘調査団



1 雨の中での現地説明会(第1地点)



2 現地説明会の後、公民館にて懇談会



## 原 遺 跡

発行日 平成元年3月10日

編集者 原遺跡発掘調査団

発行者 白田町教育委員会

印刷所 ほおずき書籍株式会社